東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第 10 回目にあたり、2018 年３月に 2017 年度の卒業生 3,092 名を対象として実施し、2,463 名から回答をいただき、回収率は 79.7%であった。調査の実施には各学部に多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生のみなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。新たにたずねる調査項目や状況に合わない項目などが増えてきたため、9 回目の調査を実施する前に、総長補佐３名と大学総合教育研究センターでワーキンググループを設置し、そこで大幅なリニューアルを行った。今年度の調査では、関係者の助言を入れ質問項目をさらに追加した。みなさまのご尽力に改めて感謝したい。また、過去１０回の調査で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は１０回目の試みであり、回収率は前回よりやや上昇している。また、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関して、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生のみなさんの調査へのご協力をお願いしたい。

2018年6月

大学総合教育研究センター長

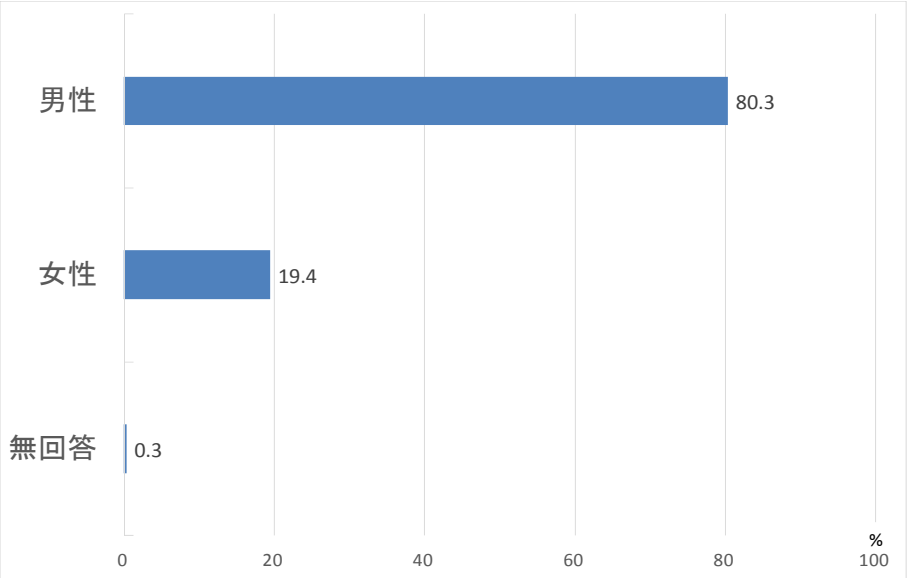
須藤 修

調査実施方法

○アンケート配布日　　：2018 年３月 23 日（卒業式）
○2018 年３月卒業者数　　：3,092 名
○有効回収数　　：2,463 票
○回収率　　：79.7%（回収率は、有効回収数/卒業者数 で計算した）
※学部（各学科）が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。
※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して 100%にならない場合がある。

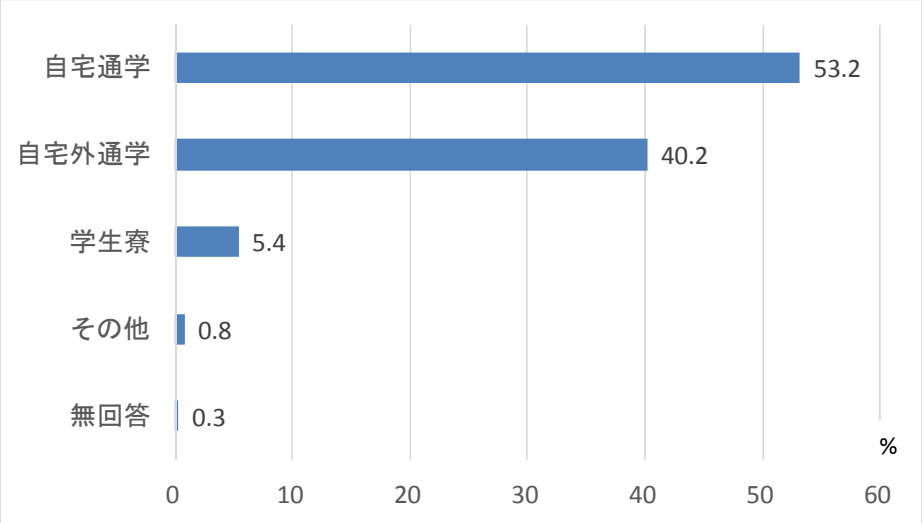
回答者の特性

Ｑ５　性別



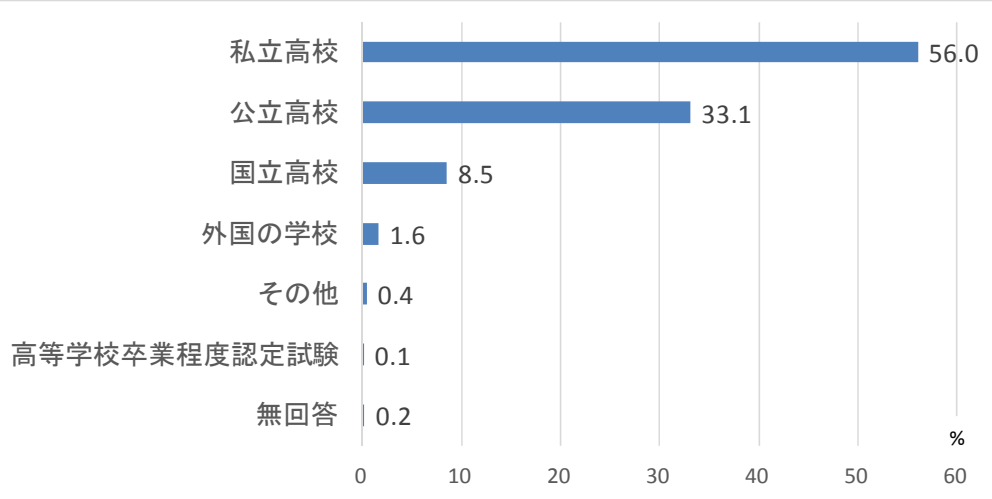
回答者は男性が８割（80.3%）、女性が２割（19.4%）、無回答0.3%となっている。

Ｑ６　通学



回答者のうち、自宅通学はおよそ半数の53.2%、自宅外通学は40.2%で、学生寮は5.4%と少ない。

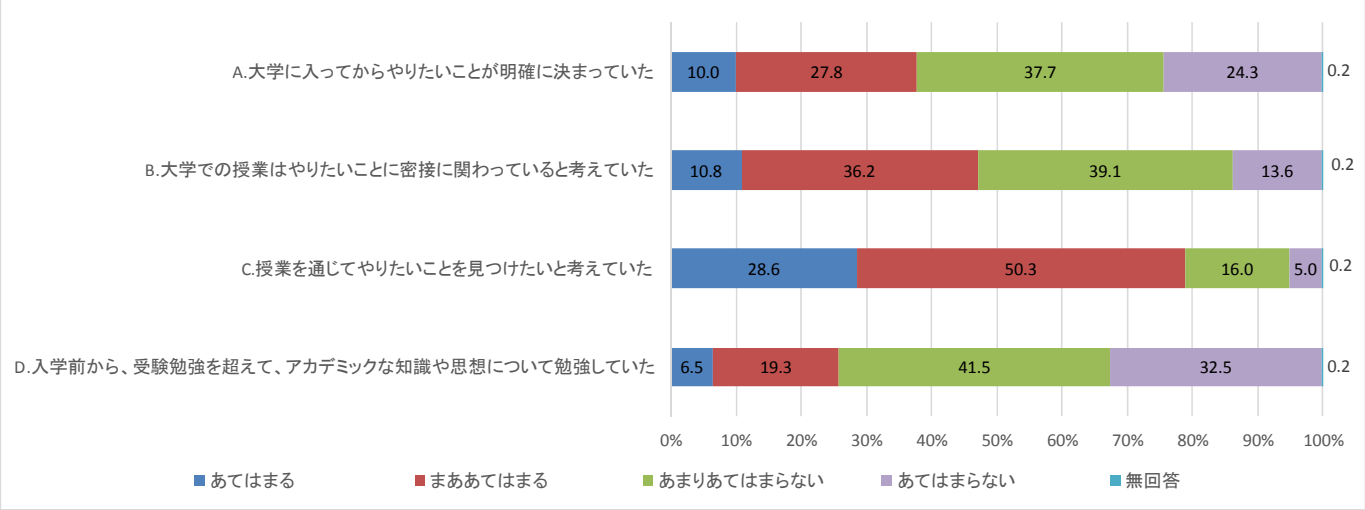
Ｑ７　出身高校等



回答者のうち、過半数（56.0%）は私立高校出身で、次いで公立高校が約３分の１（33.1%）、国立高校が１割弱（8.5%）となっている。また、外国の学校は1.6%となっている。

入学時:「やりたいことが明確」は４割弱、「授業を通じて見つけたい」は８割弱、「入学前からアカデミックな知識や思想について勉強していた」は４分の１

Ｑ８　入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。



「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」(「あてはまる」10.0%と「まああてはまる」27.8%を合わせて 37.8%、以下同じ)や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」者(47.0%)はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つけたいと考えていた」者が 78.9%と、入学時には、東京大学の教育の特徴である Late Specialization に沿った学習志向性を持っていた。一方、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者は、25.8%である。

「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、2008 年度は「あてはまる」10.0%と「まああてはまる」30.5%を合わせて 40.5%であった。その後はやや減少傾向にあり、2017 年度は 37.8%となり、2016 年度の 38.7%を若干下回っている（時系列の傾向については 26 頁以下を参照)。同じように、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は、2008 年度は「あてはまる」6.3%と「まああてはまる」19.4%を合わせて 25.7%であった。それ以降やや減少傾向にあったが、わずかながら、2017 年度の割合は 2016 年度（25.3%）を上回っている。こうした時系列の変化については、後に詳細に検討する。その他の項目について、こうした時系列の変化に傾向性がない。以下、とくに目立った傾向がないものについては、特に記載しない。

大学時代を通じての経験

前期課程・後期課程を問わず、「趣味やスポーツなどが充実した」、「議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」、「一つのことに没頭して取り組んだことがある」、「研究室やサークルなどのＯＢ、ＯＧと知り合いになれた」のあてはまる割合は６割以上
「自分の専門以外の本をよく読んだ」のあてはまる割合は前期課程が大きい。「アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた」、「自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」、「専門書や学術雑誌をよく読んだ」について、後期課程のあてはまる割合が大きい
「前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につかなかった」と「後期課程では授業についていくのに苦労した」の両方にあてはまる回答者は約2割

Ｑ９　大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。前期課程と後期課程について、それぞれお答えください。

	前期課程（%）			後期課程（%）		
	あてはまる	まああてはまる	合 計	あてはまる	まああてはまる	合 計
A. アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた	7.1	27.4	34.5	19.5	44.8	64.3
B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた	6.7	18.3	25.0	13.8	30.0	43.8
C. 一つのことに没頭して取り組んだことがある	38.5	31.8	70.3	45.3	33.8	79.1
D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた	25.9	37.8	63.7	36.0	40.9	76.9
E. 優れた友人に感化された	36.4	36.5	72.9	45.4	35.2	80.6
F. 研究室やサークルなどのＯＢ、ＯＧと知り合いになれた	39.3	25.7	65.0	43.6	29.2	72.8
G. 自分の専門以外の本をよく読んだ	18.0	31.3	49.3	16.3	26.8	43.1
H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ	7.2	17.8	25.0	19.2	36.8	56.0
I. 趣味やスポーツなどが充実した	48.0	31.6	79.6	38.1	31.1	69.2
J. 勉強したい専門がなかった	9.8	28.7	38.5	5.2	19.3	24.5
K. 前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につかなかった	11.6	31.5	43.1			
L. 後期課程では授業についていくのに苦労した				9.7	27.7	37.4
M. 就職活動に時間をさきすぎた				3.4	8.2	11.6

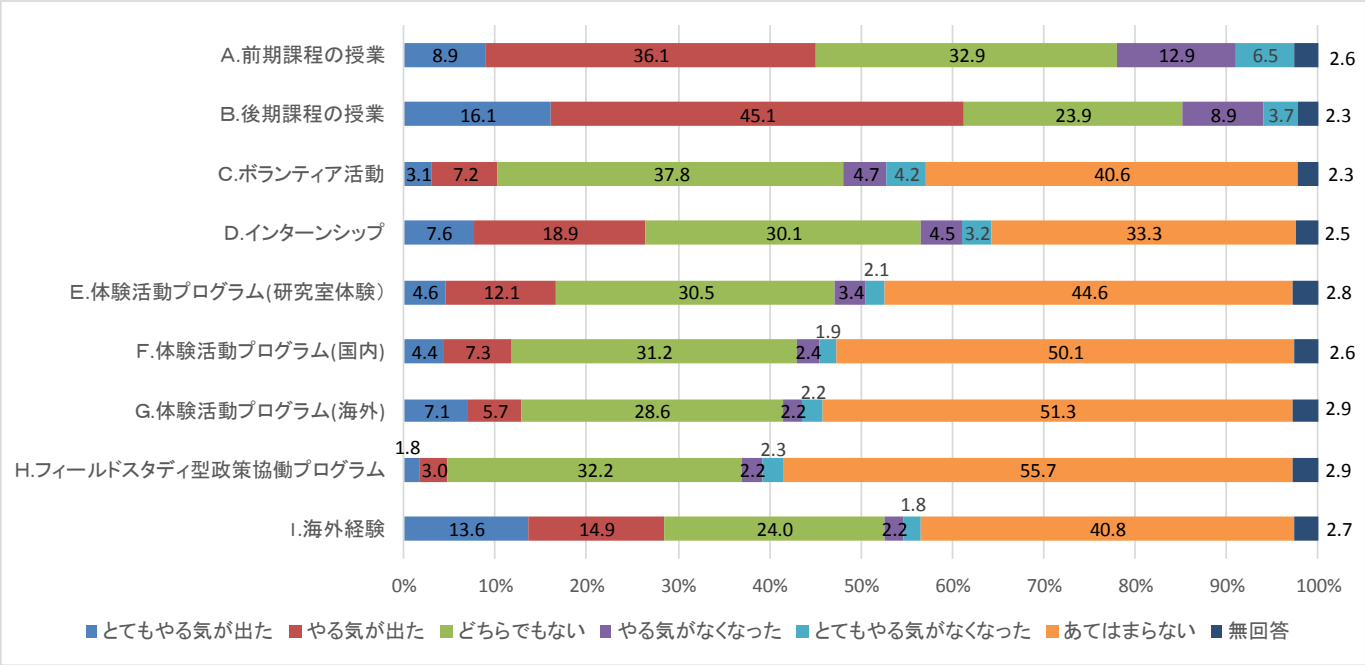
2016 年度より、上の表に示す各項目について、前期課程と後期課程ではそれぞれどの程度あてはまるかを回答者にたずねた。「あてはまる」と「まああてはまる」割合の合計をみると、前期課程では、「Ｉ. 趣味やスポーツなどが充実した」(79.6%)、「E. 優れた友人に感化された」(72.9%)、「C. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」(70.3%)のあてはまる割合が最も高く、７割を上回っているのに対して、「H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ」と「B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」は 25.0%にすぎない。一方、後期課程での各項目の「あてはまる」と「まああてはまる」の割合を合わせると、「E. 優れた友人に感化された」(80.6%)、「C. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」(79.1%)、「D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」(76.9%)は７割半以上と大きく、「M. 就職活動に時間をさきすぎた」(11.6%)と「Ｊ. 勉強したい専門がなかった」(24.5%)の割合が低いことがわかる。

前期課程と後期課程の共通した項目のあてはまる割合を比べると、「C. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」、「D. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」、「E. 優れた友人に感化された」、「F. 研究室やサークルなどのＯＢ、ＯＧと知り合いになれた」、「Ｉ. 趣味やスポーツなどが充実した」は前期・後期を問わず、６割以上と大きい。しかし、前期課程と後期課程のあてはまる割合が明確に異なる項目も見られる。「G. 自分の専門以外の本をよく読んだ」は前期課程のあてはまる割合が大きい。「A. アカデミックな雰囲気の中に自分を置いた」(前期課程 34.5%、後期課程 64.3%)、「B. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた」(前期課程 25.0%、後期課程 43.8%)、「H. 専門書や学術雑誌をよく読んだ」(前期課程 25.0%、後期課程 56.0%) について、後期課程のあてはまる割合が前期課程を大きく上回っている。概ね、後期課程での経験がより高く評価されている。

さらに、「K. 前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につかなかった」(43.1%)と「L. 後期課程では授業についていくのに苦労した」(37.4%)は、昨年同様、それぞれ 4 割前後があてはまる結果になっている。K と L の両方にあてはまる回答者の割合、つまり前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につかず、かつ後期課程では授業についていくのに苦労した者の割合は全体の 21.5%である（表略)。

勉強のやる気が出たきっかけ：「前期課程の授業」４割半、「後期課程の授業」６割、「海外経験」３割弱、「インターンシップ」２割半

Ｑ１０　大学生活のなかでなにかがきっかけになって、勉強のやる気が出たり、なくなったことがありますか。

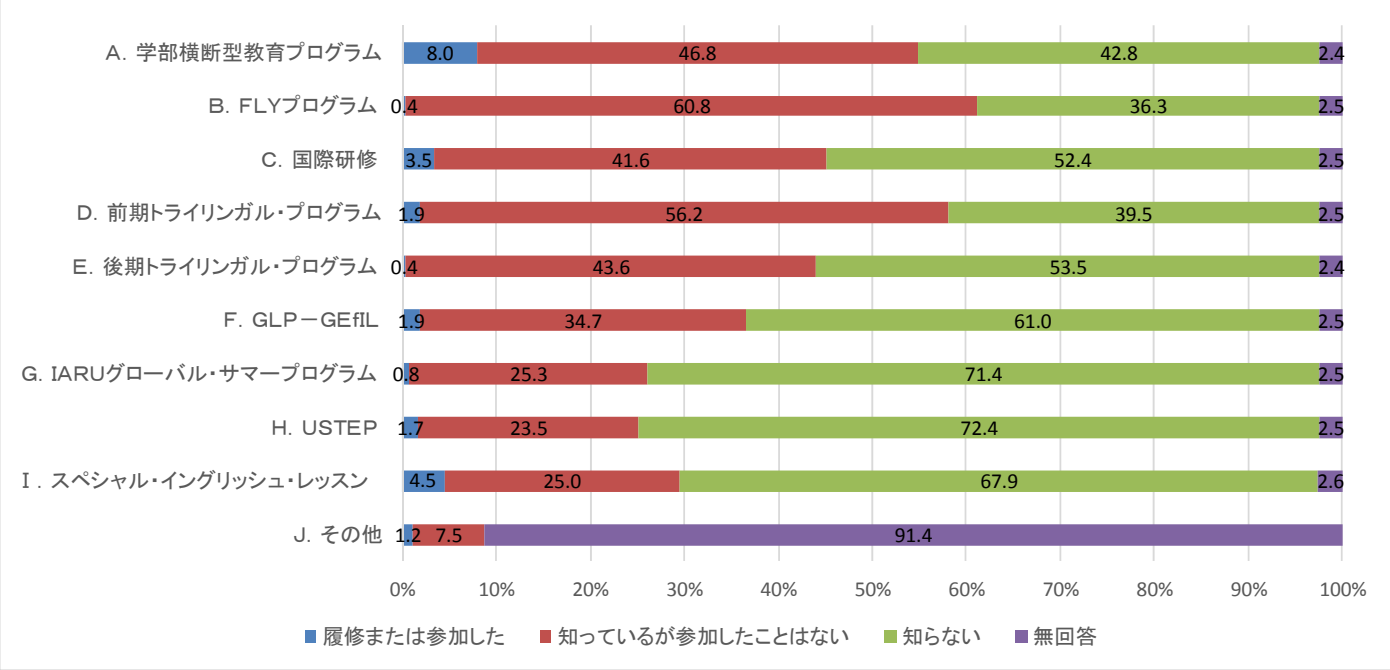


大学生活のなかで勉強のやる気が出たり、なくなったことのきっかけについて、今年度から現在の９項目に増やしてたずねている。「A. 前期課程の授業」でやる気が出た割合は 45. 0%(「とてもやる気が出た」8. 9%、「やる気が出た」36. 1%)に対して、「B. 後期課程の授業」でやる気が出た割合は 61. 2%(「とてもやる気が出た」16. 1%、「やる気が出た」45. 1%)である。「C. ボランティア活動」、「E. 体験活動プログラム(研究室体験)」と「I. 海外経験」について、「あてはまらない」割合が４割あるなか、「I. 海外経験」がきっかけでやる気が出た割合が 28. 5%(「とてもやる気が出た」13. 6%、「やる気が出た」14. 9%)で最も高い。「D. インターンシップ」について、「あてはまらない」者が 33. 3%ある一方、「やる気が出た」と回答した割合も 26. 5%ある。「F. 体験活動プログラム(国内)」、「G. 体験活動プログラム(海外)」と「H. フィールドスタディ型政策協働プログラム」の「あてはまらない」割合はいずれも５割以上ある。そのような体験がきっかけで、やる気が出た割合はそれぞれ 11. 7%、12. 8%と 4. 8%である。

前期課程の授業でやる気をなくした回答者は 19. 4%あった。後期課程の授業でやる気をなくした回答者も 12. 6%ある。各種体験活動の参加率はそれほど高くない。経験者のやる気への影響に関しても「どちらでもない」の割合が比較的大きい。また、こうした体験活動がきっかけでやる気をなくした人の割合はいずれも 10%未満で、「C. ボランティア活動」と「D. インターンシップ」の比率がやや高い。

大学が提供する各種プログラムの履修または参加率はいずれも低い。「知らない」割合も高い

Ｑ１１　大学が提供するプログラムの履修または参加について



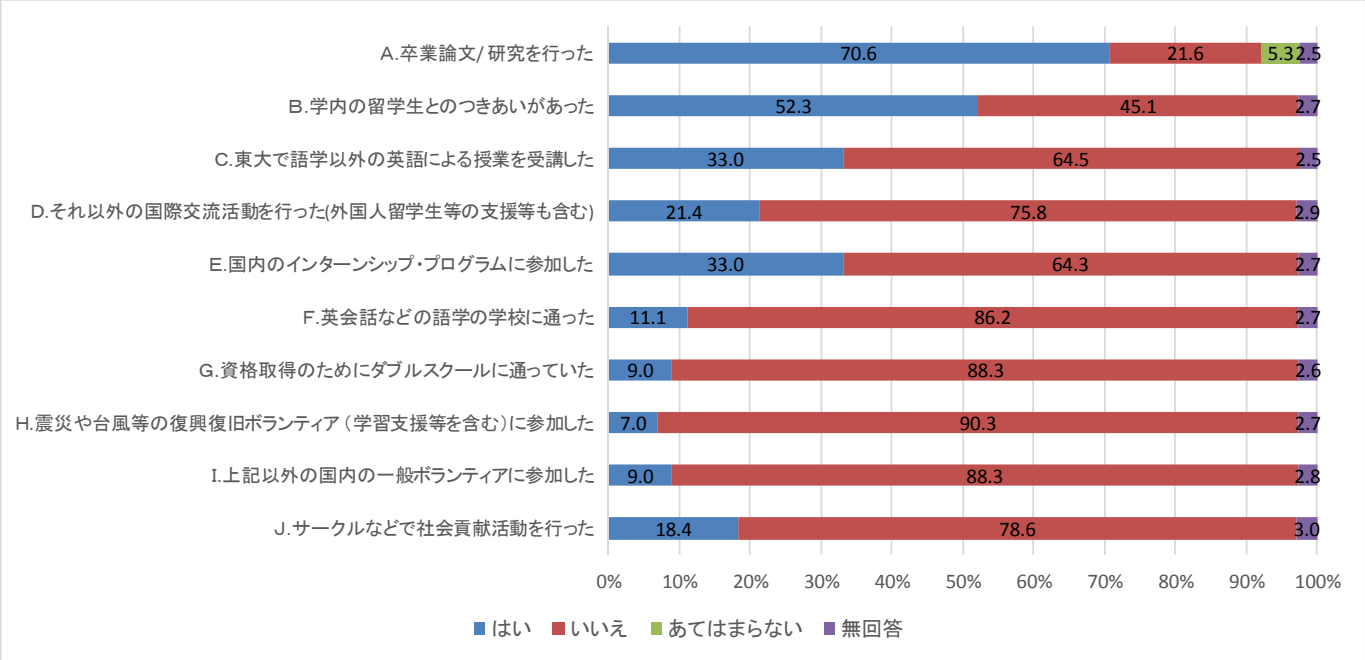
昨年度の卒業生調査から、大学が提供する各種プログラムの履修または参加状況をたずねている。そのなか、「I. スペシャル・イングリッシュ・レッスン」は 2005 年度に早くも工学部で提供され、2010 年度から本郷キャンパス全体で開講している。「G. IARU グローバル・サマープログラム」も 2008 年度よりスタートしている。「D. 前期トライリンガル・プログラム」のように入学時に一定レベルの英語力を有すると認められる学生（上位 1 割程度）から希望者を募る場合もあれば、「F. GLP-GEfIL」のように履修上限人数を設ける場合もある。

回答では、「A．学部横断型教育プログラム」の履修または参加率が最も高く、8.0%である。AからＩまでの各項目の「知らない」と「知っているが参加したことはない」の割合を合わせると、いずれも 9 割以上と高い。「知らない」の高い項目は「USTEP」、「IARU グローバル・サマープログラム」、「スペシャル・イングリッシュ・レッスン」、「GLP-GEfIL」で 6 割をこえている。また、「知っているが参加したことはない」は、「FLY プログラム」、「前期トライリンガル・プログラム」、「学部横断型教育プログラム」、「後期トライリンガル・プログラム」、「国際研修」となっている。参加人数等に制限があるものや各種プログラムの開始時期に差があるため、これらのことを考慮する必要がある。

在学時の学習機会・経験

「卒業論文/研究を行った」比率は７割、「学内の留学生とのつきあいがあった」約５割、「東大で語学以外の英語による授業を受講した」３分の1、大学の外で学習機会を得る比率と諸活動の体験率が低い

Ｑ１２　国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

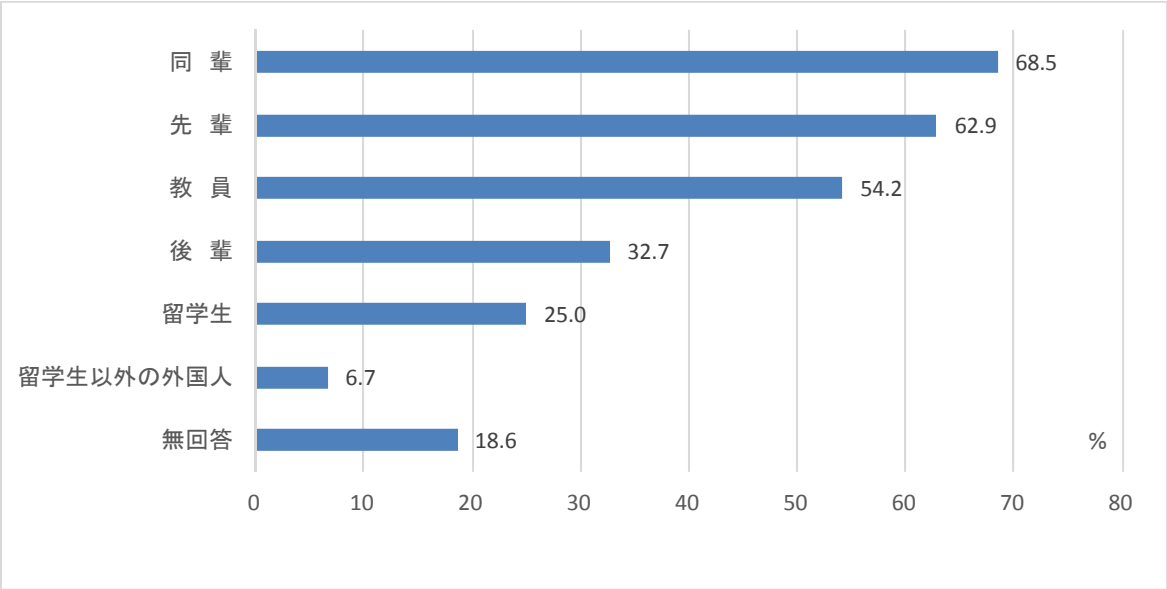


国内の在学時の学習機会・経験について、「A. 卒業論文/研究を行った」を経験した比率が 70. 6%と最も高く、「B. 学内の留学生とのつきあいがあった」52. 3%、「C. 東大で語学以外の英語による授業を受講した」33. 0%、「E. 国内のインターンシップ・プログラムに参加した」33. 0%、「D. それ以外の国際交流活動を行った（外国人留学生等の支援等も含む）」21. 4%の順で経験率が低くなる。「G. 資格取得のためにダブルスクールに通っていた」（9. 0%）、「F. 英会話などの語学の学校に通った」（11. 1%）、「H. 震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等を含む）に参加した」（7. 0%）の経験率は 10%前後にとどまる。

全体として、大学の取り組みと関係のないところで学習機会を得る比率や諸活動の体験率が低い。

「教員とのアカデミックな交流」５割半、「同輩」７割弱、「先輩」６割強、「後輩」３割強、「留学生と留学生以外の外国人」約３割

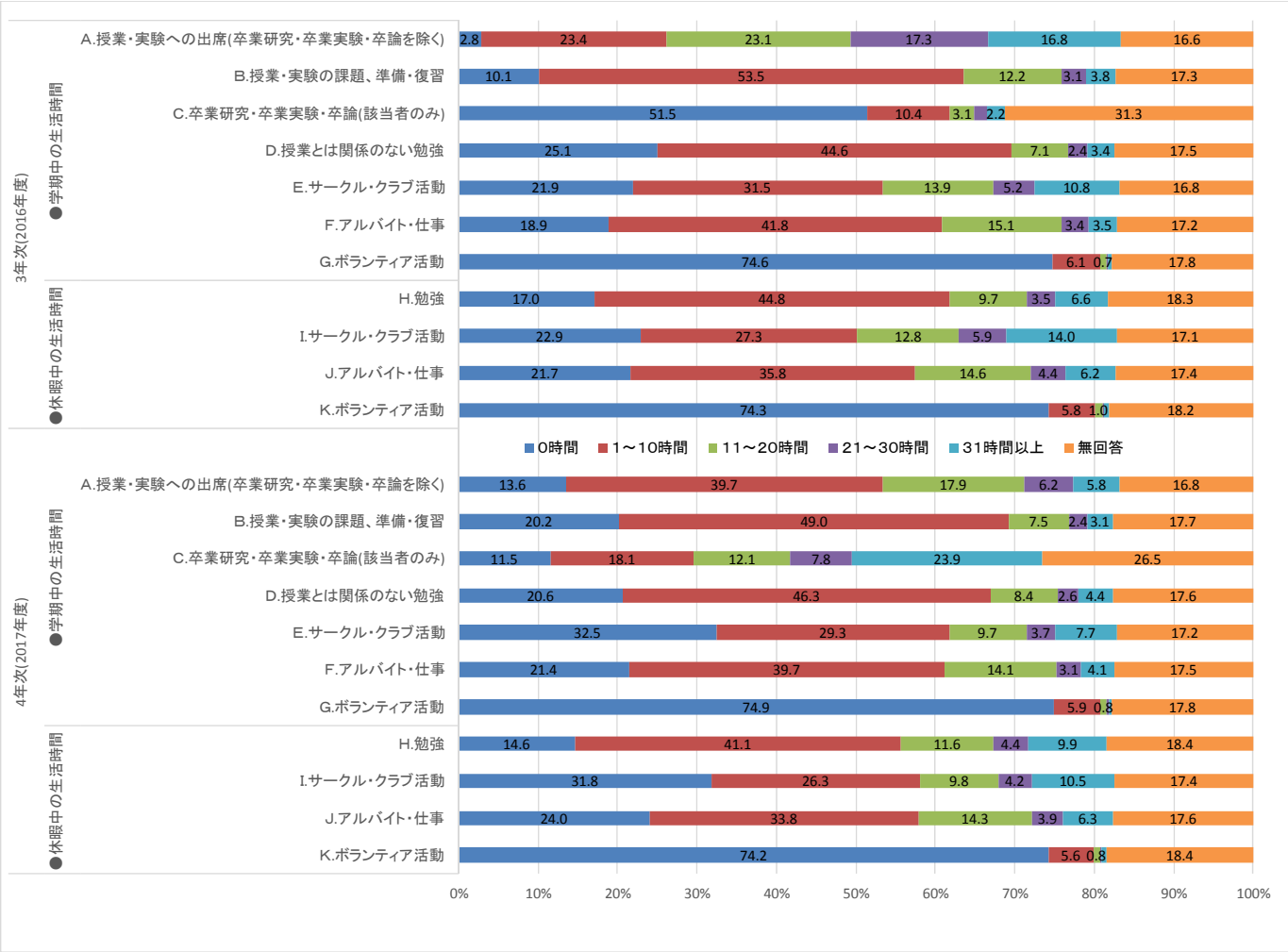
Ｑ１３　あなたは授業外で、本学のつぎのような人とアカデミックな交流がありましたか。（複数回答）



教員などとの学問的な交流について、質問文は 2016 年度よりこれまでの「あなたは、つぎのような人と学問的な交流がありましたか」から、「あなたは授業外で、本学のつぎのような人とアカデミックな交流がありましたか」に変更し、授業外でのアカデミックな交流の有無をたずねている。結果的に、最もアカデミックな交流があったのは「同輩」で、７割弱（68.5%）、次いで「先輩」62.9%、「教員」54.2%となっており、「後輩」は３分の１以下（32.7%）、「留学生」（25.0%）と「留学生以外の外国人」（6.7%）を合わせると 31.7%となる。なお、この質問の今年度の無回答率も 18.6%と高い。授業外でのアカデミックな交流に絞ったことと無回答率の違いがあるため、これまでの調査結果と比較するには留意が必要である。

生活時間　４年制課程
３年次学期中：「授業・実験の課題、準備・復習」は週に「10時間以下」が６割強
４年次学期中：「授業・実験の課題、準備・復習」は週に「10時間以下」が７割弱、「卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ)」は週に「31時間以上」が約４分の１
休暇中の「勉強」は３年次、４年次を問わず、週に「１～10時間」が４割強。「ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「０時間」が約７割半

Ｑ１４　典型的な１週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、１週間の合計が168時間となるように、2016年度と2017年度にそれぞれ活動へ何時間あててきたか、およその時間数に該当する数字を1つ選んで、それぞれの欄に記入してください。

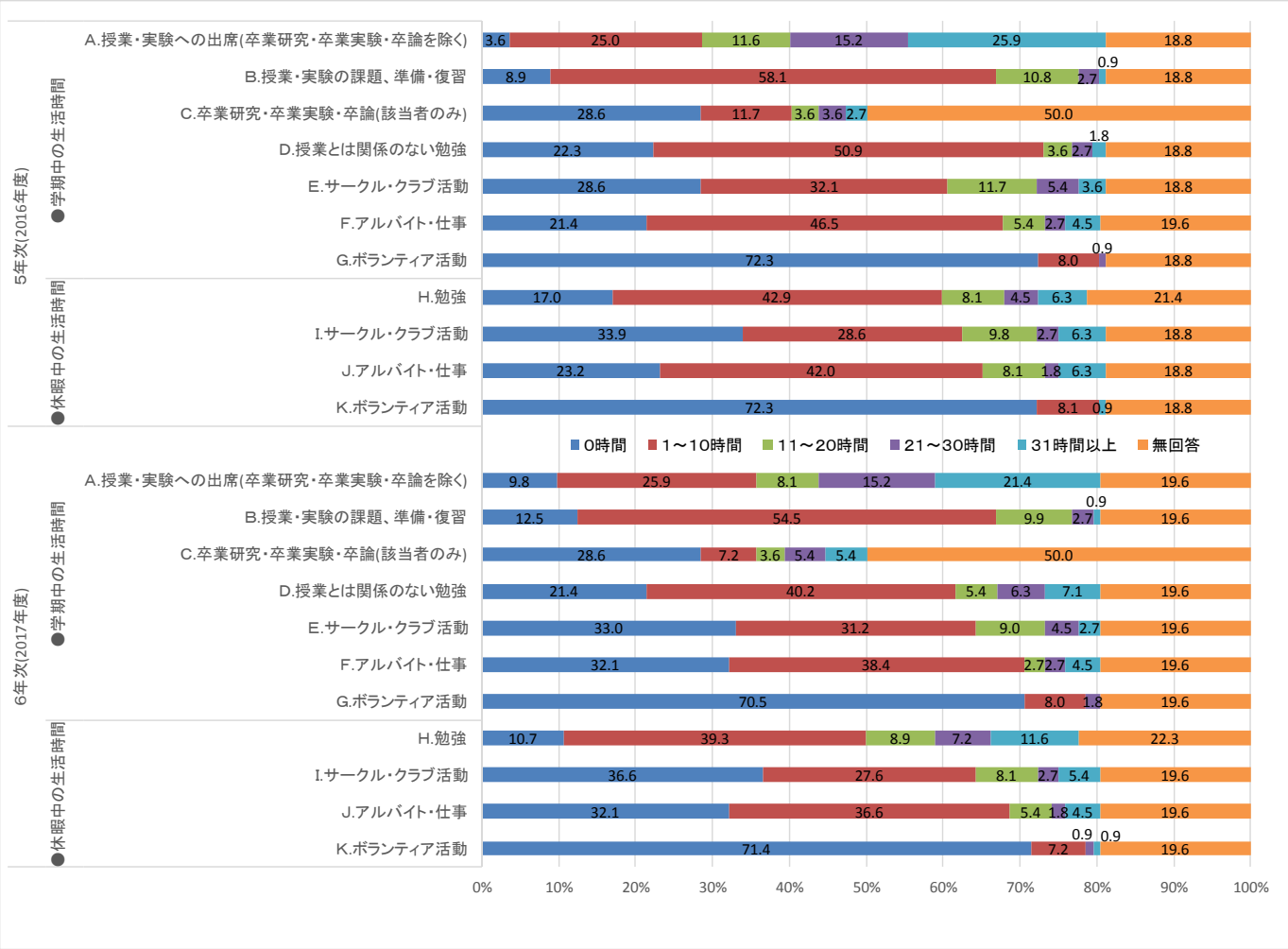


生活時間については、典型的な１週間（土、日を含む）の時間数を学期中と休暇中について、それぞれ３年次と４年次の状況をたずねた。

学期中の生活時間をみると、３年次には「Ｂ.授業・実験の課題、準備・復習」は「10 時間以下」が６割強（63.6%）、４年次では７割弱（69.2%）となっている。「Ｃ.卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は４年次では「31 時間以上」が 23.9%で、最も高い割合を占めている。また、「Ｄ.授業とは関係のない勉強」について、「０時間」は３年次では 25.1%、４年次でも 20.6%となっており、どの年次の割合も 2016 年度より少し高い。休暇中の生活時間をみると、３年次、４年次を問わず、「Ｈ.勉強」は「１～10 時間」が 40%余りと最も比率が高く、「11～30 時間」が 15%前後、「31 時間以上」が 10%未満となる。さらに３年次、４年次を問わず、「Ｉ.サークル・クラブ活動」は「１～10 時間」３割弱、「Ｊ.アルバイト・仕事」は「１～10 時間」３割強で、それぞれのカテゴリのなかで大きい割合を占める。「Ｋ.ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「０時間」の割合が約７割半と高い。

生活時間　６年制課程
５年次・６年次を問わず、学期中の「授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が６割半、休暇中の「勉強」は週に「１～10時間」が４割前後。「ボランティア活動」について、学期中か休暇中を問わず、「０時間」が7割以上

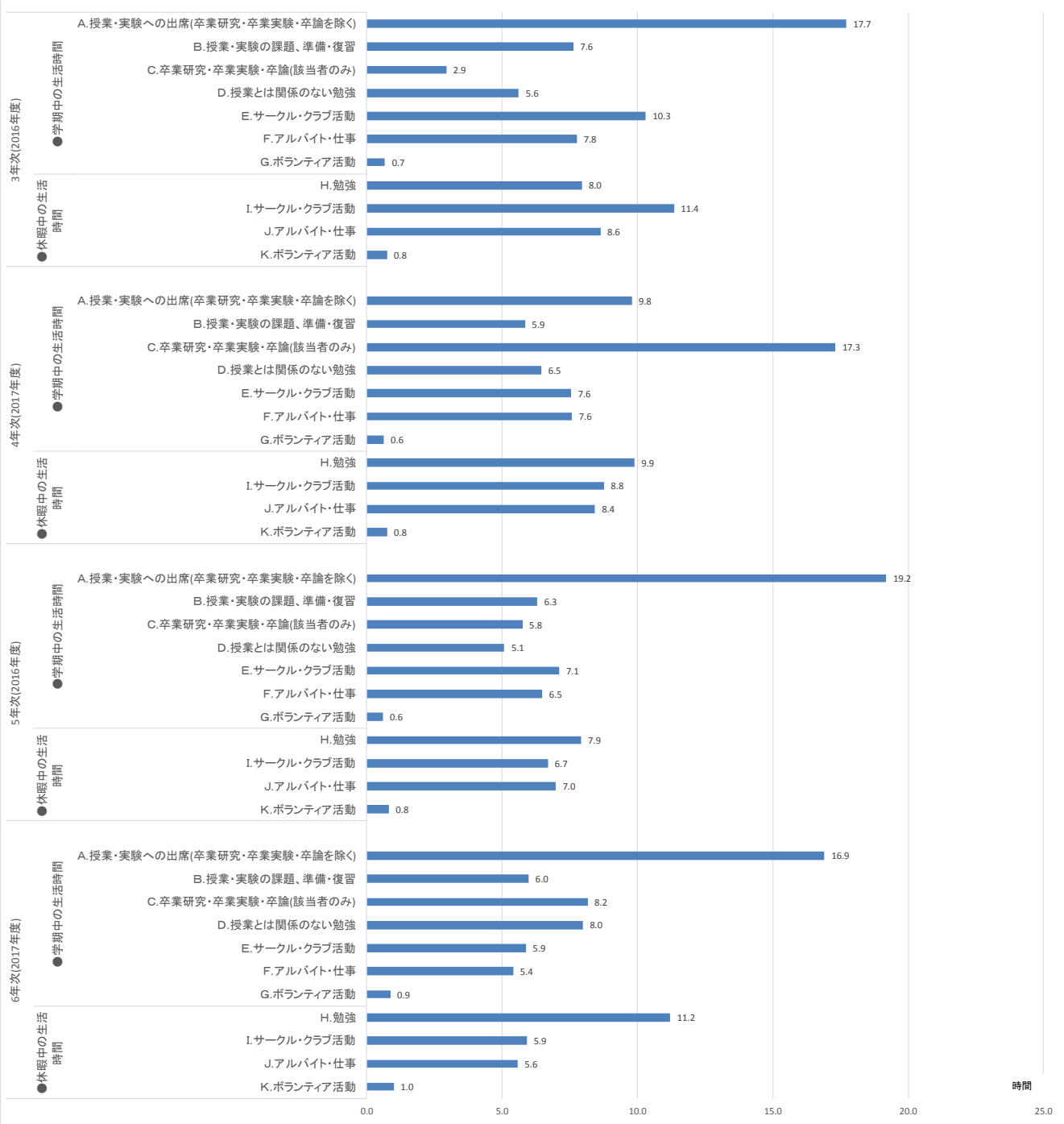
Ｑ１４　典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、2016年度と2017年度にそれぞれ活動へ何時間あててきたか、およその時間数に該当する数字を1つ選んで、それぞれの欄に記入してください。



６年制課程（医学科、獣医学課程、薬学科）については、５、６年次についてのみたずねた。学期中の時間をみると、５年次には「B.授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が６割半（67.0%）だが、「A.授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」も25.9%になっている。また、「D.授業とは関係のない勉強」が「０時間」は22.3%となっている。６年次では、「B.授業・実験の課題、準備・復習」も「10時間以下」が67.0%となっているが、「A.授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」は21.4%になっている。６年次では、「C.卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は「31時間以上」が5.4%となり、「０時間」が28.6%と、「無回答」を除けば最も高い割合を占めている。また「D.授業とは関係のない勉強」も「０時間」が21.4%となっている。

休暇中の生活時間をみると、５年次、６年次を問わず、「H.勉強」は「１～10時間」が４割前後で最も比率が高く、「11～30時間」が15%前後、「31時間以上」は10%前後となる。さらに５年次、６年次を問わず、「Ｉ.サークル・クラブ活動」は「１～10時間」が３割弱、「J.アルバイト・仕事」は「１～10時間」が４割前後である。「K.ボランティア活動」について、年次を問わず、学期中か休暇中を問わず、「０時間」の割合が７割以上と高い。

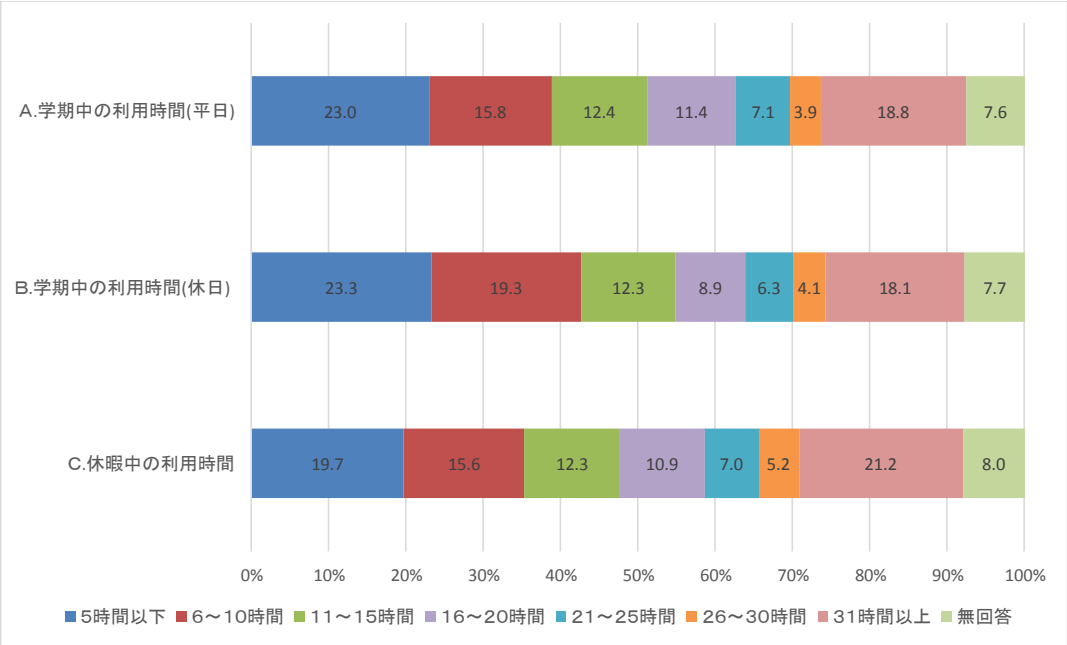
３年次：「授業」18時間、「予習復習」８時間、「卒研卒論」３時間、「授業外の学習」６時間
４年次：「授業」10時間、「予習復習」６時間、「卒研卒論」17時間、「授業外の学習」７時間
５年次：「授業」19時間、「予習復習」６時間、「卒研卒論」６時間、「授業外の学習」５時間
６年次：「授業」17時間、「予習復習」６時間、「卒研卒論」８時間、「授業外の学習」８時間



生活時間の回答のそれぞれの中位値（たとえば、「１～５時間」で３時間）を取り、平均を算出した。なお、「31時間以上」は33時間として算出した。学期中の時間数の平均で見ると、「A.授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」は、３年次で17.7時間、４年次には9.8時間となっている。「B.授業・実験の課題、準備・復習」は、３年次で7.6時間、４年次には5.9時間となっている。「C.卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」は、３年次で2.9時間、４年次には17.3時間となっている。また、「D.授業とは関係のない勉強」については、３年次で5.6時間、４年次で6.5時間となっている。いずれの年次も少し減少している。単純に合計すると、勉強時間は、３年次で33.8時間、４年次で39.5時間となっている。６年制の５年次と６年次も、４年制の３年次と４年次と同じような傾向がみられる。

インターネットの利用時間は、学期中･休暇中とも「５時間以下」が2割前後、「２６時間以上」が２割以上、平均は１５～１６時間

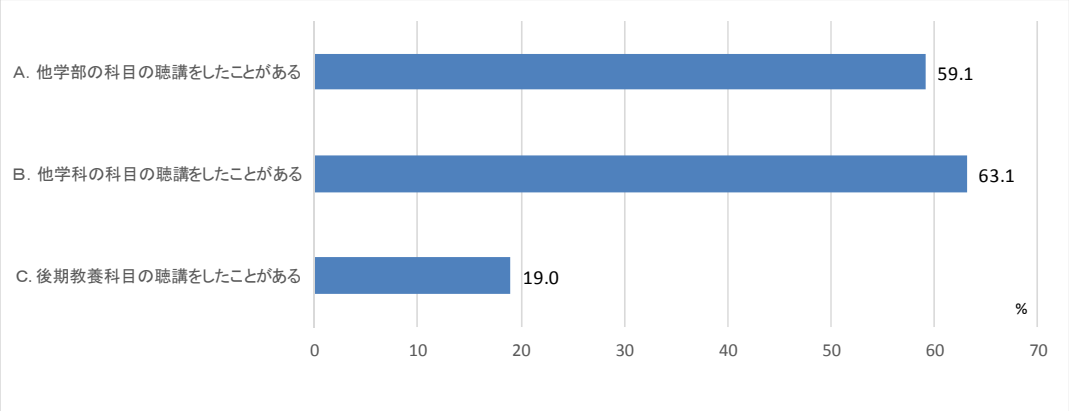
Ｑ１４－ＳＱ　上記の1週間のなかで、ＰＣ、タブレット、スマートフォンなど、すべて合わせてインターネット（ウェブ検索、ＳＮＳなど）を利用した時間はどのくらいですか。



2015年度からインターネットの利用時間をたずねている。学期中と休暇中では大きな差はないが、休暇中では週に「21時間以上」の長時間利用がやや多い。「５時間以下」は学期中(平日)が23.0%、学期中(休日)が23.3%、休暇中が19.7%であるのに対して、「26時間以上」は学期中(平日)が22.7%、学期中(休日)が22.2%、休暇中が26.4%となっている。平均時間を算出すると、学期中(平日）が15.7時間、学期中(休日)が15.1時間、休暇中が16.8時間となり、いずれも前年度より約１時間長くなっている。

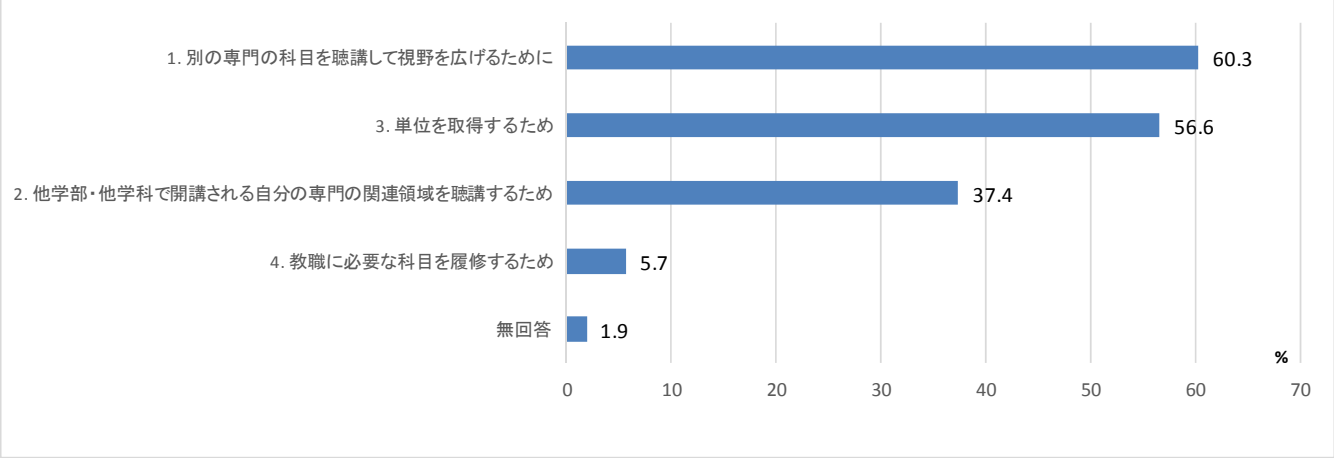
「他学部聴講」、「他学科聴講」の経験者は約６割、「後期教養科目」の聴講は約2割

Ｑ１５　他学部聴講等についてお聞きします。



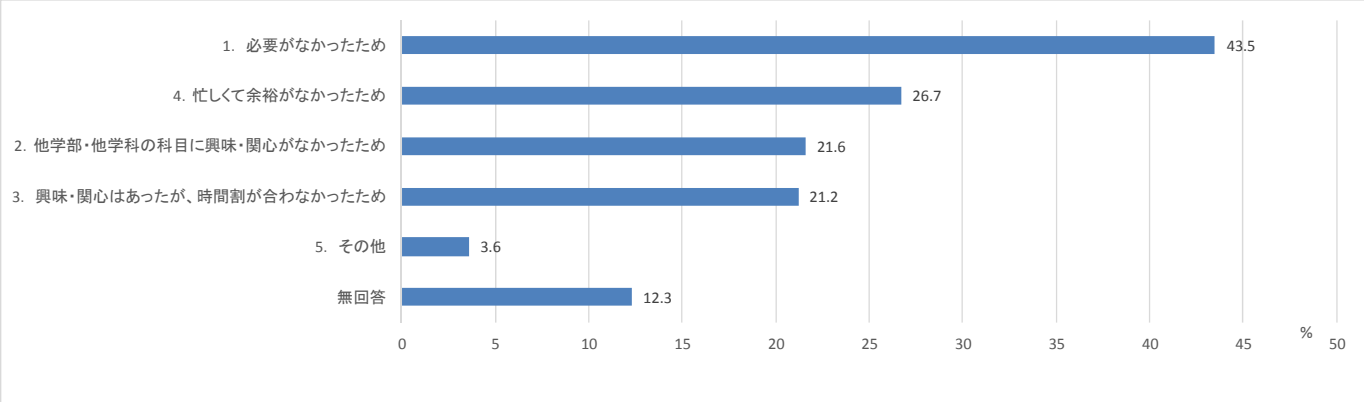
「A. 他学部の科目の聴講をしたことがある」者(59.1%)と「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」者(63.1%)は、６割前後となっている。「C. 後期教養科目の聴講をしたことがある」(19.0%)は２割弱となっている。「A. 他学部の科目の聴講をしたことがある」者と「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」者は2008 年度に調査を始めて以来やや増減している（32 頁)。「C. 後期教養科目の聴講をしたことがある」の割合は、昨年度より約 5%大きい。

Ｑ１５−ＳＱ１．上記Ａ、Ｂ、Ｃのどれかで「はい」と答えた人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。



他学部・他学科聴講や後期教養科目の受講をした者の意図は、「１.別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」が 60.3%と最も高い割合となっていて、次いで「３.単位を取得するため」も 56.6%と高い。

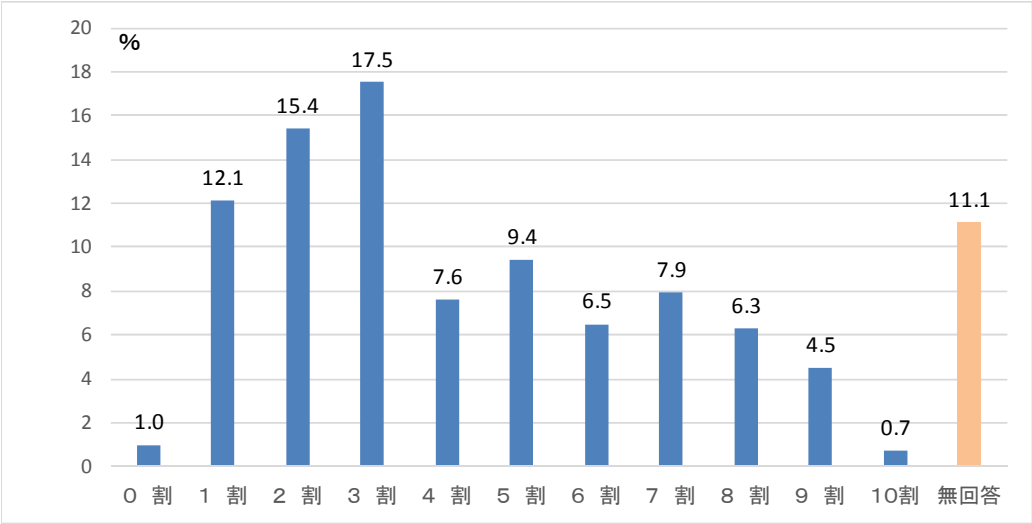
Ｑ１５−ＳＱ２．上記Ａ、Ｂ、Ｃのいずれも「いいえ」と答えた人にお聞きします。なぜ聴講しませんでしたか。



今回も、他学部・他学科聴講や後期教養科目を受講しなかった者に、その理由をたずねた。「必要がなかったため」が 43.5%と最も高い割合を占めて、昨年度より 3.9%増加している。次いで、「忙しくて余裕がなかったため」が 26.7%、「他学部・他学科の科目に興味・関心がなかったため」と「興味・関心はあったが、時間割が合わなかったため」がいずれも 21%台で、昨年度とほぼ変わらない。

「優の割合」は３割が最も多く、次いで２割と１割

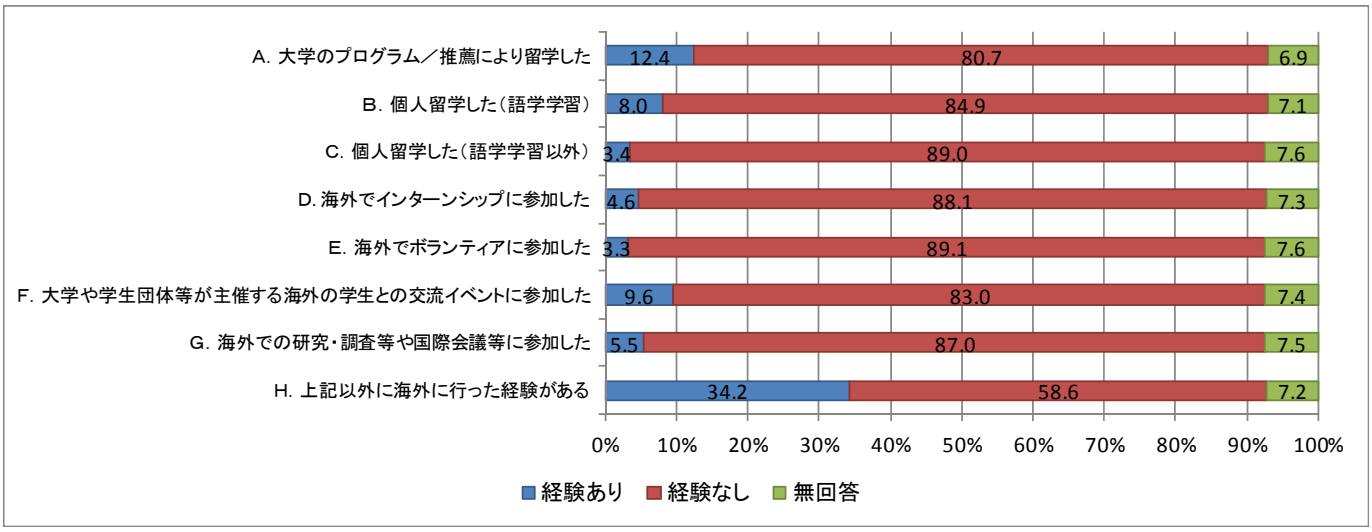
Ｑ１６　あなたの成績についてお聞きします。「優」（A）は何割くらいありましたか。数値を（　）に記入してください。「優上」を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「３割」が 17.5%と最も多く、次いで「２割」が 15.4%、「１割」が 12.1%となっており、対称ではなく、右に歪んだ分布になっている。「５割」、「７割」もそれぞれ 9.4%、7.9%とやや高い割合を占め、平均では、4.1 割となっている。

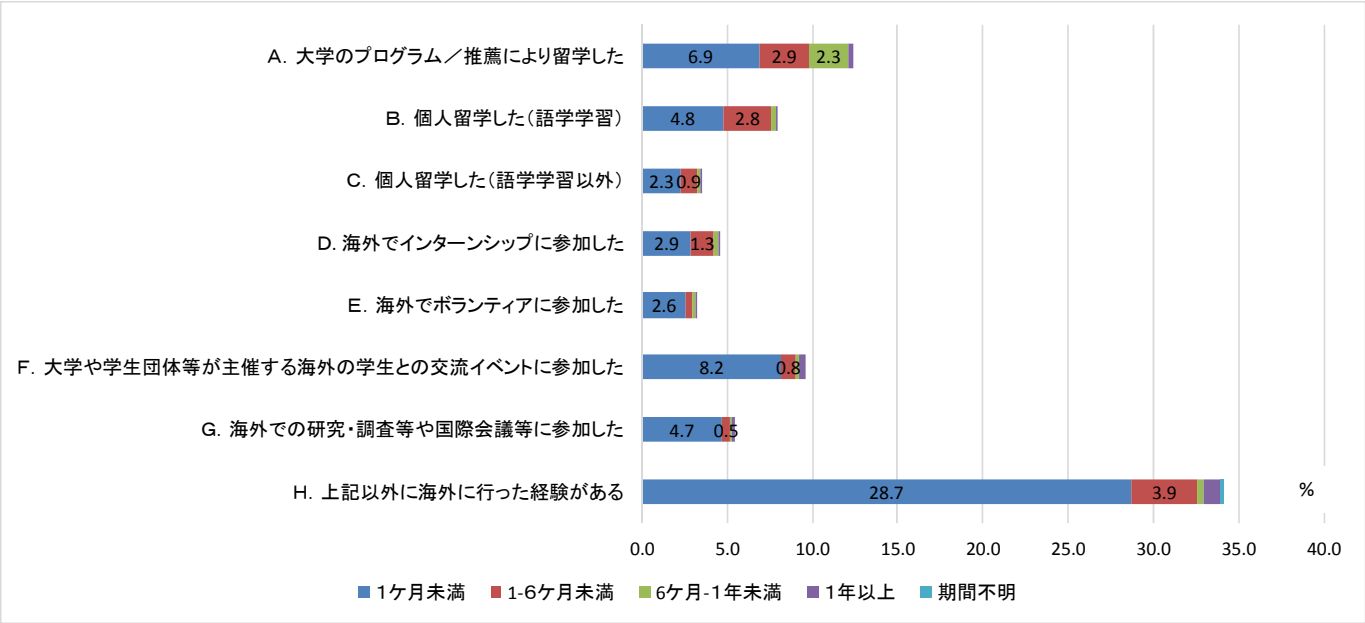
「海外経験」:「大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」と「大学のプログラム／推薦により留学」は約１割、「個人留学（語学学習）」は１割以下

Ｑ１７　在学時の海外経験等について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



在学時の海外経験等で、最も高い割合を示すのは、「A．大学のプログラム／推薦により留学した」12.4%、次いで「F．大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」9.6%で、次に「B．個人留学した（語学学習）」8.0%、「G．海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」5.5%の順である。これに対して「E．海外でボランティアに参加した」3.3%、「C．個人留学した（語学学習以外）」3.4%、「D．海外でインターンシップに参加した」4.6%と経験者の割合は低い。また、「H．上記以外に海外に行った経験がある」34.2%と約３分の１になっている。「A．大学のプログラム／推薦により留学した」は、年度ごとに増加している（26 頁）。

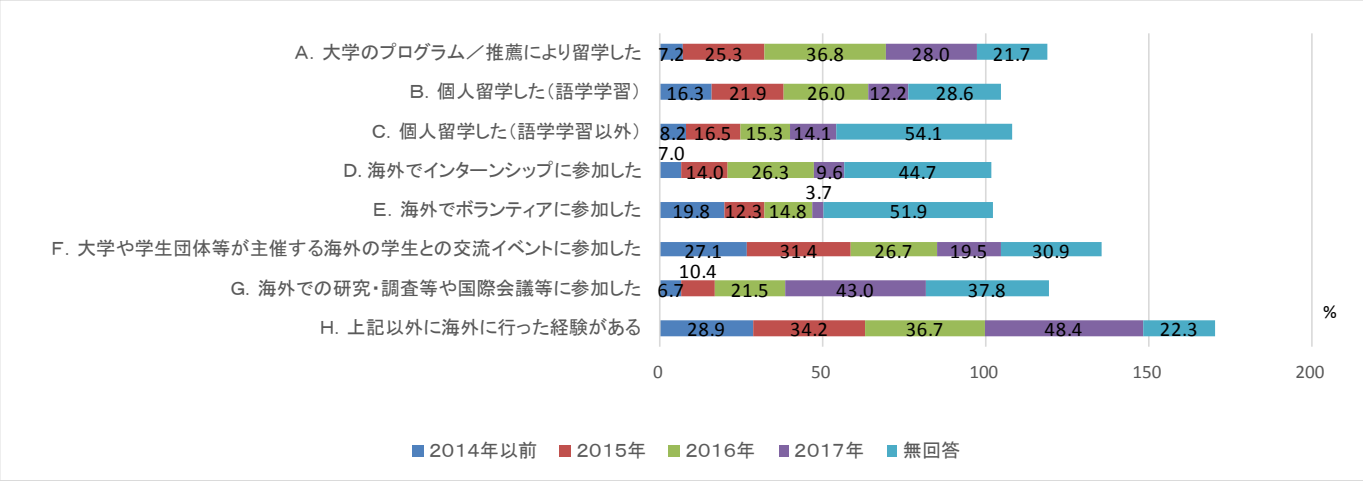
「海外経験」の期間は、すべての項目で１ヶ月未満が最も高い割合



海外経験の期間は、すべての項目で１ヶ月未満が最も高い割合となっている。特に、「Ｆ．大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」では 8.2％と経験者全体（9.6％）の８割半、「Ｇ．海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」では 4.7％と経験者全体（5.5％）の８割以上を占めている。

「海外経験」の時期：学年が上がるにつれて増加する傾向、「Ｃ．個人留学した（語学学習以外）」と「Ｆ．大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は２年次が最も高い割合

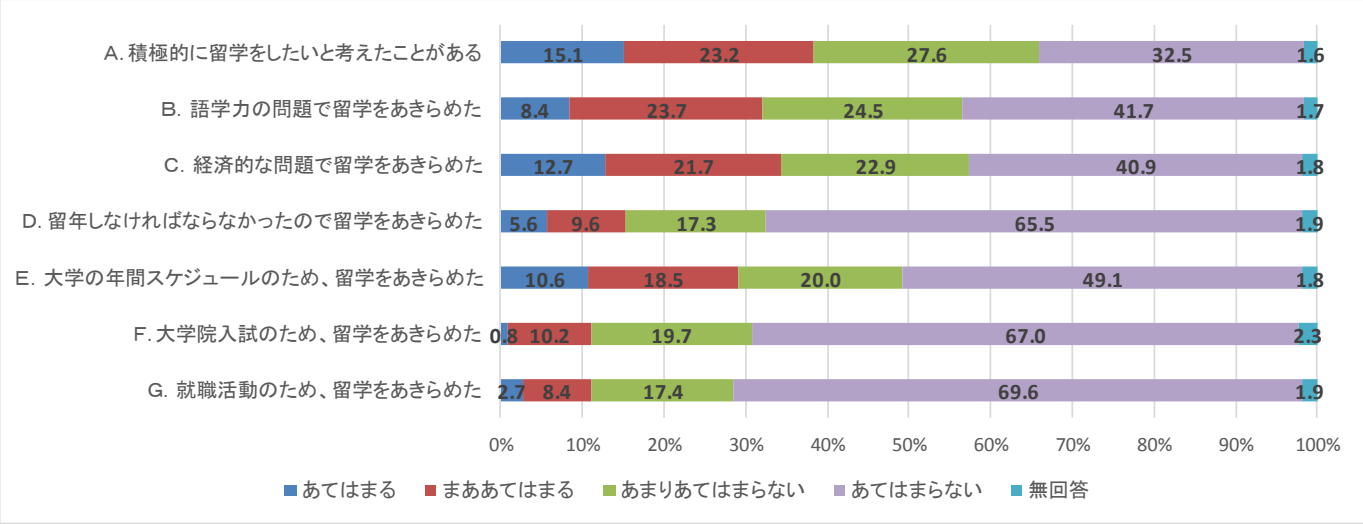
Ｑ１７－ ＳＱ１　前問で、Ａ～Ｈ で１～４を選択した場合はＱ１７－ＳＱ１にお答えください。複数の年度で複数回経験している場合には、それぞれの年度に○をつけてください。



前問（Ｑ１７）の海外経験について、経験者に何年度に経験をしたかをたずねた。複数回答のため、合計は 100％を超えている。国際活動の時期は、プログラムにより差はあるが、2014 年度以前（４年制で１年次、６年制で３年次以前に相当）は少なく、学年が上がるに従って割合が高くなる傾向が見られる。しかし、「Ｂ．個人留学した（語学学習）」は 2016 年度が最も高い割合、「Ｃ．個人留学した（語学学習以外）」と「Ｆ．大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は 2015 年度（４年制で２年次、６年制で４年次に相当）が最も高い割合となっている。

留学の障害は、経済的な問題、語学力の問題、大学の年間スケジュール（留学しなかった者のみ）

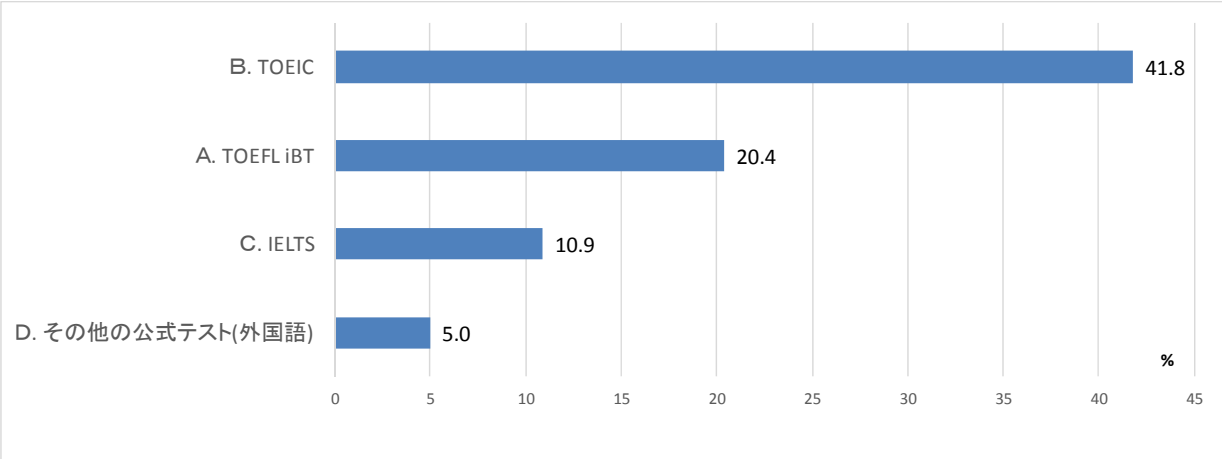
Ｑ１７－ＳＱ２　在学中に留学しなかった人(上記のＡからＣの経験がない人)にお聞きします。



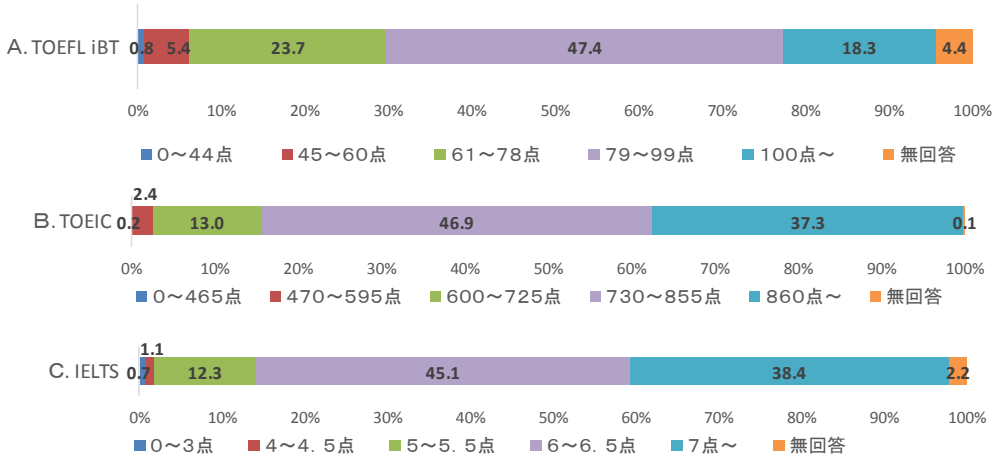
2016 年度の調査から留学をしなかった者（「Ａ．大学のプログラム／推薦により留学した」、「Ｂ．個人留学した(語学学習)」、「Ｃ．個人留学した（語学学習以外)」のいずれにもあてはまらない者で全体の 75.4%）に留学の障害をたずねた。留学の障害としては、「Ｃ．経済的な問題で留学をあきらめた」者（「あてはまる」12.7%と「まああてはまる」21.7%を合わせて 34.4%､以下同じ)、「Ｂ．語学力の問題で留学をあきらめた」者（32.1%)、「Ｅ．大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめた」者（29.1%）がそれぞれ３割前後となっている。なお、前回の調査から「Ｆ．大学院入試のため、留学をあきらめた」と「Ｇ．就職活動のため、留学をあきらめた」に分けて別々にたずねているが、前年度同様、あてはまるのは１割強である。

「TOEFL iBT受験者」は２割、「TOEIC受験者」4割。TOEFL iBTは「79～99点」、TOEICは「730-855点」、IELTSは「6～6.5点」が最も高い割合

Ｑ１８　あなたは、在学中にTOEFL iBTやTOEIC、IELTS等の公式テストを受験したことがありますか



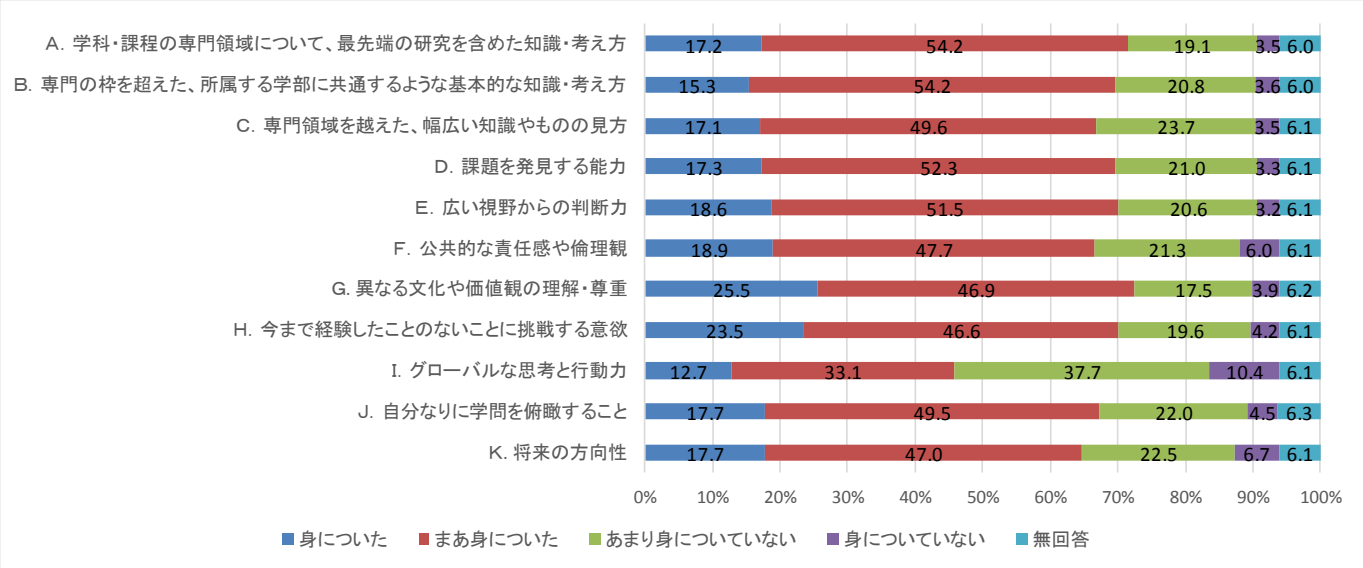
TOEFL iBT の受験者は 20.4%（2016 年度 20.0%，以下同じ)、TOEIC 受験者は 41.8%（41.7%)、IELTS 受験者は 10.9%（8.9%)、その他の公式テストは 5.0%（4.8%）となっている。前年度と比べ、IELTS の受験率は 2%増加したが、ほかの受験率は横ばいである。



それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、TOEFL iBT は「79～99 点」(47.4%)、TOEIC は、「730～855 点」(46.9%)、IELTS は「6～6.5 点」(45.1%)が最も高い割合となっている。

身につけた能力：「最先端の知識・考え方」、「異なる文化や価値観の理解・尊重」、「今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」、「学部に共通する基本的な知識・考え方」、「課題を発見する力」、「広い視野からの判断力」を身につけた者は約７割、「グローバルな思考と行動力」は４割半

Ｑ１９　あなたは、つぎのような点を身につけたと思いますか。

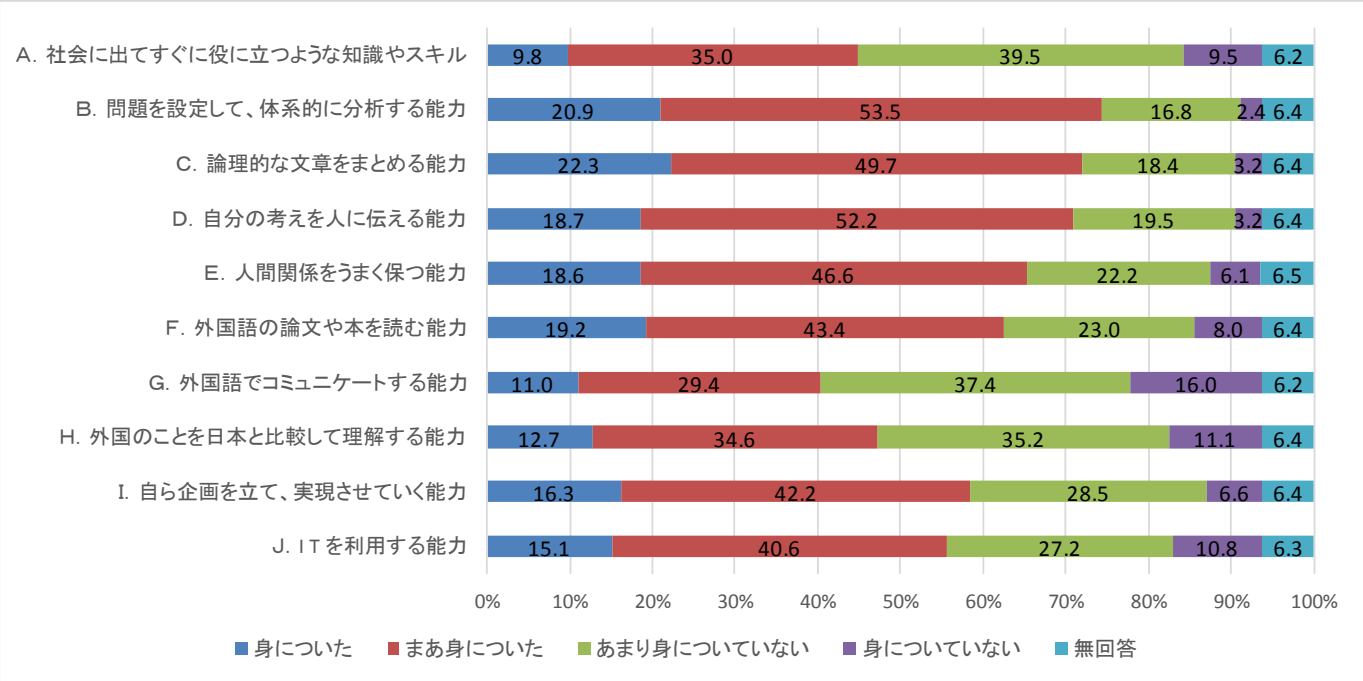


東京大学の教育を通じて身につけた能力では、「A．学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた知識・考え方」(「身についた」17.2%と「まあ身についた」54.2%を合わせて 71.4%)、「G．異なる文化や価値観の理解・尊重」(「身についた」25.5%と「まあ身についた」46.9%を合わせて 72.4%)、「E．広い視野からの判断力」(「身についた」18.6%と「まあ身についた」51.5%を合わせて 70.1%)、「H．今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」(「身についた」23.5%と「まあ身についた」46.6%を合わせて 70.1%)、「B．専門の枠を超えた、所属する学部に共通するような基本的な知識・考え方」(「身についた」15.3%と「まあ身についた」54.2%で合わせて 69.5%)、「D．課題を発見する能力」(「身についた」17.3%と「まあ身についた」52.3%を合わせて 69.6%）は約７割である。「F．公共的な責任感や倫理観」(「身についた」18.9%と「まあ身についた」47.7%を合わせて 66.6%)、「J．自分なりに学問を俯瞰すること」(「身についた」17.7%と「まあ身についた」49.5%を合わせて 67.2%)、「C．専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」(「身についた」17.1%と「まあ身についた」49.6%を合わせて 66.7%)、これらを身につけた者は３分の２を上回る。これらは毎年度ほとんど変化していない。

これに対して、「I．グローバルな思考と行動力」は「身についた」12.7%と「まあ身についた」33.1%を合わせて 45.8%と身についたとする者は半数以下となっている。

「問題を設定して、体系的に分析する能力」、「論理的な文章をまとめる能力」、「自分の考えを人に伝える能力」が身についた者は７割、「外国語の論文や本を読む能力」が身についた者は６割、「外国のことを日本と比較して理解する能力」は約半数、「外国語でコミュニケートする能力」が身についた者は４割

Ｑ２０　あなたは、つぎのようなスキルや能力を身につけたと思いますか。



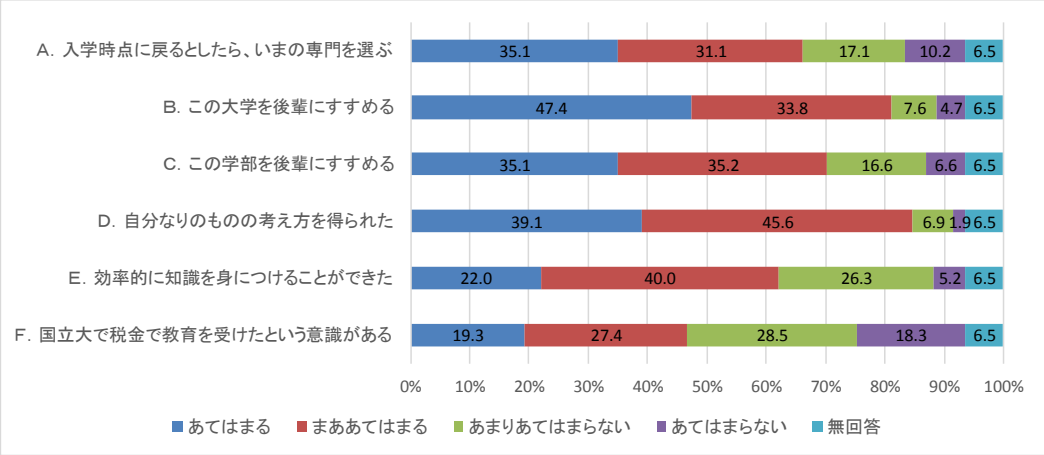
学生が大学時代を通じて身についたとしているのは、「Ｂ. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」20. 9％と「まあ身についた」53. 5％を合わせて 74. 4％）、「Ｃ. 論理的な文章をまとめる能力」（「身についた」22. 3％と「まあ身についた」49. 7％を合わせて 72. 0％）、「Ｄ. 自分の考えを人に伝える能力」（「身についた」18. 7％と「まあ身についた」52. 2％を合わせて 70. 9％）、「Ｅ. 人間関係をうまく保つ能力」（「身についた」18. 6％と「まあ身についた」46. 6％を合わせて 65. 2％）といった汎用性の高い一般的な能力であり、約 7 割が肯定的に回答している。

これに対して、「Ａ. 社会に出てすぐに役に立つような知識やスキル」が身についたとしている者は半数以下（「身についた」9. 8％と「まあ身についた」35. 0％を合わせて 44. 8％）に過ぎない。他方、「Ｆ. 外国語の論文や本を読む能力」は６割（「身についた」19. 2％と「まあ身についた」43. 4％を合わせて 62. 6％））の者が身についたとしているのに対して、「Ｈ. 外国のことを日本と比較して理解する能力」は半数以下（「身についた」12. 7 ％と「まあ身についた」34. 6％を合わせて 47. 3％）、「Ｇ. 外国語でコミュニケートする能力」が身についた者は４割弱（「身についた」11. 0％と「まあ身についた」29. 4％を合わせて 40. 4％）に過ぎない。

「Ｇ. 外国語でコミュニケートする能力」については、年度によって増減はあるものの、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。とくに「身についた」者のみの割合は 2008 年度の 5. 7％から 2013 年度の 10. 6％へと、約２倍に増加している。その後は、2014 年度は 8. 5％、2015 年度は 9. 0％、2016 年度は 10. 3％、2017 年度 11. 0％と、微増する傾向を示している（27 頁）。

「自分なりのものの考え方を得られた」、「この大学を後輩にすすめる」、「この学部を後輩にすすめる」は７割以上、「国立大で税金で教育を受けたという意識がある」は4割半

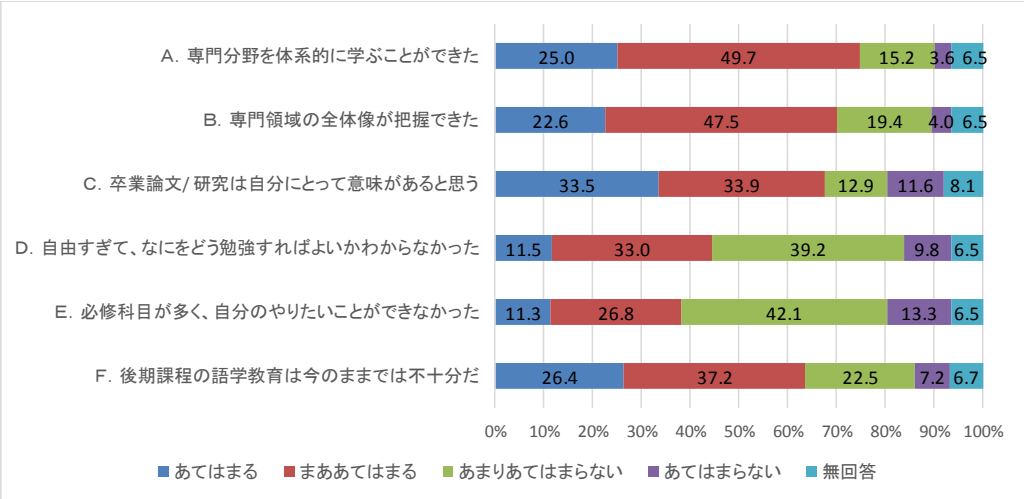
Ｑ２１　大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「D．自分なりのものの考え方を得られた」（「あてはまる」39.1％と「まああてはまる」45.6％を合わせて 84.7％）、「B．この大学を後輩にすすめる」（「あてはまる」47.4％と「まああてはまる」33.8％を合わせて 81.2％）、「C．この学部を後輩にすすめる」（「あてはまる」35.1％と「まああてはまる」35.2％を合わせて 70.3％）が７割以上となっている。他方、「A．入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」（「あてはまる」35.1％と「まああてはまる」31.1％を合わせて 66.2％）と「E．効率的に知識を身につけることができた」者は（「あてはまる」22.0％と「まああてはまる」40.0％を合わせて 62.0％）は６割以上となり、「F．国立大で税金で教育を受けたという意識がある」（「あてはまる」19.3％と「まああてはまる」27.4％を合わせて 46.7％）者は４割半になっている。

カリキュラムについては肯定的な回答が７割半だが、「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」という者は6割強、「必修科目が多く、自分のやりたいことができなかった」という者は４割弱

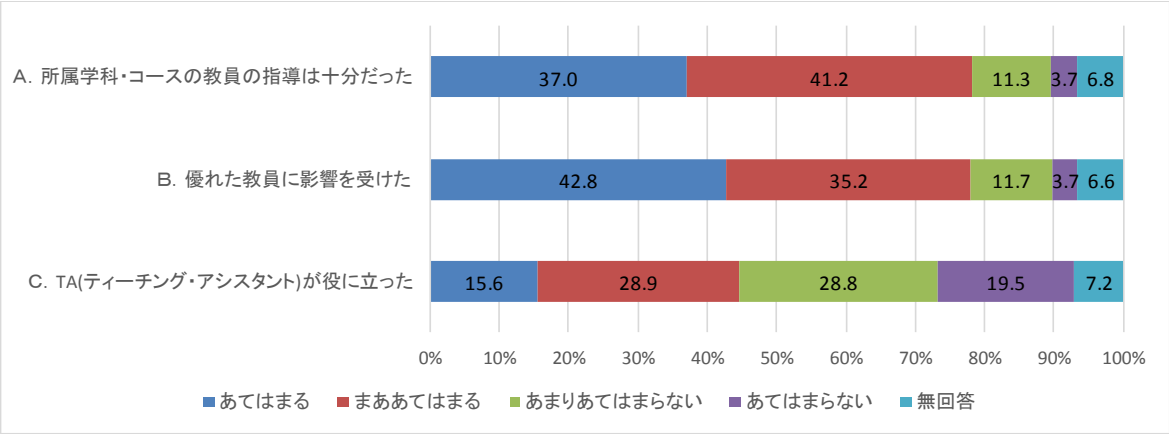
Ｑ２２　大学のカリキュラムについてお聞きします。



カリキュラムについては、「A．専門分野を体系的に学ぶことができた」とする者が、74.7％（「あてはまる」25.0％と「まああてはまる」49.7％を合わせて）と７割以上となっている。次いで、「B．専門領域の全体像が把握できた」とする者が、70.1％（「あてはまる」22.6％と「まああてはまる」47.5％を合わせて）、「C．卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」とする者が、67.4％（「あてはまる」33.5％と「まああてはまる」33.9％を合わせて）となっている。他方、否定的な項目については、「F．後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者が、63.6％（「あてはまる」26.4％と「まああてはまる」37.2％を合わせて）と３分の２に近い。これに対して「D．自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」とする者は、４割以上（44.5％）（「あてはまる」11.5％と「まああてはまる」33.0％を合わせて）、「E．必修科目が多く、自分のやりたいことができなかった」とする者は、４割弱（38.1％）（「あてはまる」11.3％と「まああてはまる」26.8％を合わせて）となっている。「D．自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」と「F．後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」の割合は、2015 年度と比べ大きく増加したものの、2016 年度とはほぼ変わらない（30 頁）。

４分の３以上の者が「優れた教員に影響を受けた」、「教員の指導は十分」

Ｑ２３　教員や教育制度との関係についてお聞きします。

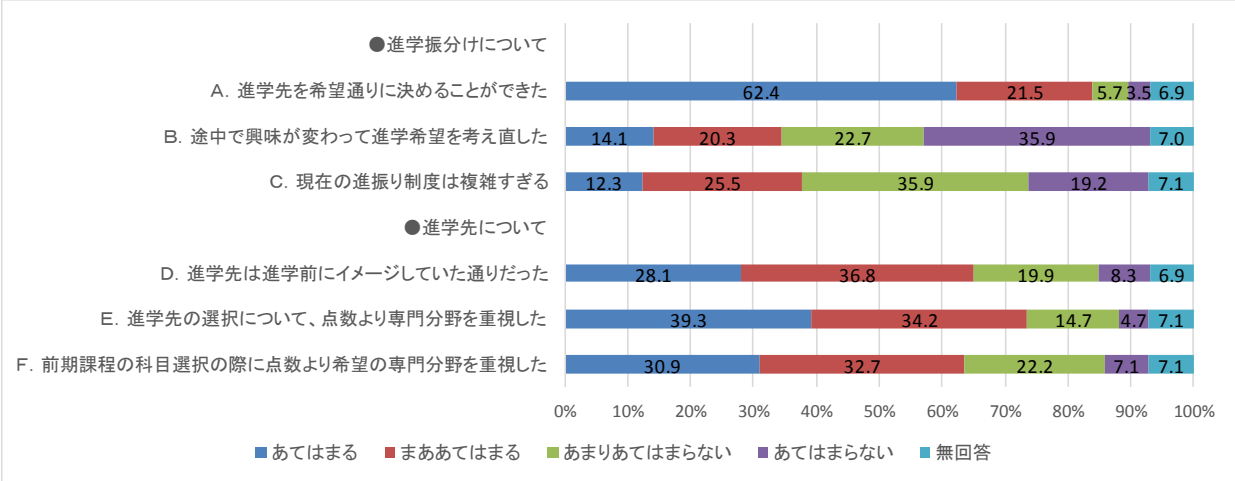


「Ｂ．優れた教員に影響を受けた」（78.0％、「あてはまる」42.8％と「まああてはまる」35.2％を合わせて）、「Ａ．所属学科・コースの教員の指導は十分だった」（78.2％、「あてはまる」37.0％と「まああてはまる」41.2％を合わせて）が４分の３以上となっている。反面、「Ｃ．TA（ティーチング・アシスタント）が役に立った」と評価するのは44.5％（「あてはまる」15.6％と「まああてはまる」28.9％を合わせて）と、約４割半になっている。ただし、ＴＡのいる授業を経験していない者もあることに留意する必要がある。

なお、2015年度までは、「Ｃ．TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」および「Ｂ．優れた教員の考え方や生き方に触れた」となっていた。

「進学先」は「希望通り」：８割以上、「進学希望を考え直した」：３割半

Ｑ２４　進学振分けや進学先についてお聞きします。

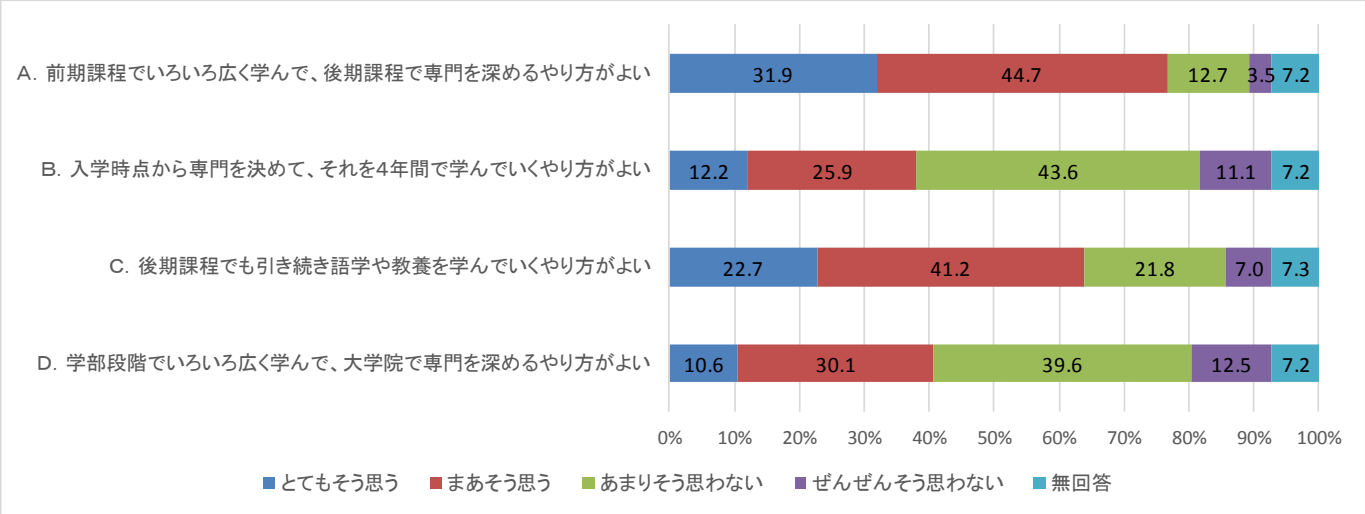


「Ａ．進学先を希望通りに決めることができた」者は、83.9％（「あてはまる」62.4％と「まああてはまる」21.5％を合わせて）と８割を超えている。ただし、「Ｂ．途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も、34.4％（「あてはまる」14.1％と「まああてはまる」20.3％を合わせて）となっている。さらに、「Ｄ．進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、64.9％（「あてはまる」28.1％と「まああてはまる」36.8％を合わせて）だが、「Ｃ．現在の進振り制度は複雑すぎる」は、37.8％（「あてはまる」12.3％と「まああてはまる」25.5％を合わせて）で３割半以上の者が複雑すぎるとしている。「Ｅ．進学先の選択について、点数より専門分野を重視した」は、７割以上（73.5％）（「あてはまる」39.3％と「まああてはまる」34.2％を合わせて）となっている。「Ｆ．前期課程の科目選択の際に点数より希望の専門分野を重視した」は、6 割以上（63.6％）（「あてはまる」30.9％と「まああてはまる」32.7％を合わせて）である。

「Ａ．進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は87.6％で、2013年度には83.5％、2014年度には81.9％、2015年度には82.7％、2016年度には82.3％、やや減少傾向にあったが、2017年度は83.9％に増加している（37頁）。また、「Ｂ．途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も、2010年度には36.3％で、2013年度は32.5％、2016年度は31.8％、やや減少傾向にあったが、2017年度は34.4％に増えた（37頁）。

「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」現行方式を評価する者が約４分の３だが、「後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」という者も６割以上

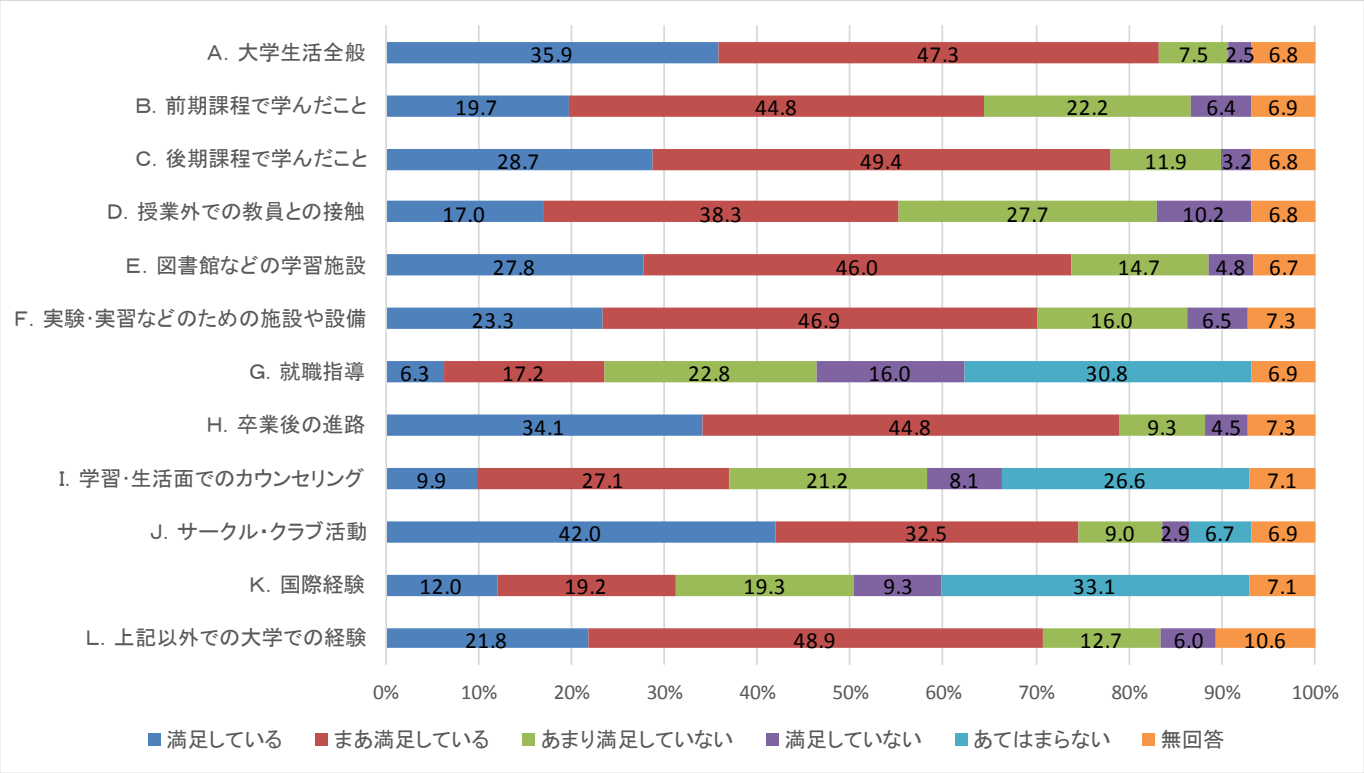
Ｑ２５　専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。



専門と教養の学習の仕方についてでは、「Ａ．前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する者が、「とてもそう思う」31.9％と「まあそう思う」44.7％を合わせて 76.6％で、これに対して、「Ｂ．入学時点から専門を決めて、それを４年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する者は、４割（38.1％）（「とてもそう思う」12.2％と「まあそう思う」25.9％を合わせて）となっている。これは、2016 年度より 2.3％減少している（39 頁）。また、両者の中間の方式として「Ｃ．後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」とする者も 63.9％（「とてもそう思う」22.7％と「まあそう思う」41.2％を合わせて）と６割以上となっている。これは 2016 年度より 1.3％増加である（40 頁）。また、昨年度の調査ではじめて「Ｄ．学部段階でいろいろ広く学んで、大学院で専門を深めるやり方がよい」ということについてもたずねている。今年度の回答は昨年度とほぼ変わらず、そう思うは４割（40.7％）（「とてもそう思う」10.6％と「まあそう思う」30.1％を合わせて）となっている。なお、「Ｃ．後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」は、2015 年度までは「前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学んでいくやり方がよい」となっていた。

満足度:「大学生活全般」約８割以上、「前期課程」６割半、「後期課程」約８割、「卒業後の進路」約８割

Ｑ２６　あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

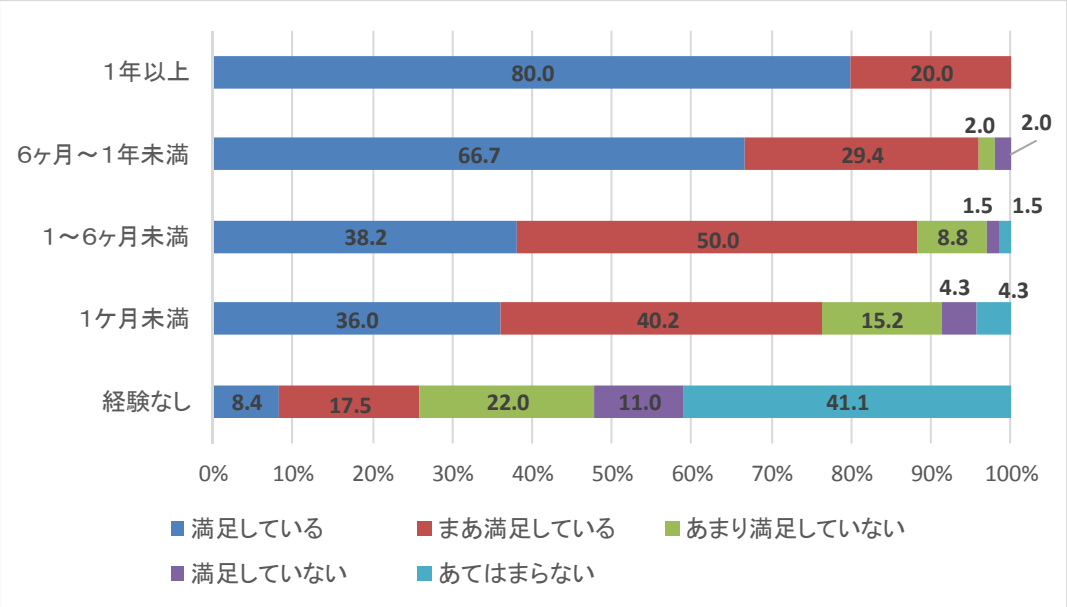


「Ａ．大学生活全般」に満足している者は８割以上（83.2%）（「満足している」35.9%と「まあ満足している」47.3%を合わせて）である。「Ｂ．前期課程で学んだこと」（64.5%）は約６割（「満足している」19.7%と「まあ満足している」44.8%を合わせて）、「Ｃ．後期課程で学んだこと」（78.1%）は約８割（「満足している」28.7%と「まあ満足している」49.4%を合わせて）、「Ｈ．卒業後の進路」（78.9%）（「満足している」34.1%と「まあ満足している」44.8%を合わせて）も約８割が満足している。

「Ｈ．卒業後の進路」については、78.9%が満足しているが、進学者 83.2%より就職者 91.4%の方が高い。また、「未定その他」では 33.0%ときわめて低くなっている。「Ｇ．就職指導」の満足度について、「あてはまらない」者は約３割で、満足している者は２割強（23.5%）（「満足している」6.3%と「まあ満足している」17.2%を合わせて）と依然として低いが、2014 年度より増加傾向にある（43 頁）。とくに、卒業後の進路（Q27、後述）が就職では 33.1%と進学の 18.1%より高い。「Ｉ．学習･生活面でのカウンセリング」（37.0%）（「満足している」9.9%と「まあ満足している」27.1%を合わせて）も４割以下の者しか満足していない。「Ｄ．授業外での教員との接触」（55.3%）（「満足している」17.0%と「まあ満足している」38.3%を合わせて）についても、満足している者は半数を上回るに過ぎない。さらに、「Ｋ．国際経験」について満足している者は、３割（31.2%）（「満足している」12.0%と「まあ満足している」19.2%を合わせて）にすぎないが、増加傾向にある（27 頁）。なお、「Ｅ.図書館などの学習施設」の満足度は年々減少傾向にあったが、2017 年度は 2016 年度より 0.5%増えている（36 頁）。なお、前回から、「Ｇ．就職指導」、「Ｉ．学習･生活面でのカウンセリング」、「Ｊ．サークル・クラブ活動」、「Ｋ．国際経験」については、「あてはまらない」という選択肢を追加しているため、経年比較には留意する必要がある。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

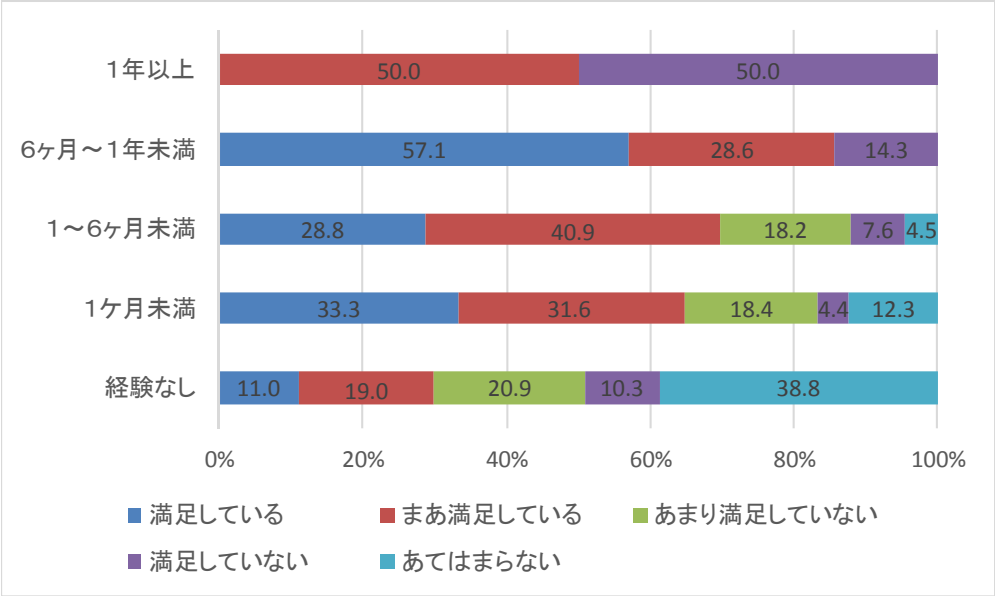
Ｑ１７Ａ. 大学のプログラム／推薦により留学した別Ｑ２６Ｋ. 国際経験満足度



左の図は、「Ｑ１７Ａ. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Ｑ２６Ｋ. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際経験のない者では、満足度（「満足している」(8.4%)と「まあ満足している」(17.5%)を合わせて）は 25.9%と著しく低く、これに対して、「国際経験」のある者では、「１ヶ月未満」の経験期間の者の満足度が最も低いが、それでも７割半（76.2%）を越えている。「１～６ヶ月未満」の経験期間の者の満足度が９割弱、それ以上の期間の国際経験のある者では、９割半を超えている。このように、国際経験がある者の満足度が高く、留学経験の長い者ほど満足度が高い。

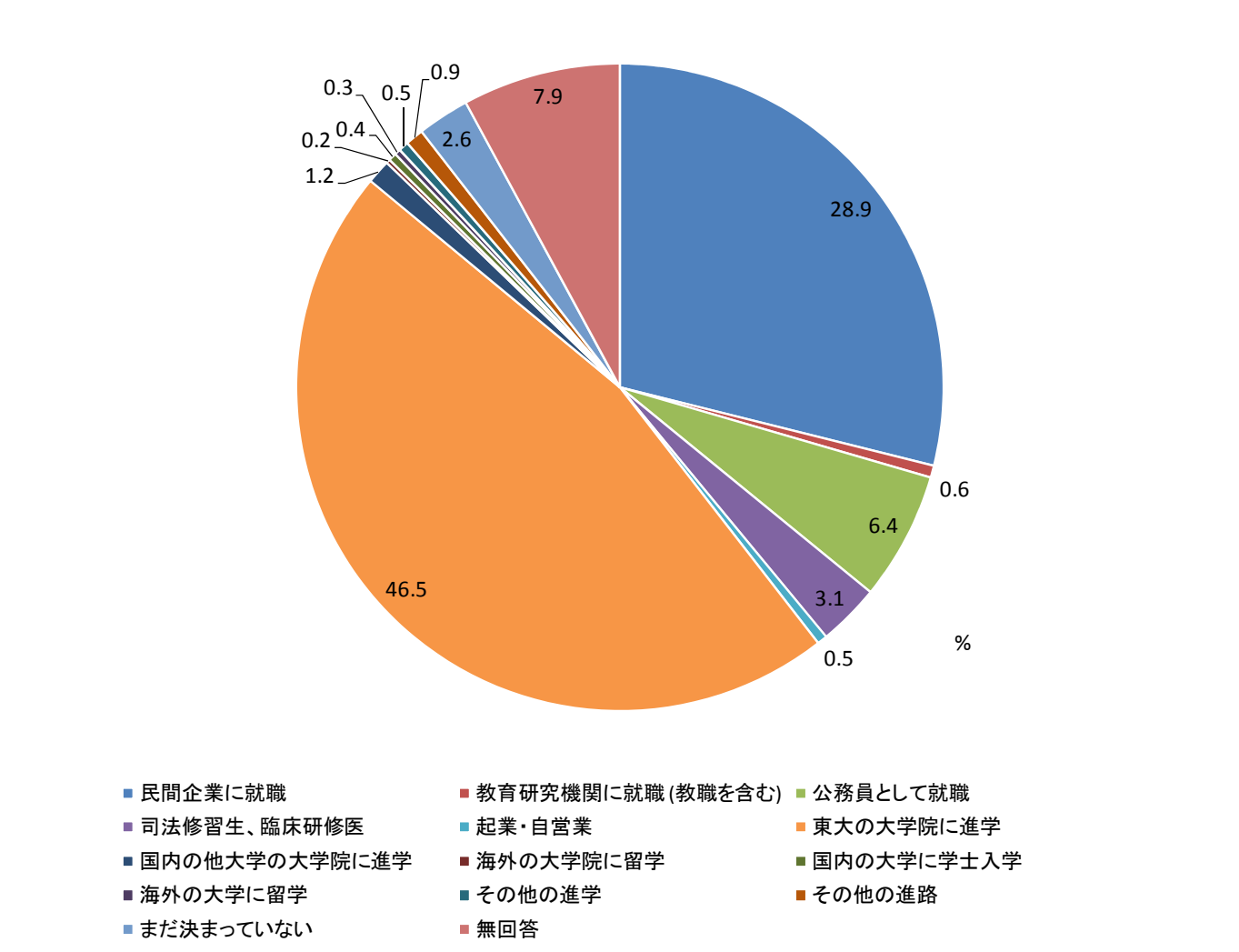
これに対して、下の図は、同じように、「Ｑ１７Ｂ．個人留学した（語学学習）」と「Ｑ２６Ｋ．国際経験」の満足度との関連を示したものである。「Ｑ１７Ａ．大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、個人留学の国際経験のない者では、満足度は３割と低く、国際経験のある者の方が満足度は高い。しかし、全体的に満足度は「Ｑ１７Ａ．大学のプログラム／推薦により留学した」より低くなっている。

Ｑ１７Ｂ. 個人プログラムにより留学した（語学学習）別Ｑ２６Ｋ. 国際経験満足度



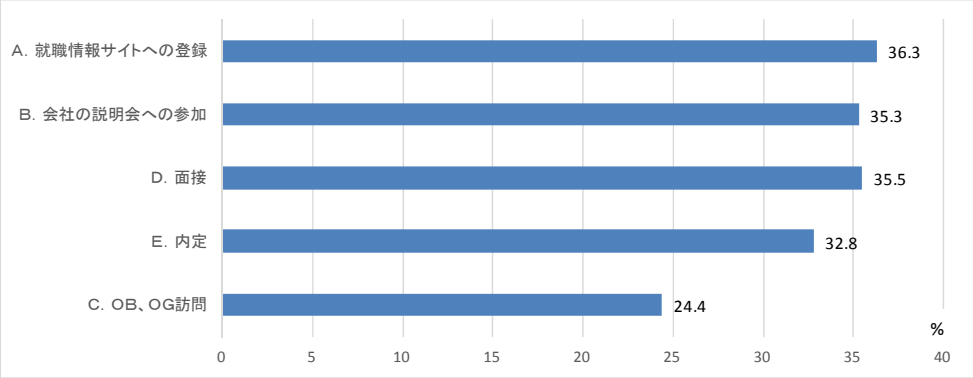
「卒業後の予定」：「進学」が半数近く、「就職」が４割

Ｑ２７　４月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。



４月からの予定としては、「東大の大学院に進学」（46.5%）「国内の他大学の大学院に進学」（1.2%）、「海外の大学院に留学」(0.2%) と合わせて、大学院進学予定は、47.9%となっている。さらに、「国内の大学に学士入学」(0.4%) と「海外の大学に留学」（0.3%）と「その他の進学」（0.5%）を合わせて進学は 49.1%と半数に近い。これに対して、「企業に就職」は約 3 割 (28.9%) で、次いで、「公務員として就職」(6.4%)、「司法修習生、臨床研修医」(3.1%)、「教育研究機関に就職」（0.6%）、「起業・自営業」（0.5%）と合わせて就職予定は、４割（39.5%）となっている。「進路未定」は 2.6%、「その他の進路」は 0.9%ときわめて少ない。

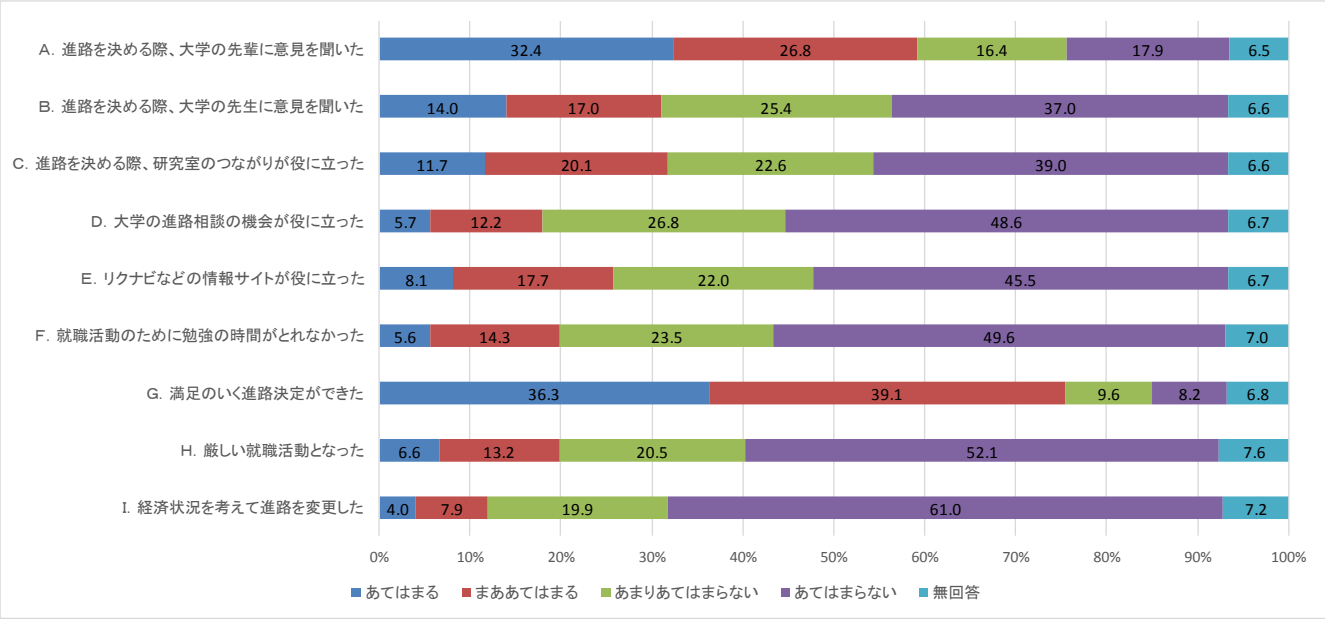
Ｑ２７-ＳＱ　民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には(　　)に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては、「A. 就職情報サイトへの登録」(36.3%) と最も高い割合を示しているが、以下、「B. 会社の説明会への参加」(35.3%) と「D. 面接」35.5%とほぼ等しい。また、「E. 内定」に関しては、32.8%が「内定」を受けている。これに対して、「C. OB、OG訪問」は 24.4%と低い割合となっている。なお、４月からの予定(Ｑ２７)を「働く」とした者に限ると 93.5%が「内定」を受けている。

「進路決定」:「大学の先輩の意見」が約６割、４分の３の者が「満足のいく進路決定ができた」が、「厳しい就職活動になった」も就職者の４割弱

Ｑ２８　あなたの卒業後の進路と決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「A. 先輩」(59.2%) で(「あてはまる」32.4%と「まああてはまる」26.8%を合わせて) 約６割となっている。「B. 大学の先生」(31.0%) (「あてはまる」14.0%と「まああてはまる」17.0%を合わせて) と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」(31.8%) (「あてはまる」11.7%と「まああてはまる」20.1%を合わせて) は３割となっている。「G. 満足のいく進路決定ができた」のは約４分の３ (75.4%) (「あてはまる」36.3%と「まああてはまる」39.1%を合わせて) で、昨年度より 1.0%高くなっている。「H. 厳しい就職活動となった」(19.8%) (「あてはまる」6.6%と「まああてはまる」13.2%を合わせて) と「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」(19.9%) (「あてはまる」5.6%と「まああてはまる」14.3%を合わせて) はともに約２割だが、４月からの予定(Ｑ２７)を「働く」とした者に限ると、それぞれ 34.4%と 37.1%と３割半になる (グラフは省略)。また、「I. 経済状況を考えて進路を変更した」は、11.9% (「あてはまる」4.0%と「まああてはまる」7.9%を合わせて) で、2014 年度の 9.5%、2015 年度の 8.8%、2016 年度の 12.5%へとやや増加傾向にある。「G. 満足のいく進路決定ができた」と「H. 厳しい就職活動となった」は減少傾向にあるが、2016 年度、2017 年度はやや増加している (42、41 頁)。また、「D. 大学の進路相談の機会が役に立った」は、約２割 (17.9%) (「あてはまる」5.7%と「まああてはまる」12.2%を合わせて) と低く、2016 年度より 2.5%減少している (42 頁)。

１０回の調査で変化が見られる項目

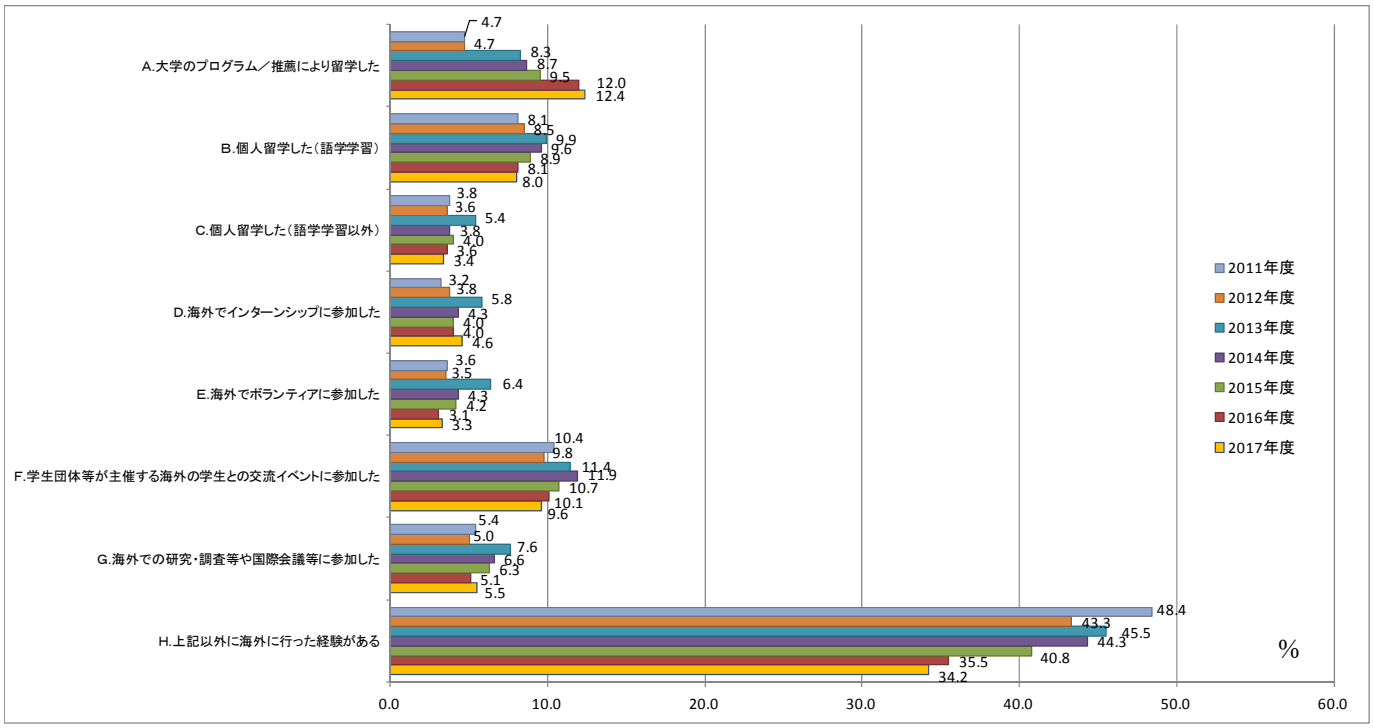
達成度調査は 2008 年度（2009 年 3 月実施）の第 1 回から、2017 年度（2018 年 3 月実施）で 10 回を数える。第 1 回の回収率は 39.7%であったが、年度ごとに回収率が増加してきた。2017 年度の回収率(79.7%)は、最も高い 2012 年度(2.0%)と比べ若干低くなっている。

この 10 回の調査項目を時系列的に見ると、多くの項目でそれほど大きな変化はみられない。もともと、身につけた能力の自己評価や満足度や意識などは比較的変化しにくい特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、この間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、経年変化を見ることにする。

「国際活動」、「国際経験の満足度」、「外国語でコミュニケートする能力」は増加する傾向にある

「大学のプログラム／推薦により留学した」者は増加傾向にある

Ｑ１７　在学時の海外経験等について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

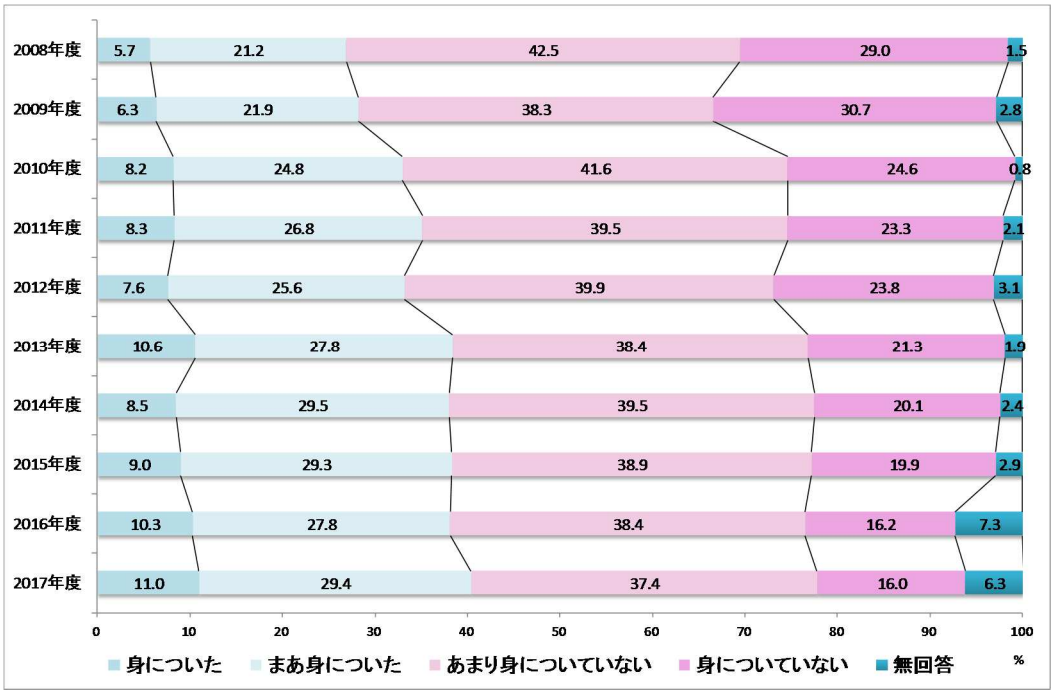


「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」者は 2011 年度から 4.7%、4.7%、8.3%、8.7%、9.5%、12.0%、12.4%と順調な増加傾向にある。「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、10.4%、9.8%、11.4%、11.9%、10.7%、10.1%、9.6%とわずかな増減を見せる。これに対して、「D. 海外でインターンシップに参加した」は 3.2%、3.8%、5.8%、4.3%、4.0%、4.0%、4.6%、「B. 個人留学した(語学学習)」は 8.1%、8.5%、9.9%、9.6%、8.9%、8.1%、8.0%、「E. 海外でボランティアに参加した」は 3.6%、3.5%、6.4%、4.3%、4.2%、3.1%、3.3%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は 5.4%、5.0%、7.6%、6.6%、6.3%、5.1%、5.5%で、これらはいずれも 2013 年度をピークに増加していたが、その後はやや減少傾向にある。「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は 48.4%、43.3%、45.5%、44.3%、40.8%、35.5%、34.2%で、2013 年度以降は明らかに減少傾向にある。なお、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は、2016 年度には「大学や学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」に微修正した。

「外国語でコミュニケートする能力」はやや増加する傾向にあるが、近年は変化が小さい

Ｑ２０　あなたは、つぎのようなスキルや能力を身につけたと思いますか。

外国語でコミュニケートする能力

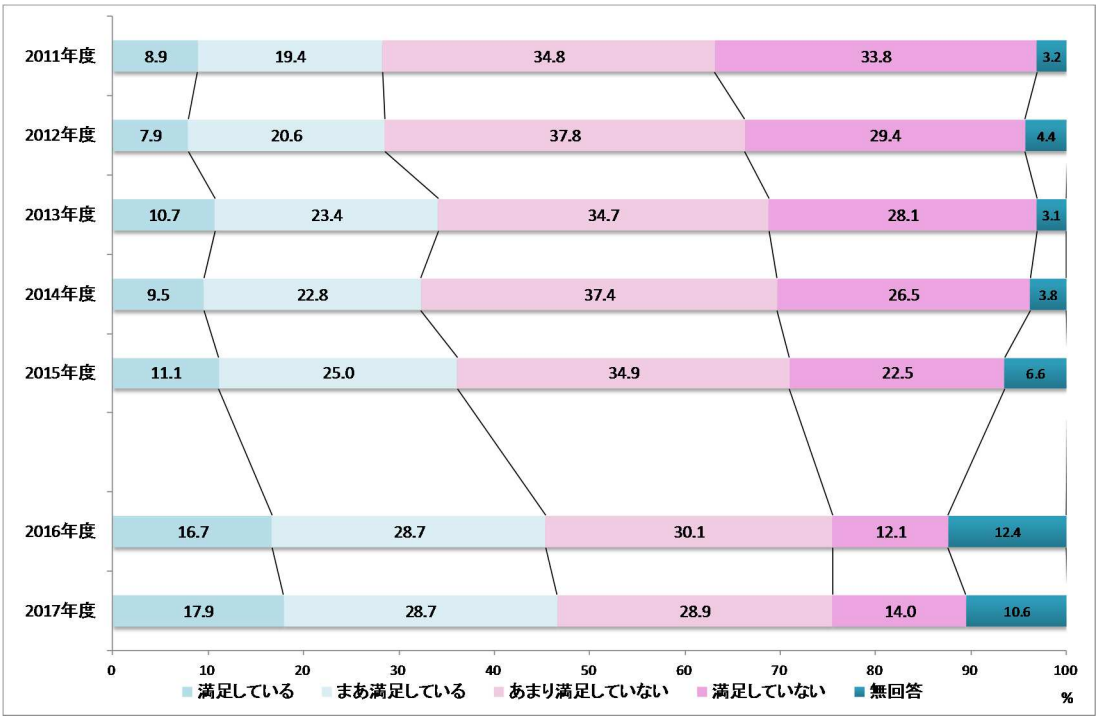


身につけた能力の自己評価で、この10年間に最も変化しているのは、「外国語でコミュニケートする能力」で、2008年度には「身についた」5.7%と「まあ身についた」21.2%を合わせて26.9%であったが、年度ごとにやや増減はあるものの、大きくみれば増加傾向にある。2017年度には、「身についた」11.0%と「まあ身についた」29.4%を合わせて40.4%となり、前年度より2.3%の増加で、過去最高となっている。

「国際経験」の満足度は年度により増減するものの、増加する傾向にある

Ｑ２６　あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

国際経験



国際経験の満足度については、2011年度からたずねているが、2011年度は「満足している」8.9%と「まあ満足している」19.4%を合わせて28.3%であったが、その後、やや増加傾向にある。

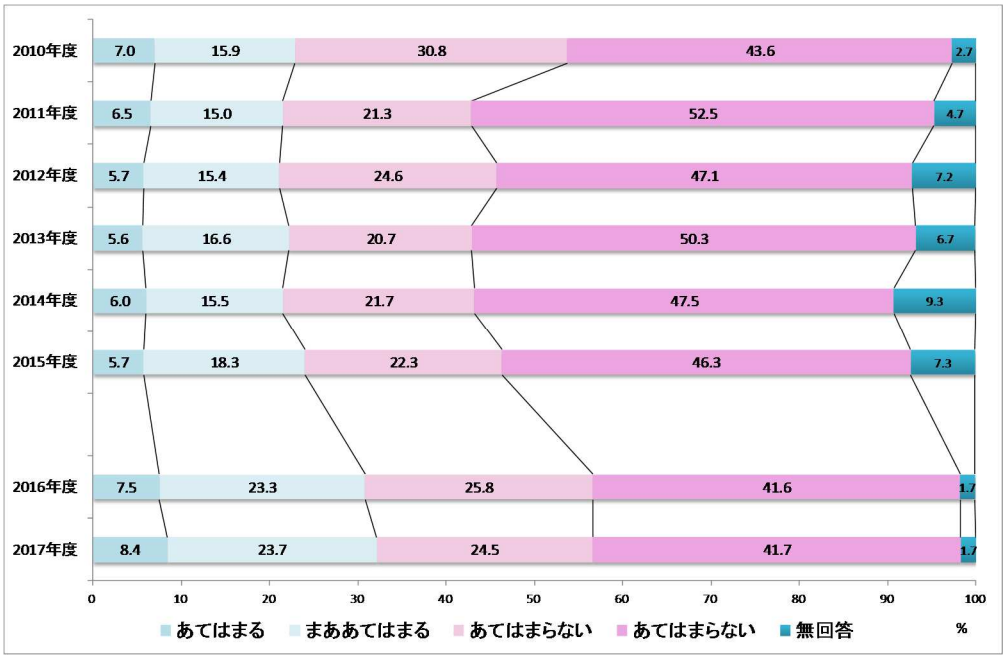
2016年度より、この設問には「あてはまらない」というカテゴリを設けている。2016年度からは「あてはまらない」と回答した者を除き、国際経験をもつ者の満足度を示している。2017年度では、満足している者の割合は「満足している」17.9%と「まあ満足している」28.7%を合わせて、46.6%と過去最高となっている。

「留学の障害」は減少している、2016年度からは留学経験のない人のみにたずねた

「語学力の問題で留学をあきらめた」者はわずかに増減があったが、2016年度と2017年度では留学経験のない人の３割があてはまる

Ｑ１７-ＳＱ２　在学中に留学しなかった人（上記のＡからＣの経験がない人）にお聞きします。

語学力の問題で留学をあきらめた

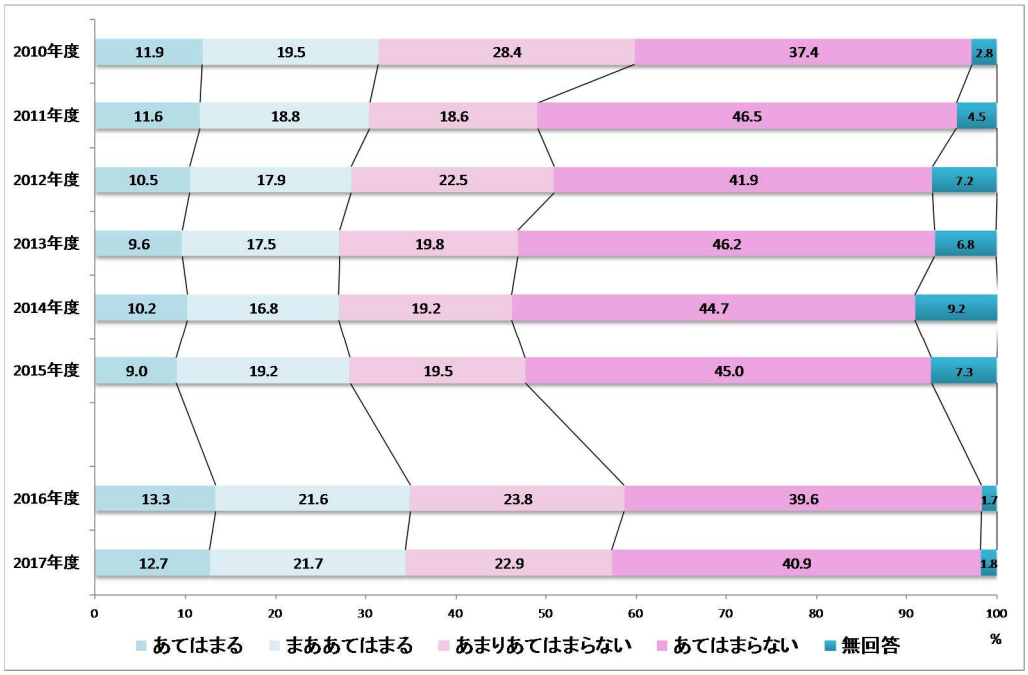


「語学力の問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された 2010 年度は「あてはまる」7.0％と「まああてはまる」15.9％を合わせて 22.9％であった。多少の増減はあるが、2015 年度には合わせて 24.0％となっている。

2016 年度より留学経験のない人のみにたずねることになっている。2017 年度では留学経験のない者（全体の 75.4％）の回答は、「あてはまる」8.4％と「まああてはまる」23.7％を合わせて 32.1％となる。つまり、留学経験のない者の３割が語学力の問題で留学をあきらめたという結果である。

「経済的な問題で留学をあきらめた」者は減少傾向だった、2016年度と2017年度では留学経験のない人の約３割半があてはまる

経済的な問題で留学をあきらめた

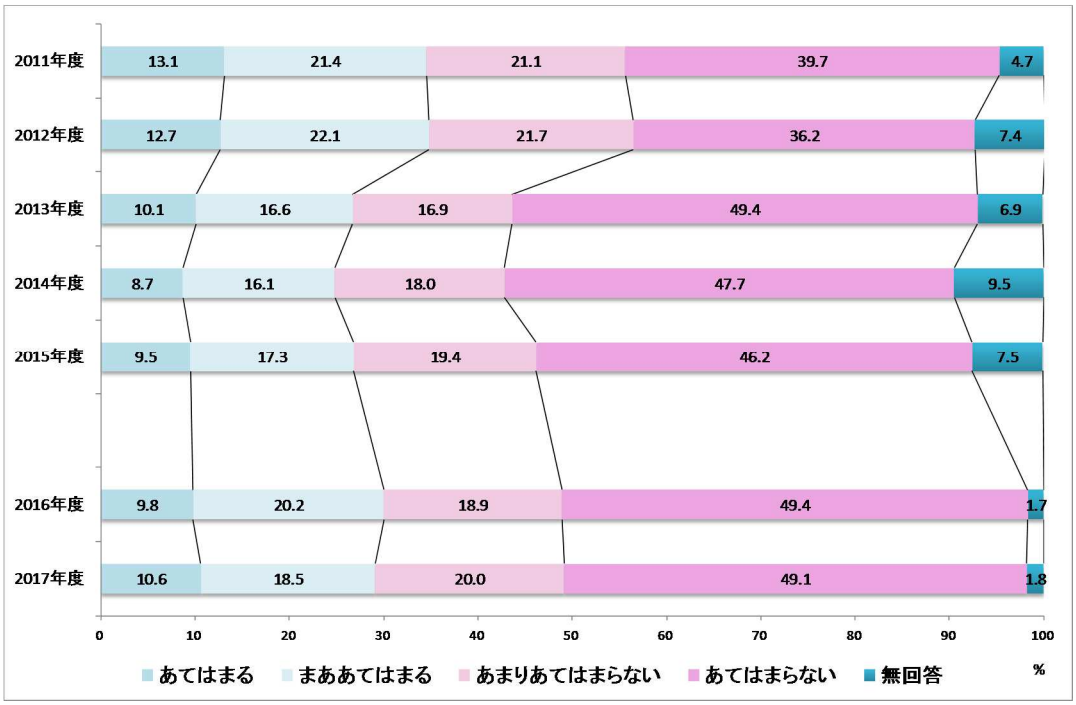


「経済的な問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された 2010 年度は「あてはまる」11.9％と「まああてはまる」19.5％を合わせて 31.4％であったが、概ね減少している。

2016 年度より、留学経験のない人のみに質問することになっている。2017 年度の回答は、「あてはまる」12.7％と「まああてはまる」21.7％を合わせて 34.4％となる。言い換えると、留学経験のない人の約３割半が経済的な問題で留学をあきらめている。

「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者は減少傾向、2016年度と2017年度では留学経験のない人の約３割があてはまる

大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった

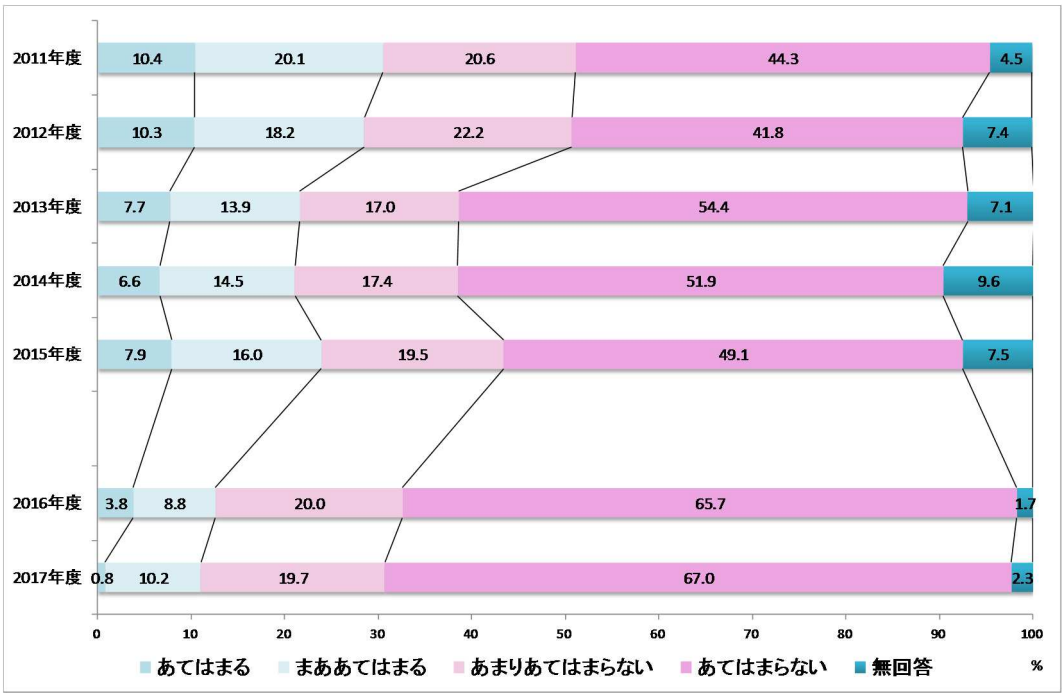


「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者の割合は、最初に調査された 2011 年度は「あてはまる」13.1％と「まああてはまる」21.4％を合わせて 34.5％であったが、2013 年度以降減少傾向にある。

2016 年度より、質問を「大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめた」に変更し、留学経験のない人のみにたずねた。2017 年度の回答では、「あてはまる」10.6％と「まああてはまる」18.5％を合わせて、あてはまる人が 29.1％である。昨年度同様、留学経験のない人の約３割が大学の年間スケジュールのため、留学をあきらめたという結果である。

「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者も減少傾向、2016年度と2017年度では留学経験のない人の１割があてはまる

大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった

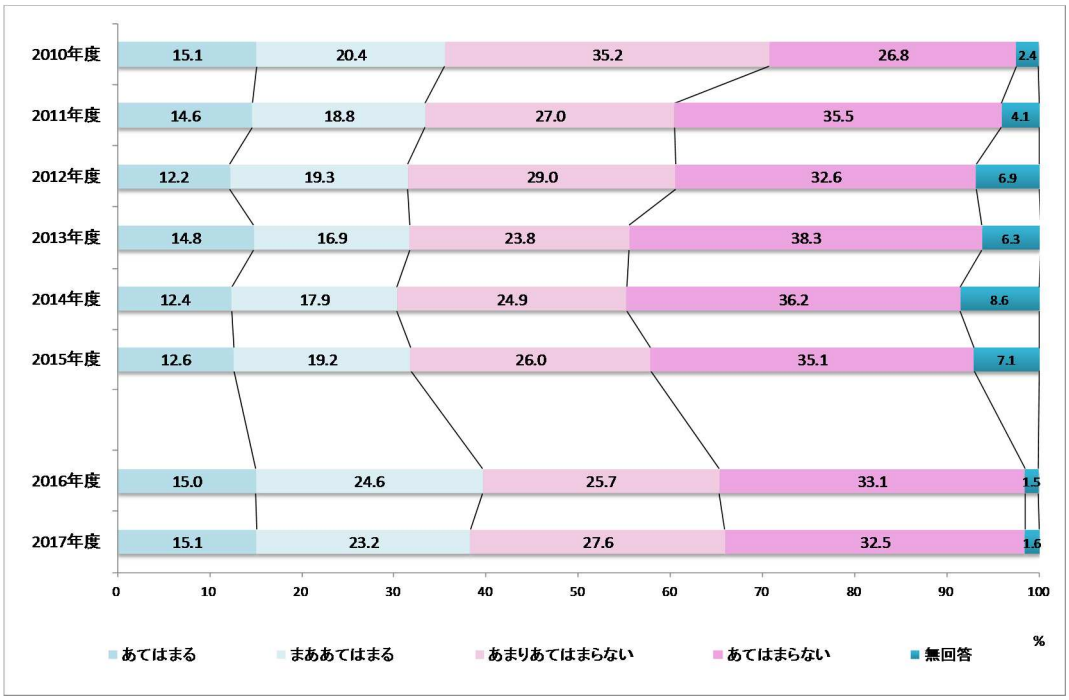


「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者の割合も、最初に調査された 2011 年度は「あてはまる」10.4％と「まああてはまる」20.1％を合わせて 30.5％であった。その後、わずかながら増減する。

2016 年度より質問を「大学院入試のため、留学をあきらめた」に変更し、留学経験のない人のみにたずねた。2017 年度の回答は、「あてはまる」0.8％と「まああてはまる」10.2％を合わせてあてはまる者が 11.0％である。昨年度同様、留学経験のない人の１割が大学院入試のため、留学をあきらめている。

「積極的に留学したい」者はやや減少傾向にあるが、2016年度と2017年度では留学経験のない人の約４割があてはまる

積極的に留学をしたいと考えていた

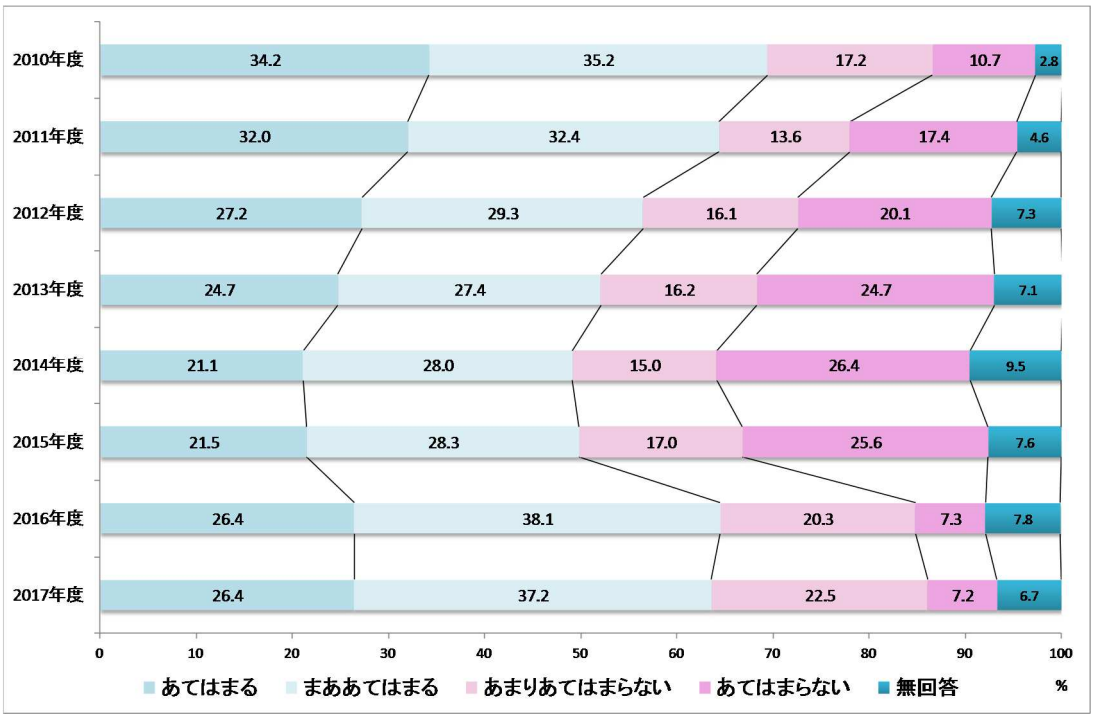


留学や語学学習について「積極的に留学をしたいと考えていた」者の割合は、最初に調査された 2010 年度は「あてはまる」15.1％と「まああてはまる」20.4％を合わせて 35.5％であった。その後、わずかに増減している。2016 年度より留学経験のない人のみにたずねた。質問も「積極的に留学をしたいと考えたことがある」に変更している。2017 年度の結果は、「あてはまる」15.1％と「まああてはまる」23.2％を合わせて 38.3％の人があてはまる。つまり、留学経験のない人の約４割が積極的に留学したいと考えたことがある。

「後期課程の語学教育は不十分」とする者は大幅に減少する傾向にあるが、2016年度と2017年度は増加

Ｑ２２　大学のカリキュラムについてお聞きします。

後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ



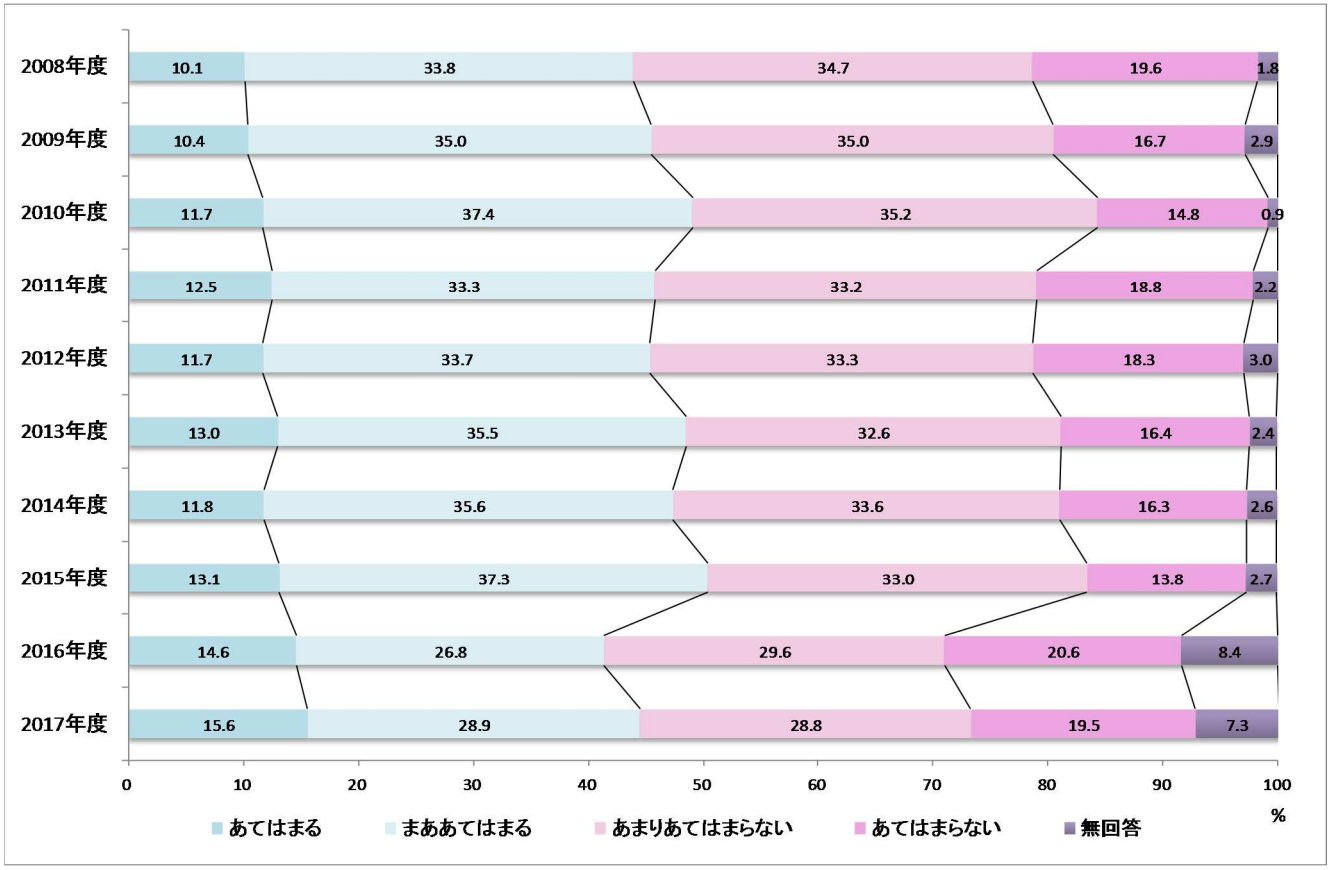
「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者の割合も、最初に調査された 2010 年度は「あてはまる」34.2％と「まああてはまる」35.2％を合わせて69.4％であったが、一貫して減少したものの、2015年度にはやや増加し、2016年度には大幅に増加している。2017年度の結果は2016年度とほぼ変わらず、「あてはまる」26.4％と「まああてはまる」37.2％を合わせて63.6％となる。

「インターンシップ」への参加は増加傾向、「ボランティア」への参加は減少

「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」はやや増加傾向にあった。2017年度は４割半の人が「TA(ティーチング・アシスタント)が役に立った」と回答している

Ｑ２３　教員や教育制度との関係についてお聞きします。

TA(ティーチング・アシスタント)が機能していた

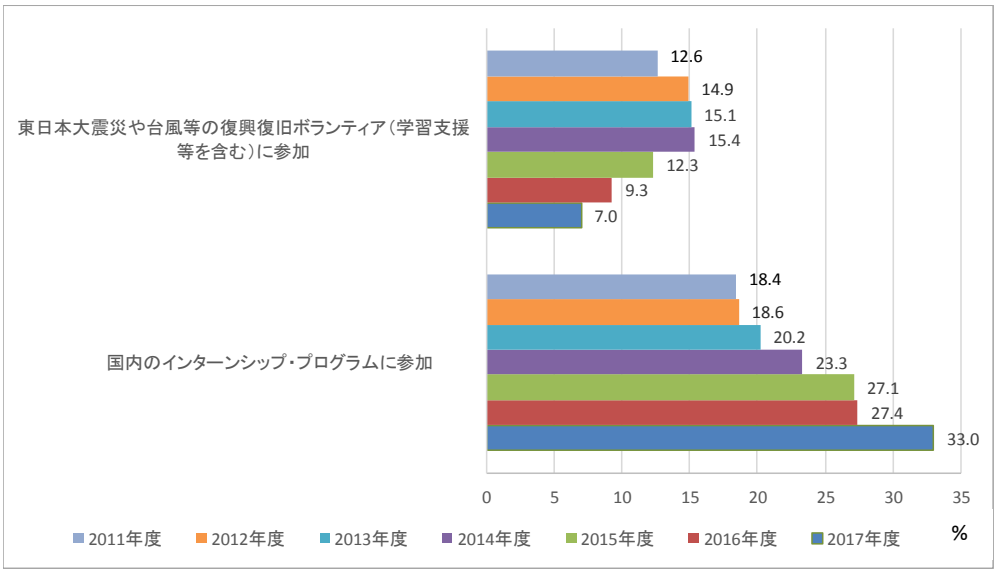


「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は、2008 年度は「あてはまる」10.1％と「まああてはまる」33.8％を合わせて 43.9％であったが、その後割合が増えたり減ったりしている。2016 年度より、「TA(ティーチング・アシスタント)が役に立った」と設問を修正した。2017 年度では、「あてはまる」15.6％と「まああてはる」28.9％を合わせて 44.5％の回答者が TA　のことを評価し、2016 年度より 3.1％の増加である。ただし、ＴＡのいる授業を経験していない者もいることに留意する必要がある。

「ボランティア」に参加した者の割合は増加傾向にあったが、2015年度以降は減少傾向。「インターンシップ」に参加した者の割合は増加傾向、2017年度は大幅に増加

Ｑ１２　国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)／国内のインターシップ・プログラムに参加した

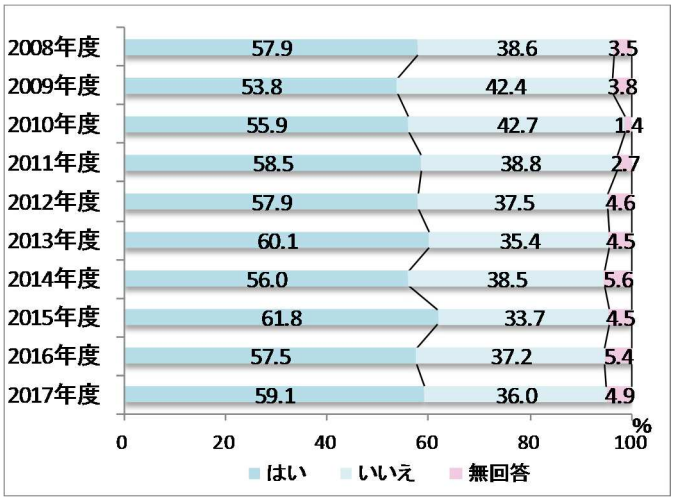


「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等も含む)に参加」した者の割合も2011年12.6%、2012年度14.9%、2013年度15.1%、2014年度15.4%と着実に増加していたが、2015年度は12.3%に減少している。2016年度より質問文の「東日本大震災」を「震災」に変更したが、9.3%と減少した。2017年度回答者の7.0%が参加したと答え、前年度より2.3%減少している。「国内のインターンシップ・プログラムに参加」した者の割合は、2011年度18.4%、2012年度18.6%、2013年度20.2%、2014年度23.3%、2015年度27.1%、2016年度27.4%、2017年度33.0%と着実に増加している。

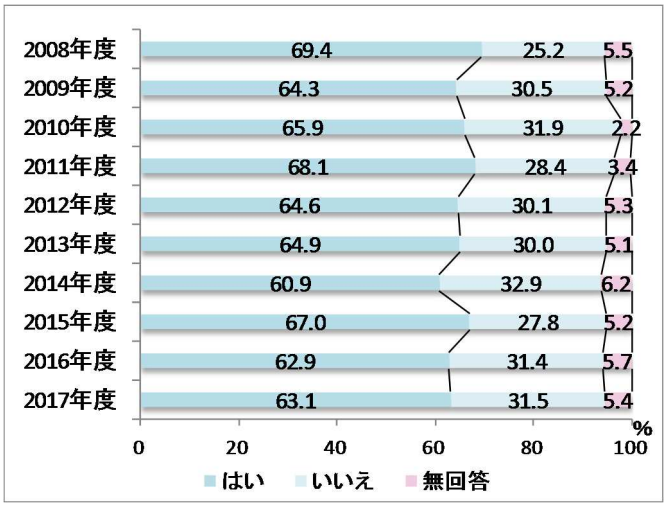
「他学部の科目の聴講」と「他学科の科目の聴講」は年度によりやや増減する

Ｑ１５　他学部聴講等についてお聞きします。

Ａ．他学部の科目の聴講をしたことがある



Ｂ．他学科の科目の聴講をしたことがある



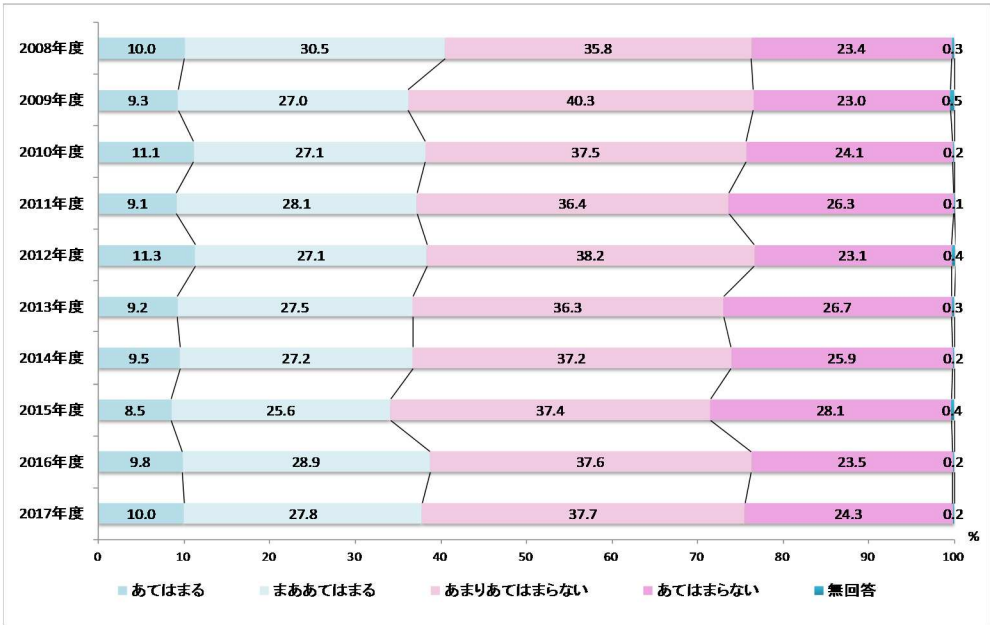
「他学部の科目を聴講したことのある」者の割合は、2008 年度 57.9%から、2011 年度の 58.5%まで増加していたが、2012 年度以降は年度によって増減し、2015 年度は 61.8%とこれまでで最高となったものの、2016 年度は 57.5%に低下し、2017 年度は 59.1%に増えている。また、「他学科の科目の聴講」も同様に年度による増減はあるが、2008 年度の 69.4%から 2014 年度の 60.9%に減少したあと、2015 年度には 67.0%へと増加したが、2017 年度の結果は 2016 年度とほぼ変わらず、63.1%に減少している。

評価が下がったり、経験している割合が低くなっている項目もある

「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者はやや減少傾向だったが、2016年度は増加、2017年度はわずかに減少

Ｑ８　入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた

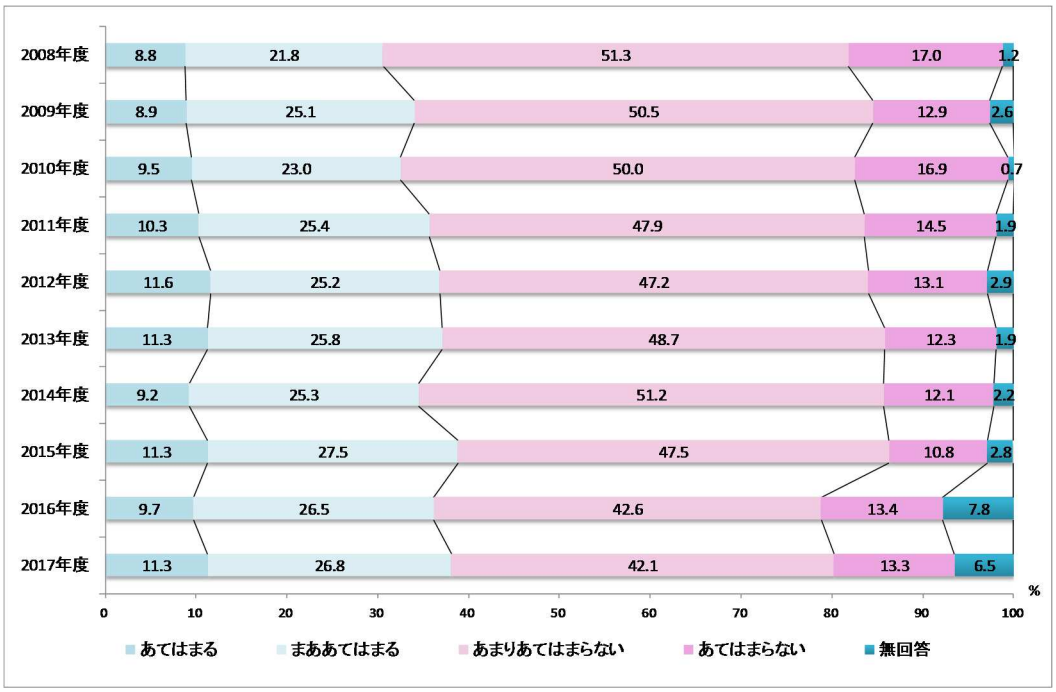


入学時の様子について、「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、年度ごとに増減はあるが、2008 年度「あてはまる」10.0%と「まああてはまる」30.5%を合わせて 40.5%であった。その後、やや減少傾向にあったものの、2016 年度は 38.7%に増加し、2017 年度はわずかに減少し 37.8%になっている。

「必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった」はやや増加傾向、近年わずかに増減している

Ｑ２２　大学のカリキュラムについてお聞きします。

必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった

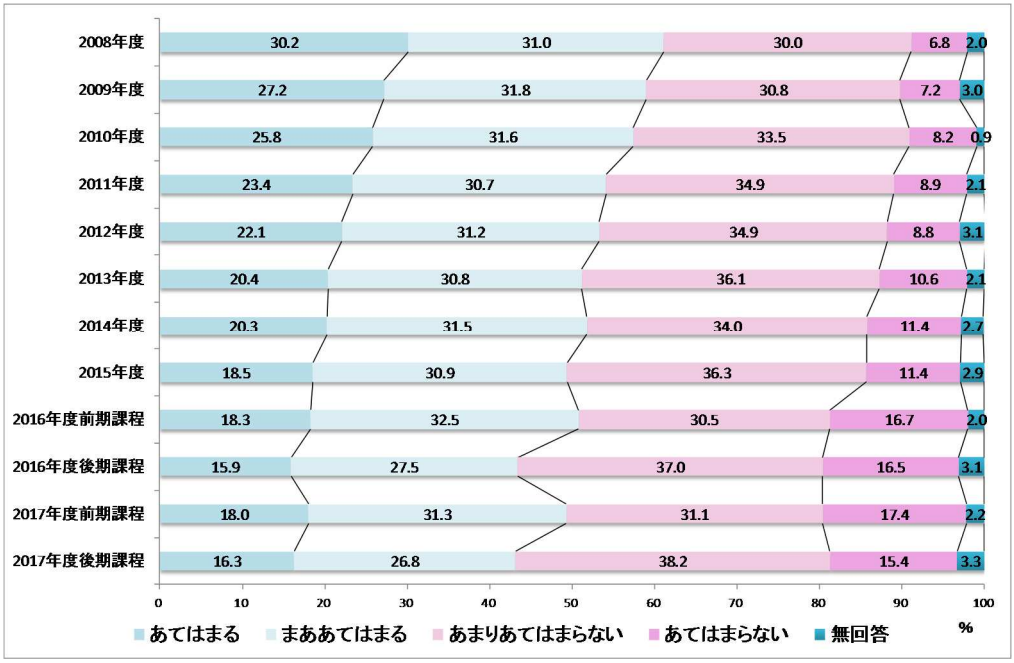


「必修科目が多くえって自分のやりことができなかった 2008 年度は「あてる」8.8%と「まああてはまる」21.8%を合わせて 30.6%であったが、2013 年度まで 37.1%と年々増加傾向にあったが、2014 年度以降はわずかに増減している。2017 年度には、「あてはまる」11.3%と「まああてはまる」26.8%を合わせて 38.1%となっている。なお、2016 年度調査では、質問文から「かえって」を削除している。

「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は大幅に減少傾向。前期課程、後期課程別にたずねた2016年度と2017年度では、ほぼ変化なし

Ｑ９　大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

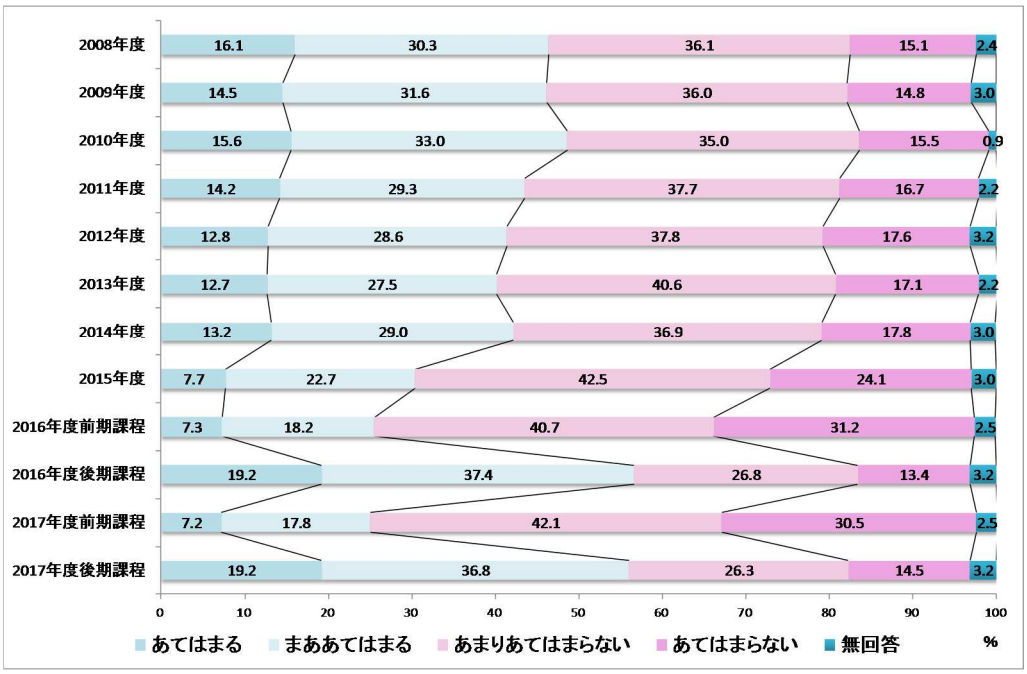
よく自分の専門以外の本を読んだ



大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は 2008 年度には「あてはまる」30.2％と「まああてはまる」31.0％を合わせて 61.2％であったが、その後減少傾向にあり、2015 年度には 49.4％に減少している。2016 年度より、前期課程と後期課程の状況をそれぞれたずねている。2017 年度には、前期課程のあてはまる割合は 49.3％（「あてはまる」18.0％と「まああてはまる」31.3％を合わせて）、後期課程のあてはまる割合は 43.1％（「あてはまる」16.3％と「まああてはまる」26.8％を合わせて）、それぞれ 2016 年度の結果とほぼ変わらない。

「社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ」者も減少傾向にある。2016年度、2017年度の後期課程では５割半があてはまる

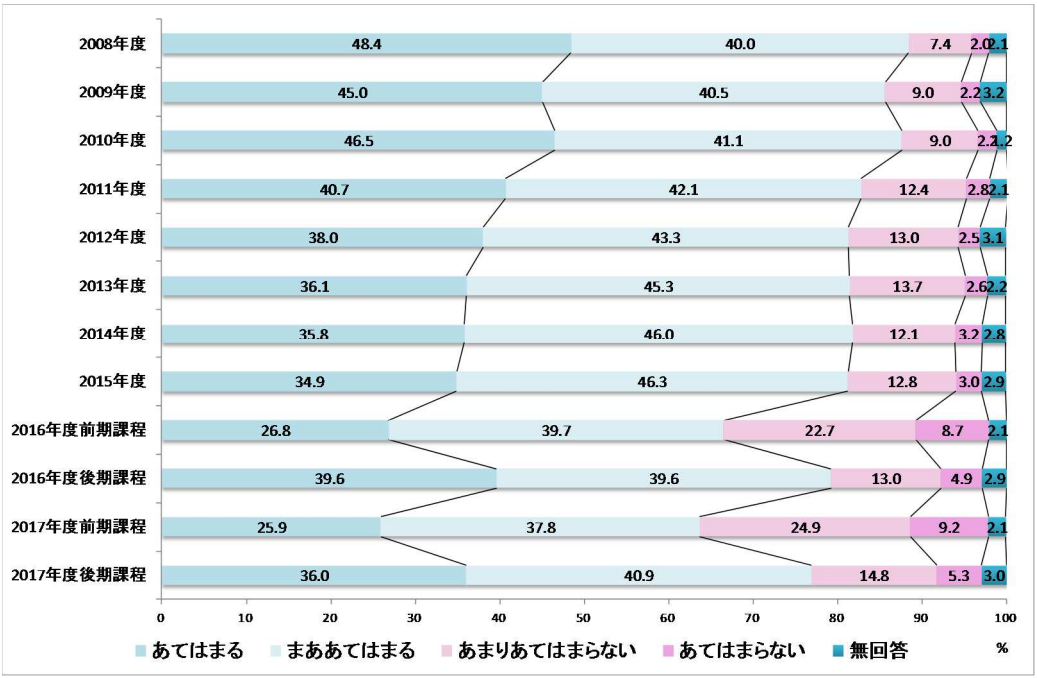
社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ



「社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ」は、2008 年度には「あてはまる」16.1％と「まああてはまる」30.3％を合わせて 46.4％であったが、若干の増減はあるものの、減少傾向にあり、2014 年度は合わせて 42.2％となっていた。2015 年度は質問文を「学術雑誌をよく読んだ」に変更し、あてはまる割合は 30.4％に減少している。2016 年度よりさらに、質問文を「専門書や学術雑誌をよく読んだ」に変更し、前期課程と後期課程の状況をそれぞれたずねている。2017 年度のあてはまる割合は、前期課程では 25.0％（「あてはまる」7.2％と「まああてはまる」17.8％を合わせて）であるのに対して、後期課程では 56.0％（「あてはまる」19.2％と「まああてはまる」36.8％を合わせて）、それぞれ 2016 年度とほぼ変わらない。

「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合も減少傾向。2017年度は前期後期を問わず、2016年度よりわずか減少

議論したり考えたりする友達を得られた

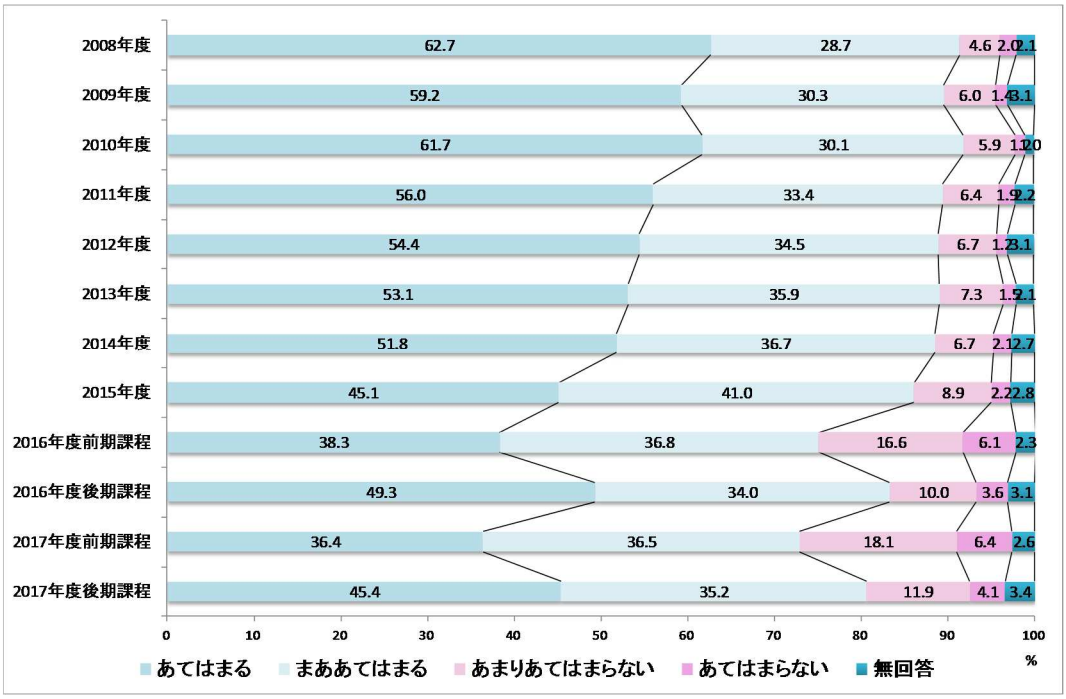


「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」48.4%と「まああてはまる」40.0%を合わせて88.4%であったが、年度ごとに多少の増減はあるものの年々減少傾向にあり、2015年度には81.2%に減少している。

なお、2015年度より、「議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」と質問文を一部変更している。2017年度では、前期課程のあてはまる割合は63.7%(「あてはまる」25.9%と「まああてはまる」37.8%を合わせて)で、後期課程のあてはまる割合は76.9%(「あてはまる」36.0%と「まああてはまる」40.9%を合わせて)となり、両方とも2016年度より減少している。

「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合も減少傾向。2017年度は前期後期を問わず、2016年度よりやや減少

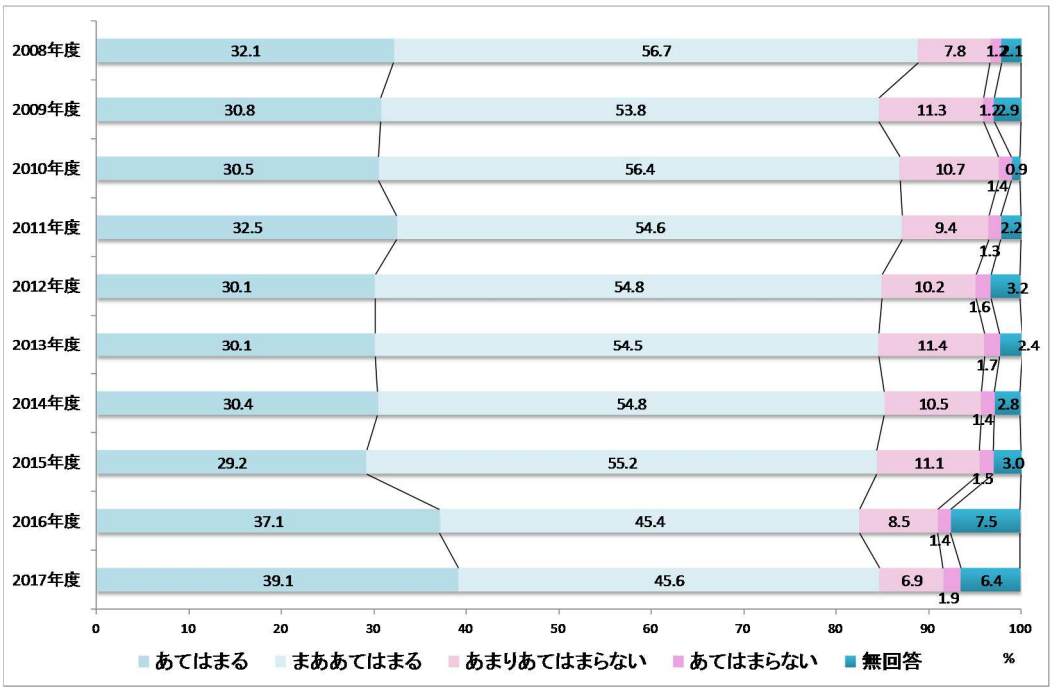
優れた友人に感心したり感化されたりした



「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」62.7%と「まああてはまる」28.7%を合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2014年度には88.5%であったが、2015年度には86.1%に減少している。とりわけ、「あてはまる」者のみの割合では、2008年度の62.7%から2015年度の45.1%へと大幅に減少している。また2015年度より、「優れた友人に感化された」と質問文を一部変更している。2017年度のあてはまる者の割合は前期課程では72.9%(「あてはまる」36.4%と「まああてはまる」36.5%を合わせて)、後期課程では80.6%(「あてはまる」45.4%と「まああてはまる」35.2%を合わせて)、両方とも2016年度よりやや減少している。

「自分なりのものの考え方を得られた」者もわずかに減少傾向、2016年度と2017年度は増加

Ｑ２１　自分なりのものの考え方を得られた

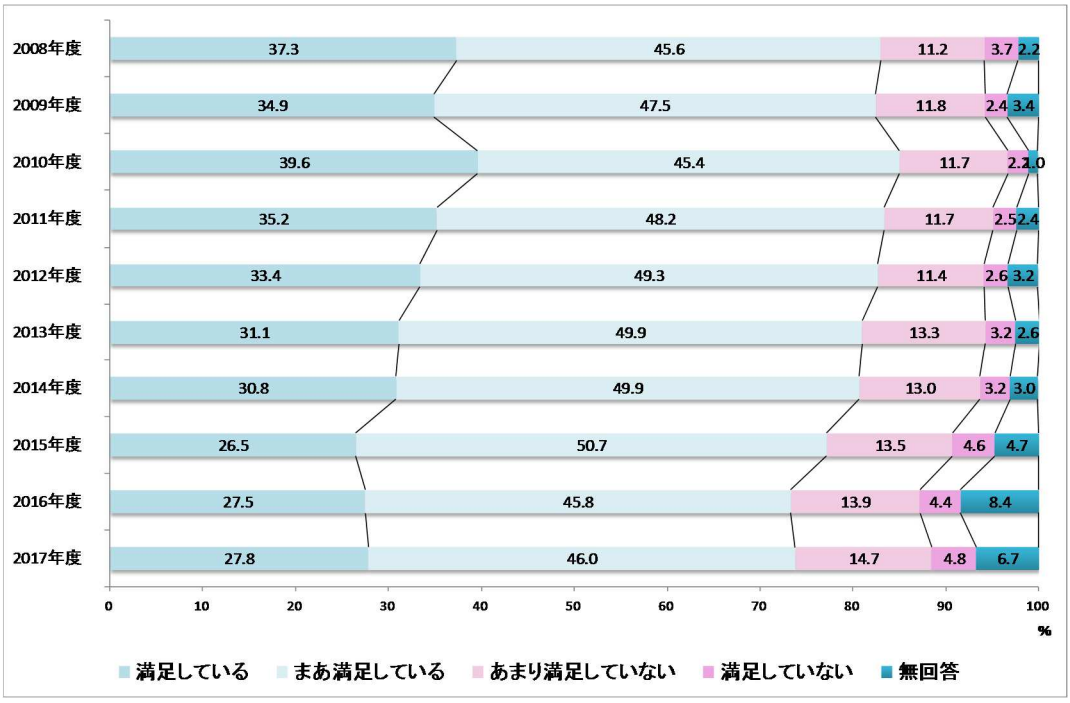


「自分なりのものの考え方を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」32.1%と「まああてはまる」56.7%を合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、やや減少傾向にある。2017年度には84.7%(「あてはまる」39.1%と「まああてはまる」45.6%を合わせて)、2016年度よりわずかに増加している。とりわけ「あてはまる」割合が39.1%に増加している。

図書館などの学習施設の満足度は明らかに減少傾向

Ｑ２６　あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

図書館などの学習施設



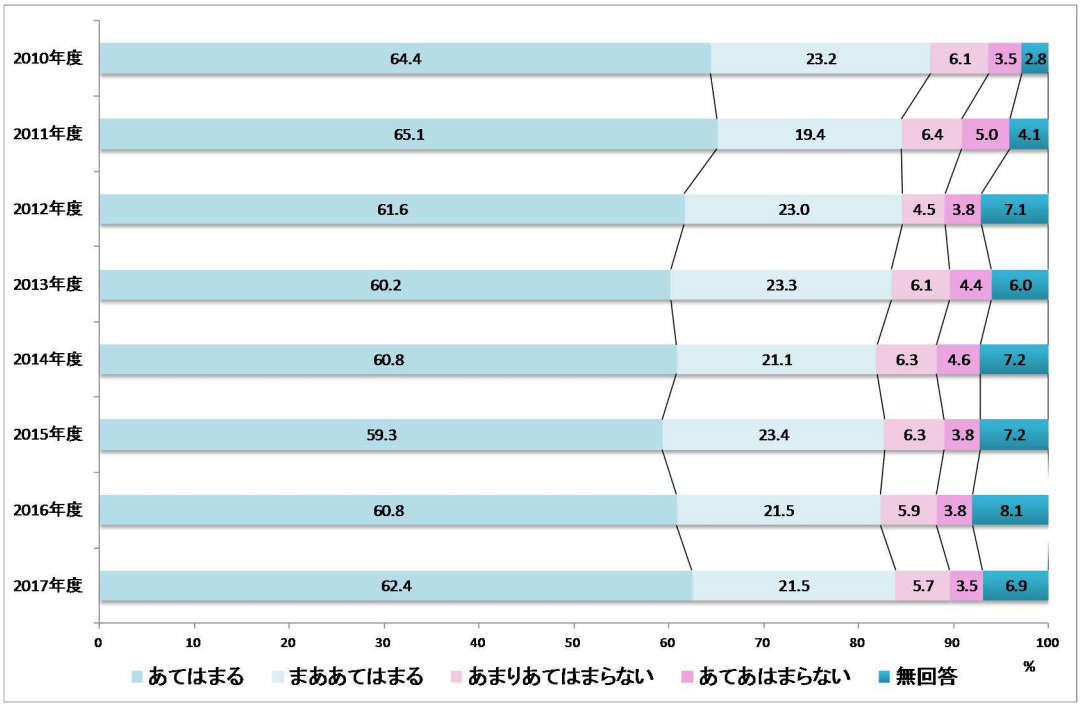
図書館などの学習施設についての満足度は、年々低下する傾向にある。2008年度は「満足している」37.3%と「まあ満足している」45.6%を合わせて82.9%と8割以上が満足していたが、2017年度には「満足している」27.8%と「まあ満足している」46.0%を合わせて73.8%となっている。2016年度とほぼ変わらない。

進学振分けについては小幅な変化

「進学先を希望通りに決めることができた」者は減少傾向、2017年度はわずかに増加

Ｑ２４　進学振分けや進学先についてお聞きします。

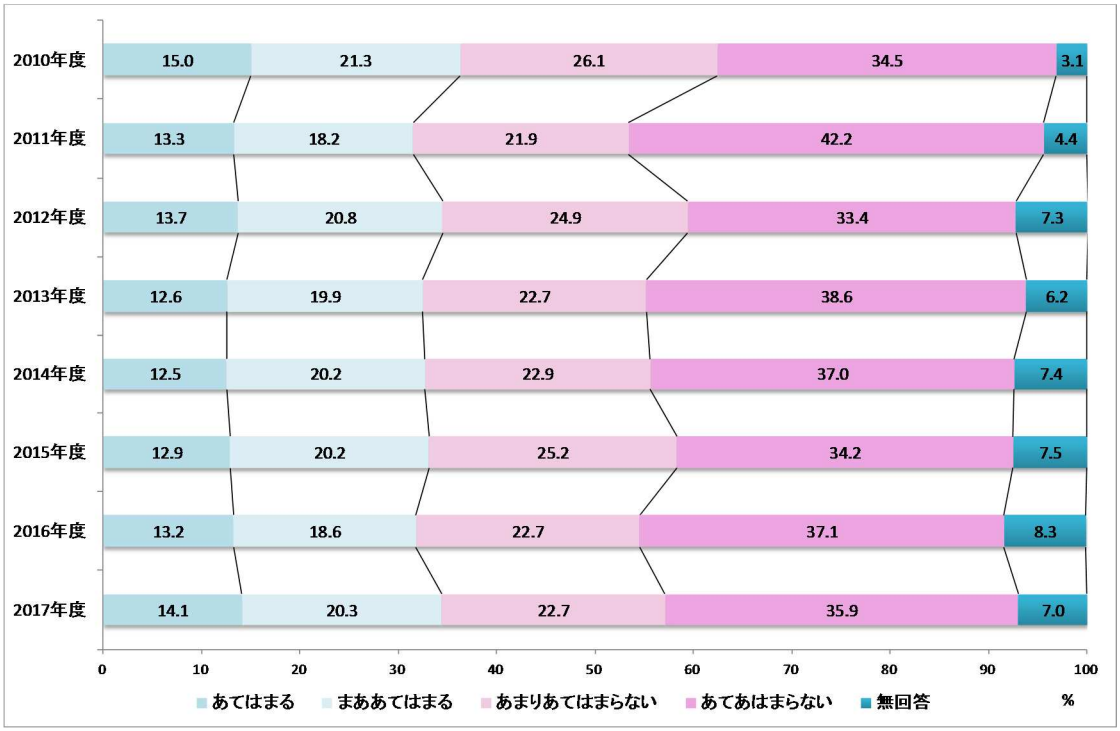
進学先を希望通りに決めることができた



「進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010 年度は「あてはまる」64.4％と「まああてはまる」23.2％を合わせて 87.6％であったが、わずかであるものの、減少傾向にあった。2017 年度には「あてはまる」62.4 ％と「まああてはまる」21.5％を合わせて 83.9％で、2016 年度よりわずかに増加している。

「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者はわずかに増減

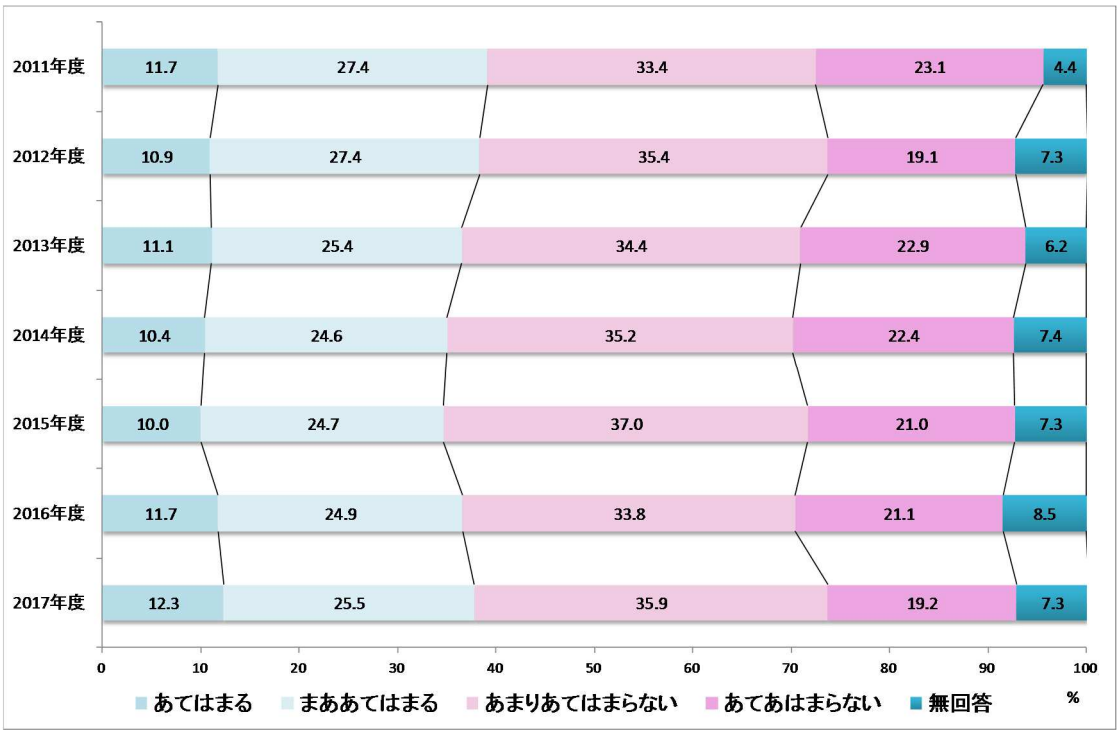
途中で興味が変わって進学希望を考え直した



「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010 年度は「あてはまる」15.0％と「まああてはまる」21.3％を合わせて 36.3％であったが、年度ごとに増減があり、2017 年度には「あてはまる」14.1％と「まああてはまる」20.3％を合わせて 34.4％と、前年度より 2.6％増加している。

「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者はやや減少傾向だったが、2016年度と2017年度はわずかに増加

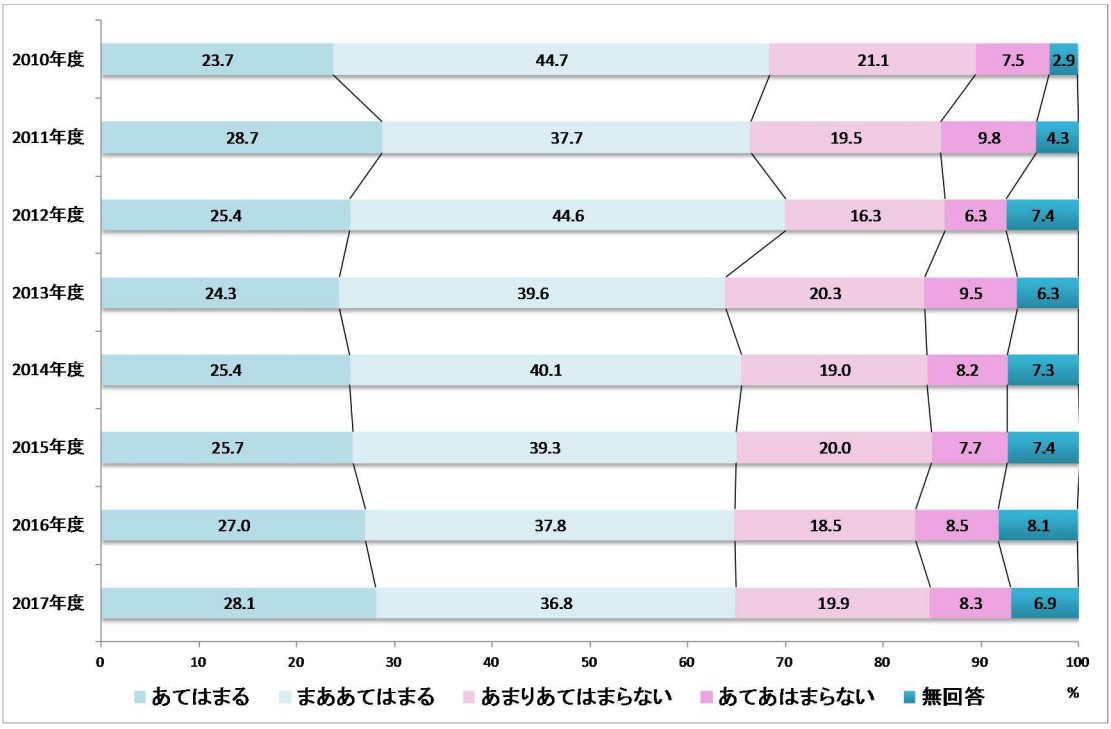
現在の進振り制度は複雑すぎる



「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者は、2011 年度は「あてはまる」11.7%と「まああてはまる」27.4%を合わせて 39.1%であったが、年々わずかに減少傾向にあったが、2017 年度には「あてはまる」12.3%と「まああてはまる」25.5%を合わせて 37.8%と、2 年連続の増加である。

「進学先はイメージしていた通りだった」者は年度ごとに増減、近年「あてはまる」割合がやや増加傾向

進学先は進学前にイメージしていた通りだった

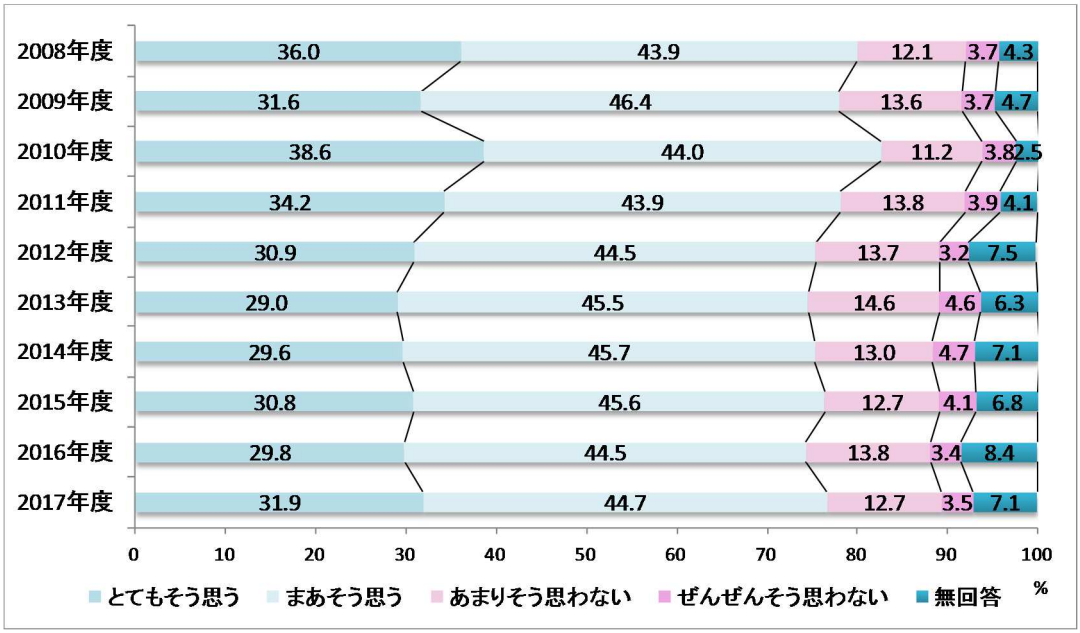


「進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、2010 年度は「あてはまる」23.7%と「まああてはまる」44.7%を合わせて 68.4%であったが、年度ごとに増減があり、2013 年度には「あてはまる」24.3%と「まああてはまる」39.6%を合わせて 63.9%とやや減少傾向にあった。2017 年度は「あてはまる」28.1%と「まああてはまる」36.8%を合わせて 64.9%となっている。

「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深める」現行方式の支持はやや減少傾向

Ｑ２５　専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

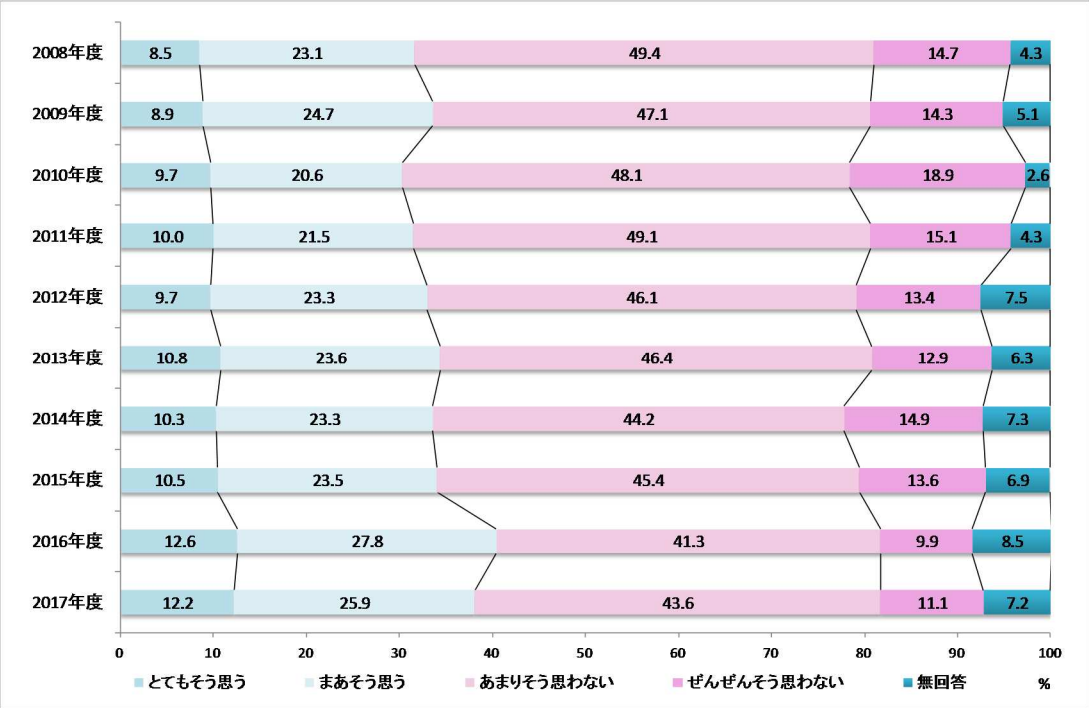
前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい



「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008 年度は「とてもそう思う」36.0%と「まあそう思う」43.9%を合わせて 79.9%であったが、2010 年度の 82.6%をピークにやや減少傾向にある。2017 年度では「あてはまる」31.9%と「まああてはまる」44.7%を合わせて 76.6%と、2016 年度よりわずかに増加している。

「入学時点から専門を決めて、それを４年間で学んでいく」方式の支持はやや増加傾向、2017年度はわずか減少

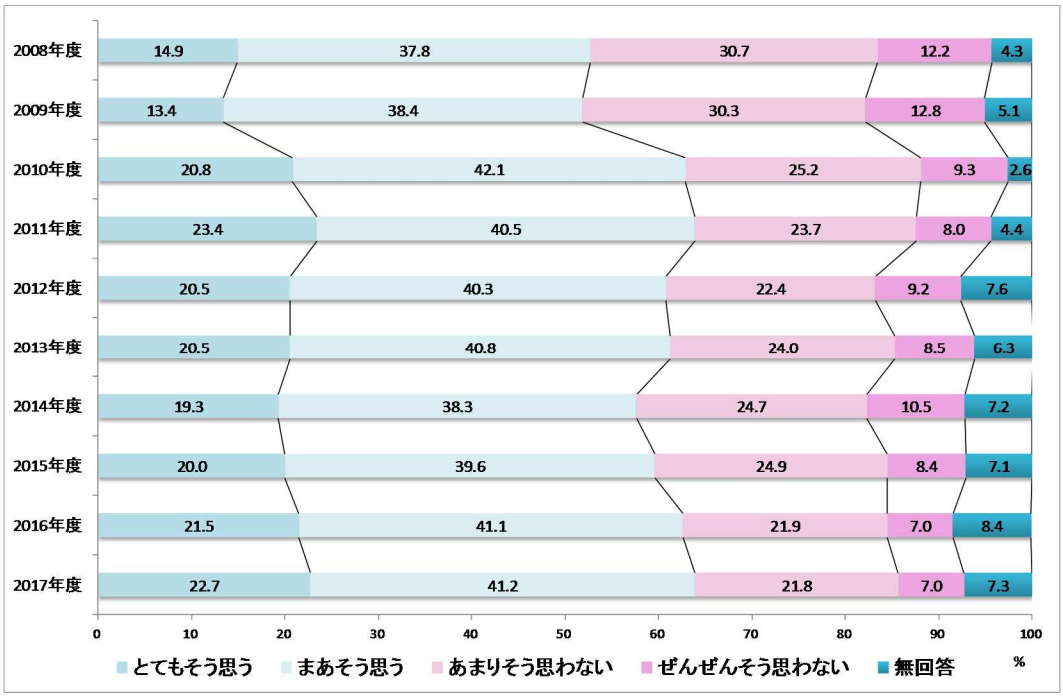
入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい



これに対して、「入学時点から専門を決めて、それを４年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%と「まあそう思う」23.1%を合わせて 31.6%であったが、2010年度にやや減少したものの、その後増加傾向にあり、2017 年度では、38.1%(「あてはまる」12.2%と「まああてはまる」25.9%を合わせて)と2016年度より2.3%減少している。

「後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」はやや増加傾向

後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい



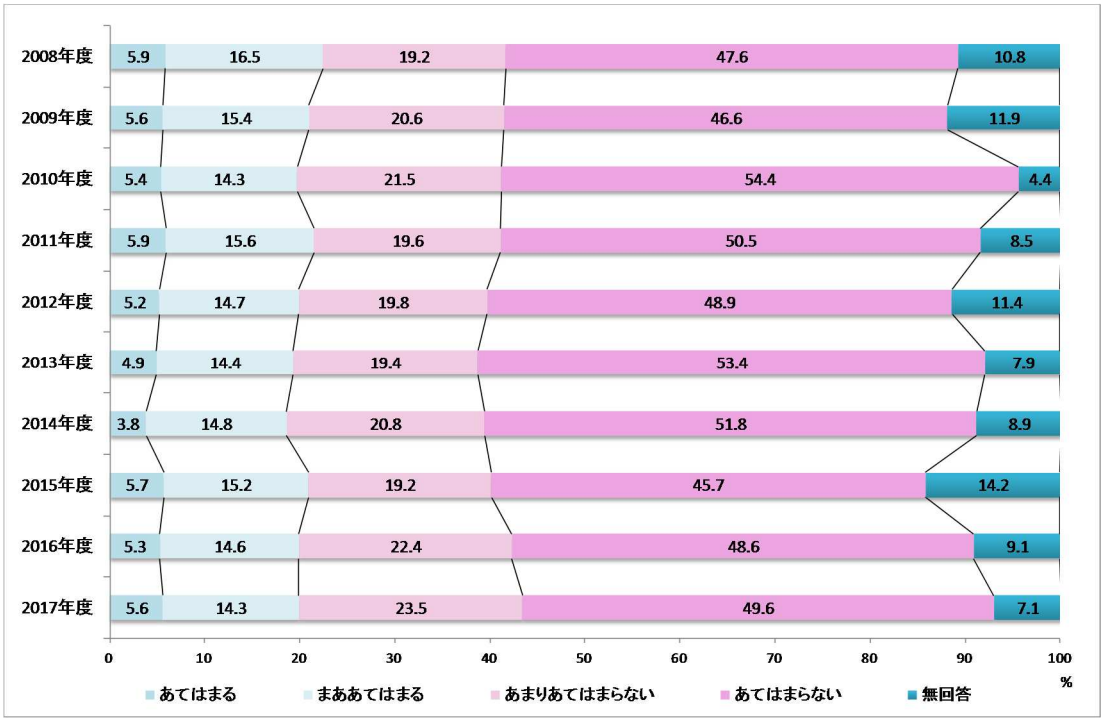
前二者の中間の方式として、「C．後期課程でも引き続き語学や教養を学んでいくやり方がよい」を支持する者は、年度によって増減しているが、近年はやや増加傾向である。2017 年度は、63.9%と 2016 年度より 1.3%の増加となっている。

なお、この質問は、2015 年度までは「前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学んでいくやり方がよい」となっていた。

卒業後の進路に関連して、肯定的な傾向も否定的傾向も見られる
「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者は、年度ごとにわずか増減

Ｑ２８ あなたの卒業後の進路と決定プロセスについてお聞きします。

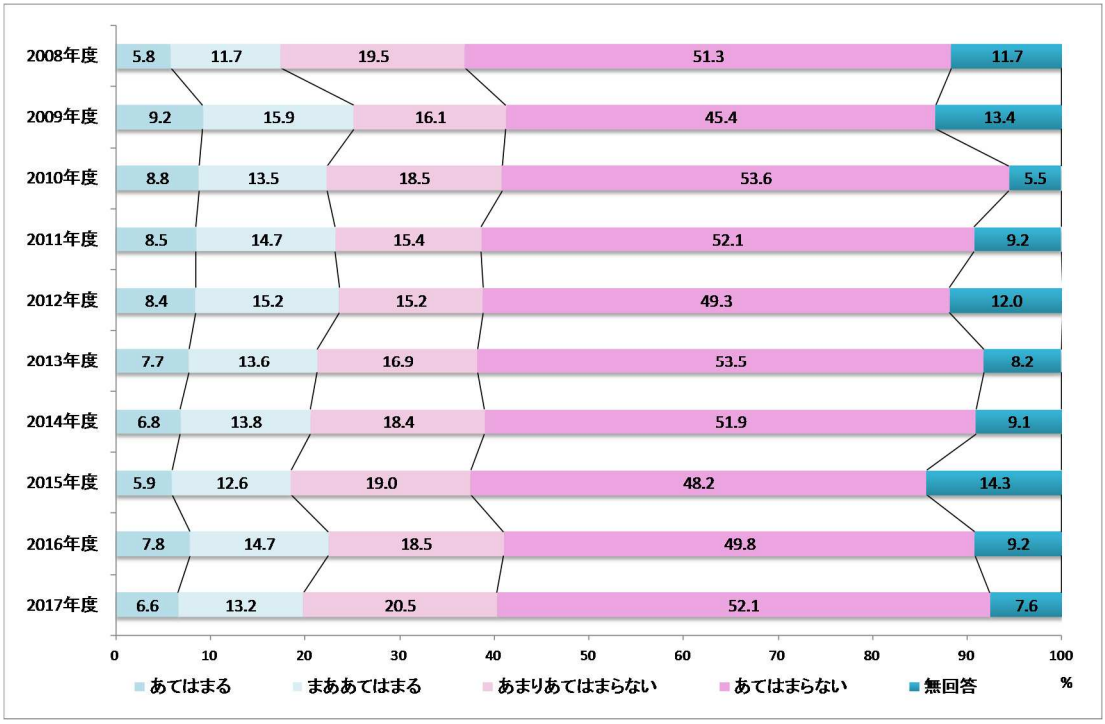
就職活動のために勉強の時間がとれなかった



「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者の割合は、2008 年度は「あてはまる」5.9%と「まああてはまる」16.5%を合わせて 22.4%であったが、年毎の増減はあるものの、2017 年度には合わせて 19.9%で、2016 年度と変わらない。

「厳しい就職活動となった」者はやや減少傾向にあったが、2016年度増加、2017年度わずかに減少

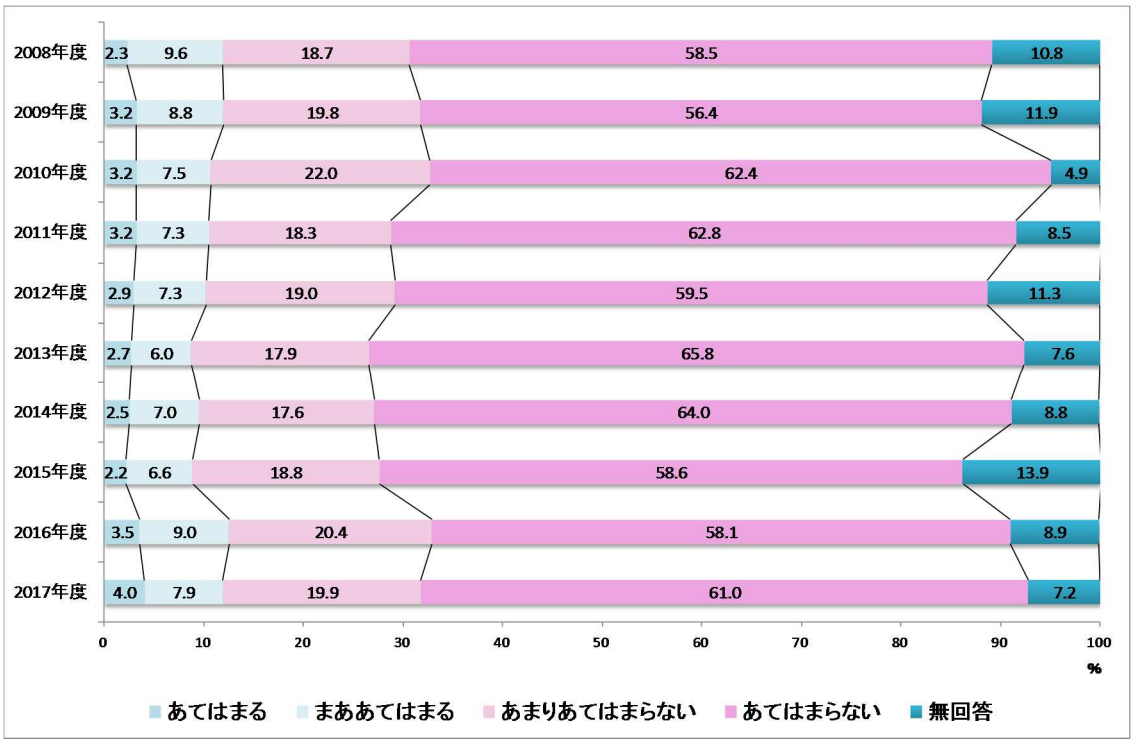
厳しい就職活動となった



「厳しい就職活動となった」者の割合は、2008 年度は「あてはまる」5.8％と「まああてはまる」11.7％を合わせて 17.5％であったものが、2009 年度には 25.1％と増加している。その後、わずかに増減しているが、減少傾向にあった。2016 年度には 22.5％に増加、2017 年度には 19.8％に減少している。

「経済状況を考えて進路を変更した」者も減少傾向にあったが、2016年度と2017年度はやや増加

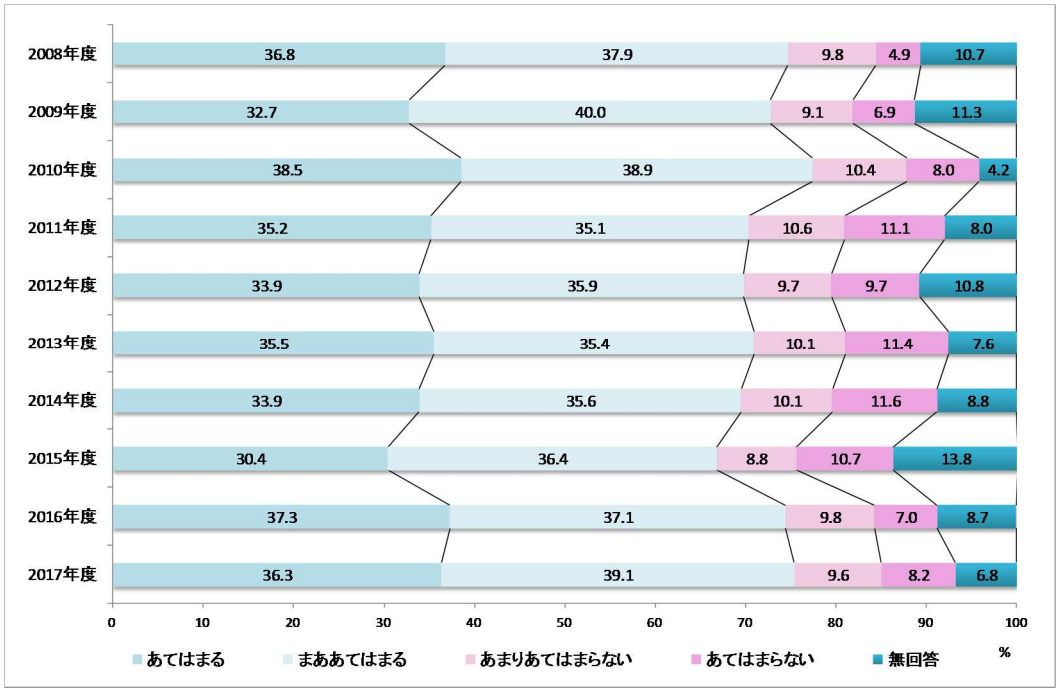
経済状況を考えて進路を変更した



経済状況を考えて進路を変更したものは、やや減少傾向にあったが、2016 年度は「あてはまる」3.5％と「まああてはまる」9.0％を合わせて 12.5％と 2015 年度の 8.8％から約 4％増加している。2017 年度は合わせて 11.9％で、前年度よりわずかに減少している。

「満足のいく進路決定ができた」者もやや減少傾向にあったが、2016年度と2017年度は増加

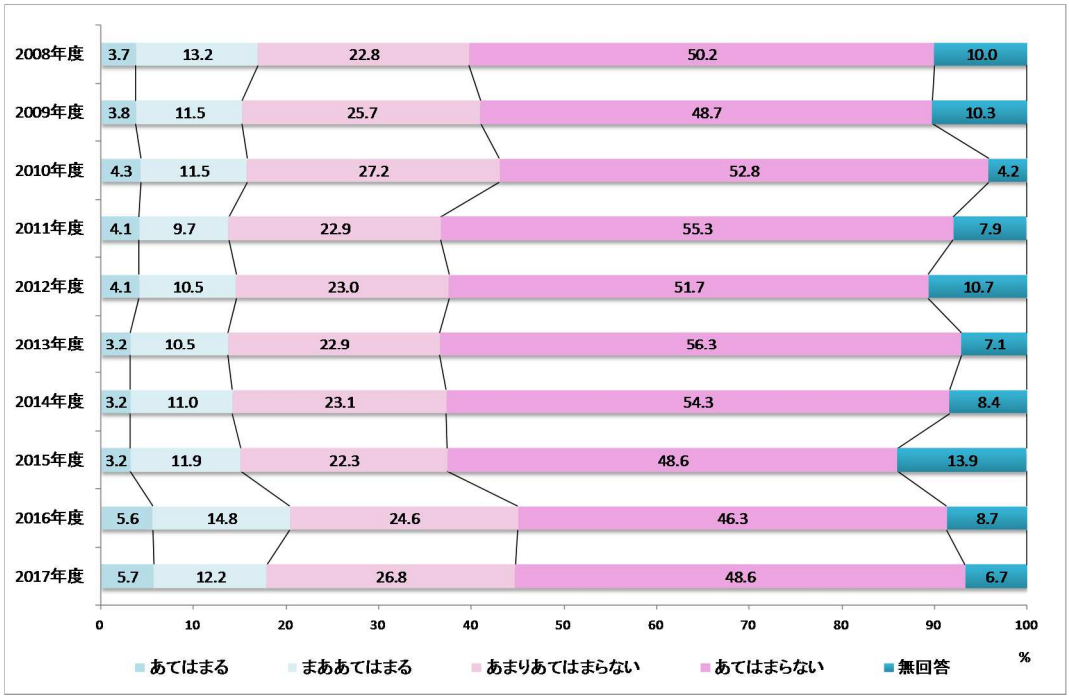
満足のいく進路決定ができた



「満足のいく進路決定ができた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」36.8%と「まああてはまる」37.9%を合わせて74.7%であったが、2010年度の77.4%をピークに減少し、2015年度には66.8%まで減少した。2016年度は74.4%と増加し、2017年度は75.4%(「あてはまる」36.3%と「まああてはまる」39.1%を合わせて)で、2016年度よりわずかに増加している。

「大学の進路相談の機会が役に立った」者はやや減少傾向だったが、2016年度増加、2017年度減少

大学の進路相談の機会が役に立った

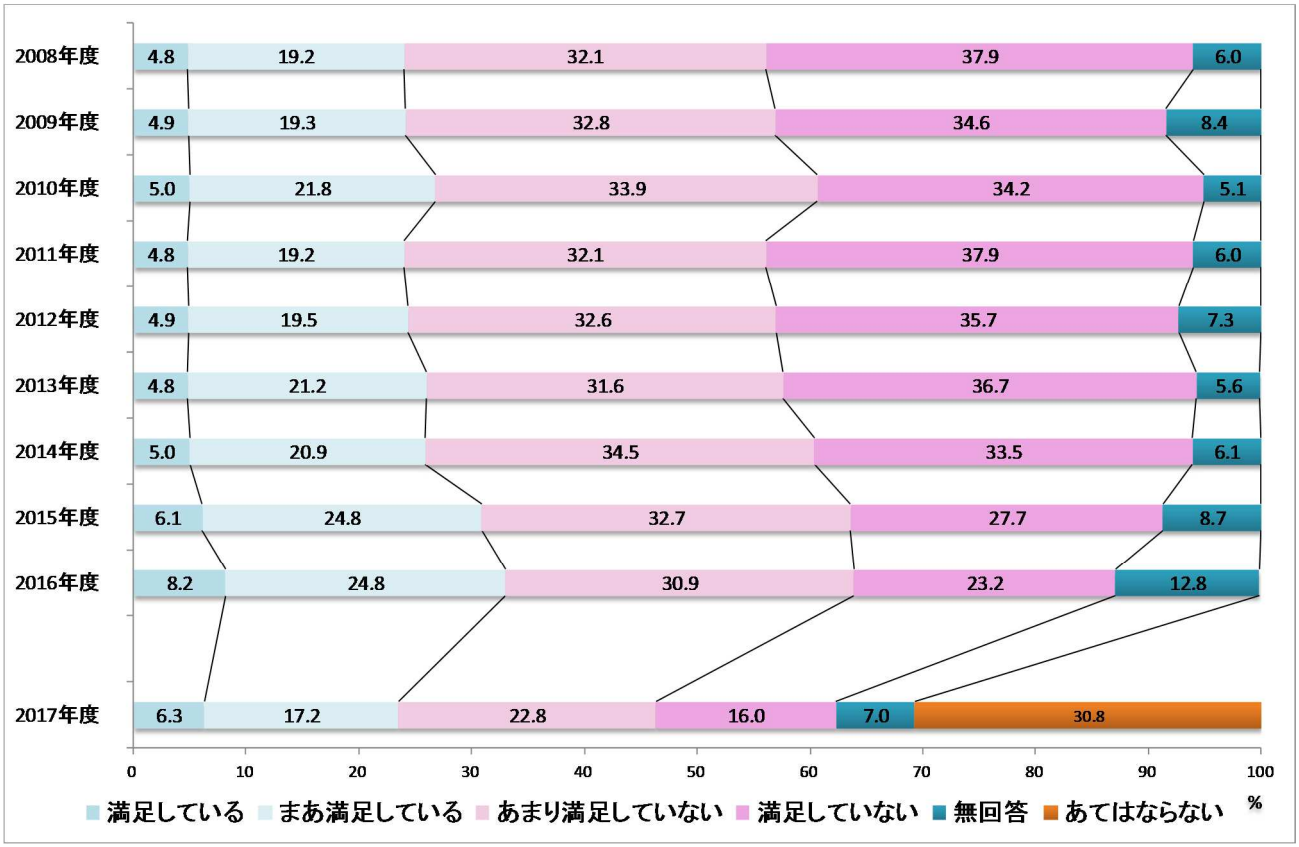


「大学の進路相談の機会が役に立った」者の割合は、2008年度は「あてはまる」3.7%と「まああてはまる」13.2%を合わせて16.9%であった。その後、年度ごとに増減を繰り返すが、減少傾向にあった。2016年度は20.4%に増加し、2017年度は17.9%(「あてはまる」5.7%と「まああてはまる」12.2%を合わせて)に減少している。調査を始めて以来、「大学の進路相談の機会が役に立った」と回答した者の割合は2016年度が最も大きい。

就職指導の満足度は増加傾向、しかし満足している者は３分の１にとどまる

Ｑ２６　あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

就職指導



就職指導の満足度は 2008 年度は「満足している」4.8％と「まあ満足している」19.2％を合わせて 24.0％と約４分の１が満足していたにすぎない。その後増加傾向にあり、2016 年度には、「満足している」8.2％と「まあ満足している」24.8％を合わせて 33.0％と３分の１に増加している。2017 年度に新たに設けた選択肢「あてはまらない」は回答者の 30.8％を占め、「満足している」6.3％と「まあ満足している」17.2％を合わせて 23.5％となる。しかし、就職指導にあてはまる回答者のみ見た場合、33.9％の人が満足しているという結果になる（図表略）。

大学教育の達成度調査(2008年度-2017年度) 回収率　　2018年6月1日現在

	2008年度			2009年度			2010年度			2011年度			2012年度		
	卒業者数	回収枚数	回収率	卒業者数	回収枚数	回収率	卒業者数	回収枚数	回収率	卒業者数	回収枚数	回収率	卒業者数	回収枚数	回収率
法 学 部	433	152	*35.1*	409	156	*38.1*	398	32	*8.0*	425	407	*95.8*	407	395	*97.1*
医 学 部	133	23	*17.3*	129	19	*14.7*	109	20	*18.3*	121	18	*14.9*	124	112	*90.3*
工 学 部	907	93	*10.3*	925	437	*47.2*	943	681	*72.2*	978	631	*64.5*	950	630	*66.3*
文 学 部	336	42	*12.5*	291	263	*90.4*	370	265	*71.6*	352	272	*77.3*	360	303	*84.2*
理 学 部	305	225	*73.8*	277	202	*72.9*	293	228	*77.8*	318	240	*75.5*	282	239	*84.8*
農 学 部	279	258	*92.5*	272	247	*90.8*	267	245	*91.8*	279	257	*92.1*	266	233	*87.6*
経済学部	349	275	*78.8*	359	330	*91.9*	358	349	*97.5*	333	304	*91.3*	329	287	*87.2*
教養学部(後期課程)	165	35	*21.2*	141	25	*17.7*	184	21	*11.4*	154	144	*93.5*	186	148	*79.6*
教育学部	96	40	*41.7*	102	29	*28.4*	101	20	*19.8*	110	105	*95.5*	99	96	*97.0*
薬 学 部	90	84	*93.3*	78	73	*93.6*	78	75	*96.2*	91	90	*98.9*	86	81	*94.2*
合計	3093	1227	*39.7*	2983	1781	*59.7*	3101	1936	*62.4*	3161	2468	*78.1*	3,089	2,524	*81.7*

	2013年度			2014年度			2015年度			2016年度			2017年度		
	卒業者数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率
法 学 部	427	387	*90.6*	399	389	*97.5*	392	365	*93.1*	395	367	*92.9*	404	382	*94.6*
医 学 部	124	121	*97.6*	126	113	*89.7*	131	124	*94.7*	136	121	*89.0*	119	109	*91.6*
工 学 部	967	669	*69.2*	974	610	*62.6*	958	639	*66.7*	994	658	*66.2*	994	760	*76.5*
文 学 部	361	294	*81.4*	372	318	*85.5*	311	273	*87.8*	338	279	*82.5*	279	238	*85.3*
理 学 部	282	203	*72.0*	301	228	*75.7*	292	206	*70.5*	314	243	*77.4*	301	221	*73.4*
農 学 部	267	234	*87.6*	275	241	*87.6*	269	243	*90.3*	255	219	*85.9*	268	213	*79.5*
経済学部	334	292	*87.4*	365	284	*77.8*	325	250	*76.9*	352	201	*57.1*	331	236	*71.3*
教養学部(後期課程)	186	158	*84.9*	175	156	*89.1*	171	143	*83.6*	184	137	*74.5*	217	141	*65.0*
教育学部	99	99	*100.0*	90	75	*83.3*	99	98	*99.0*	90	80	*88.9*	101	94	*93.1*
薬 学 部	86	80	*93.0*	82	80	*97.6*	89	86	*96.6*	82	65	*79.3*	78	69	*88.5*
合計	3133	2537	*81.0*	3,159	2,494	*78.9*	3,037	2,427	*79.9*	3,140	2,370	*75.5*	3,092	2,463	*79.7*

大学総合教育研究センター　ホームページ　：http://www.he.u-tokyo.ac.jp/

問い合わせ：大学改革基礎調査部門　　担当:小林・王(内線：22016) まで